三重県桑名市

愛宕山城跡発掘調査報告書

２００６

桑名市教育委員会

三重県桑名市

愛宕山城跡発掘調査報告書

２００６

桑名市教育委員会

例　　言

1　本書は三重県桑名市大字矢田字城山、大字東方字徳成に所在する愛宕山城跡（市遺跡№98）の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は宅地造成及び、駐車場造成にかかる事前緊急調査として、原因者負担を受けて行った。

3　現地での調査は平成17年12月５日から平成18年３月31日にかけて実施した。室内での整理作業は現地調査終了後、平成18年４月１日から８月31日にかけて実施した。

4　調査体制は以下のとおりである。

調査主体　　桑名市教育委員会
調査受託機関　　株式会社イビソク
調査員　　斉藤理（桑名市教育委員会）　＊調査担当
　　持田透（株式会社イビソク）

なお、文化財保護法に基づく諸手続及び調整事務等については水谷芳春(桑名市教育委員会)が担当し、遺物整理及び報告書作成については宇佐見亜紀(桑名市教育委員会)の協力を得た。

5　本報告は斉藤理、水谷憲二（桑名市教育委員会臨時職員)、水谷芳春、持田透、黒澤一男（株式会社パレオラボ)、野村敏江（株式会社パレオラボ）が執筆した。執筆分担については目次に記した。

6　発掘調査及び本書の作成過程において、下記の機関、方々ににご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表す。

三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター、霞興業株式会社、
西羽晃（桑名市文化財審議会)、竹内英昭（三重県埋蔵文化財センター)、
水野裕之、服部哲也、纐纈茂、深谷淳（以上名古屋市見晴台考古資料館)、
柴田涼子、水谷吏江、奥田崇明、岡本広子、大原夕佳、長崎千明

7　本調査は、桑名東部開発株式会社の文化財に対する深いご理解のもと実施することができた。調査に対する格別のご協力、ご援助に対して厚く御礼申し上げる。

9　本調査に関する記録及び出土遺物等の諸資料は桑名市教育委員会で保管している。

目　　次

第１章　遺跡の概要
　第１節　遺跡の位置と環境　　（斉藤理）……1
　第２節　愛宕山城跡の歴史的変遷　　（水谷憲二）……1
第２章　調査に至る経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯　　（水谷芳春）……3
　第２節　試掘調査　　（斉藤理）……3
　第３節　調査の経過　　（持田透）……4
第３章　遺構　　（持田透）
　第１節　遺構……7
　第２節　下層遺構……12
第４章　遺物　　（斉藤理）……15
第５章　自然科学分析
　第１節　墓坑88検出骨について　　（黒澤一男）……21
　第２節　土坑38検出魚骨、貝類の同定　　（黒澤一男）……22
　第３節　炭化材の樹種同定　　（野村敏江）……25
第６章　まとめ
　第１節　縄文時代の遺構と遺物　　（斉藤理）……29
　第２節　古墳時代の遺構と遺物　　（斉藤理）……29
　第３節　近世地誌類にみる愛宕山城跡　（水谷憲二）……30
　第４節　戦国期の遺構　　（斉藤理）……31
　第５節　戦国期の遺物　　（斉藤理）……33
　第６節　愛宕山城跡の構造と築城の契機　　（斉藤理）……33

表　目　次

表１　出土遺物一覧表（１）……18
表２　出土遺物一覧表（２）……19
表３　出土遺物一覧表（３）……20
表４　愛宕山城跡検出貝類出土表……22
表５　愛宕山城跡の炭化材樹種同定結果……25

図　版　目　次

図版１　遺跡位置図（１/25000）
図版２　遺跡周辺地形図（１/2500）
図版３　調査区範囲及びグリッド設定図（１/500）
図版４　遺構平面図（１/200）
図版５　トレンチ１西壁断面図（１/100）
図版６　トレンチ３・４・５断面図（１/100）
図版７　土塁ベルト１南壁・土塁ベルト２東壁断面図（１/50）
図版８　堀断面図･掘立柱建物１平面･断面図（１/50）
図版９　土坑１・31、土坑27・溝３、土坑28・30・溝３、土坑20、柱穴８、ピット９、柱穴46平面・断面図（１/50）
図版10　土坑21・22・24平面・断面図（１/50）
図版11　土坑32、土坑69平面・断面図（１/50）
図版12　土坑38平面・断面図（１/50）
図版13　下層遺構平面図（１/200）
図版14　墓坑85・溝84平面・断面図
図版15　墓坑85、土坑87平面・断面図（１/50）
図版16　土坑71～75、土坑92、土坑93、ピット70平面・断面図（１/50）
図版17　遺物実測図１（１/３）
図版18　遺物実測図２（１/３）
図版19　遺物実測図３（１/３）
図版20　遺物実測図４（１/３）
図版21　遺物実測図５（１/３）

写真図版目次

写真図版１　遺構
写真図版２　遺構
写真図版３　遺構
写真図版４　遺構
写真図版５　遺構
写真図版６　遺構
写真図版７　遺構
写真図版８　遺構
写真図版９　遺構
写真図版10　遺構
写真図版11　遺物
写真図版12　遺物
写真図版13　遺物
写真図版14　遺物
写真図版15　遺物
写真図版16　遺物
写真図版17　遺物
写真図版18　遺物

第１章　遺 跡 の 概 要

第１節　遺跡の位地と環境

愛宕山城跡は三重県桑名市大字矢田字城山及び、大字東方字徳成に所在する。本遺跡の所在する桑名市は三重県北東部に位置しており、市域には木曾三川と呼ばれる揖斐川、長良川、木曽川が流れ、東は伊勢湾の最奥部に面する。

桑名市の南部を東西に流れる員弁川は、本遺跡付近で大きく南へ屈曲し伊勢湾へと注ぐ。後背には丘陵が広がっていたと考えられるが、現在は宅地造成により旧地形を窺い知ることはできない。

本遺跡は中世城館跡としてかねてよりよく知られており、比較的残存状況のよい遺跡と言えよう。

地表面で確認できる石造物として、江戸時代に造立された庚申碑10基余りが、土塁と思われる高まりに設置されている。これらの由来は明らかでないが、紀年銘や造立者の名等が記されており、近世期の貴重な資料と考えられる。

第２節　愛宕山城跡の歴史的変遷

戦国期、現在の走井山公園（桑名市大字矢田字城山）には、桑名市矢田周辺を治めていたとされる矢田半右衛門俊元の城館、矢田城があり、これより150mほど東北東の愛宕山には、同族である矢田市郎左衛門の矢田北辺城（愛宕山城）があり、矢田城と隣接していたといわれている。矢田城は、天正期、織田家の瀧川一益によって陥落したといわれ、太田牛一の『信長公記』によると、天正元年（1573）の長島一向一揆の制圧に出陣した織田信長は、桑名の小領主層を屈服させると、矢田城に瀧川一益を置き、城館を堅固にするよう命じたことが記されている。その後、矢田城を確認できる確かな史料は何もなく、文禄・慶長頃（1592～1615）には、桑名の拠点は桑名城に代わった。なお、矢田氏については、天正13年頃（1585）の「織田信雄分限帳」に、「矢田半右（左）衛門、五百六拾貫文、横・いかいノ郷」とあり、当時の伊勢国を治めていた織田信雄より、伊勢国桑名郡猪飼村（現桑名市多度町大字猪飼）の地を与えられており、その後も桑名藩の郷士として明治維新まで確認できる。

近世期になると、城館があった場所に、愛宕社とその別当の愛宕山養像院（修験宗当山派）があった。この社寺については、諸説様々な由来があるが、寛永～慶安頃（1624～51）に桑名市大字西方から矢田字城山の矢田北辺城跡に移されたといわれており、よって当地は愛宕山と呼ばれるようになる。近世末の『桑名日記』」には、「二月下旬三月始の頃の様ニ而、袷と襦袢ニて宜位故、此節梅林花盛り也、愛宕へ貸座敷、去年も又一棟出来、今日杯ハ風もあり寒ふけれと、貸座敷ハ賑やか也」（弘化元年〈1844〉１月９日条）、「昼より風も止、大分日向ハ暖故、走井山・愛宕梅林等仰山の人のよし、夫ニ愛宕ニも走山ニも貸座敷出来、家中ハめつたニ不借、毎日毎日、町の者、不絶貸座敷ニ見へ候よし、花見や風景の詠より皆たて込、ひそまり返り、能たのしミか有じやけな」（弘化２年〈1845〉１月20日条）とあるように、当時は梅林が広がる花見の名所で、春になると、桑名藩家中だけでなく、主に

桑名町人が花見に興じる憩いの場であったことが伺える。また、桑名佛眼院の「公私用留記」には、「相続講、鬮開之節、御役人衆御出張之義、盆前、愛宕養像院も申聞」（慶応２年〈1866〉９月６日条）とある。相続講とは、富札を売り出し、後日の抽選により当選者に賞金を与えるいわゆる富籤（または富突）と呼ばれるもので、佛眼院では建物の修繕費の捻出を名目に、桑名藩の許可を得て合法的に行われており、このような相続講が養像院でも行われていたことを示している。

明治維新になると、神仏分離の煽りを受けて、明治３年（1870）に養像院は廃され、住職は愛宕社の神主となった（『桑名郡志』下）。『桑名日記』にある貸座敷は、呑景楼と呼ばれる料亭となり、戦前頃まで営業していたようである（『桑名案内』）。

現在は、愛宕社も呑景楼も梅林もなく、今では鬱蒼とした雑木が生い茂り、当時の面影はなくなってしまったが、近世に造られた南の石段が残る。

第２章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成17年４月１日付教文第８号にて、桑名東部開発株式会社代表取締役松田信男より、宅地造成を開発目的に、桑名市大字矢田字城山245−４他、及び大字東方字徳成1598−２他地内の約2100㎡について、文化財の所在の有無及びその取扱いを照会する文書が桑名市教育委員会に提出された。市教育委員会は事業予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地である愛宕山城跡（市遺跡 No. 98）の範囲内のおおよそ北半分に該当し、開発を行う場合は文化財保護法の手続き、及び事前の発掘調査が必要な旨を回答した。

その後、試掘調査結果等を参考に協議を重ねたが、現状保存が困難であることが確認されたため、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することとなった。また、愛宕山城跡のおおよそ南半分にあたる大字矢田字城山244−１地内も駐車場造成のため、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

桑名東部開発株式会社代表取締役松田信男より、平成17年９月12日付教文第379号及び、平成17年９月１日付教文第358号で文化財保護法、三重県文化財保護条例に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を受けた市教育委員会は、平成17年９月20日付教委12−１−155号、平成17年９月13日付教委12−１−147号による三重県教育委員会教育長の通知を受けて、平成17年12月５日より、文化課主事斉藤理を調査担当者として発掘調査に着手した。

三重県教育委員会教育長に対する埋蔵文化財発掘調査着手の報告は、文化財保護法、三重県文化財保護条例に基づき、平成18年２月17日付教文第750号、751号にて行った。

第２節　試　掘　調　査

試掘調査では、開発予定地にトレンチを２ケ所（トレンチ１、２）設定し、調査を行った。愛宕山城跡は史料等によると廃絶以降、様々に利用されており、土塁、堀等の遺構は現状でも認められるものの、平坦面の土坑や柱穴等の遺構の残存状況はさほどよくないことが予想された。よって、調査の主たる目的を遺構の残存状況の確認におき、トレンチは遺構が確認された時点で、適宜、拡張等の対応を図ることとした。

以下にトレンチの概要について記す。

トレンチ１

東西に伸びる堀、土塁に直交する東西２ｍ×南北40ｍのトレンチを、トレンチ１として調査を行った。

堀は断面が箱型となるいわゆる箱堀である。堀の北側は平坦となり、郭となる可能性もあるが、すでに削平されており遺構は確認されなかった。南側は土塁に近接する。堀底と土塁頂部との比高差は

7.7mを測る。

土塁は現状で堀と平行に東西に伸び、遺構の西端でほぼ直角に南へ屈曲する。トレンチは東西に伸びる部分に設定し、土塁の断ち割りを行った。その結果、土塁は郭側から外に向かって順次盛土されていることが明かとなった。基部については旧地形に存在する何らかの高まりを利用していると考えられ、下層にも遺構が確認できたことから、愛宕山城跡に先行する遺跡の存在が指摘できる。１トレンチからは古墳時代の土師器高杯、須恵器脚付三連壷等が出土していることから、古墳時代の何らかの遺構があると思われる。

また、土塁の南半には土塁の頂部とレベルを合わせるように４m程南に盛土されていた。土塁を拡張しているようにも考えられたが、盛土内からは近現代の桟瓦が出土しており、後世に付け足されたものと判明した。

平坦面には時期不明であるが不整形な土坑や、柱穴と考えられる小土坑等が確認された。

遺物は前述の古墳時代のものの他、戦国期の瀬戸美濃産陶器、土師器皿の小片が出土した。

トレンチ２

東西に伸びる堀に直交する東西２m×南北12mのトレンチを、トレンチ２として調査を行った。

トレンチの北端ではトレンチ１で確認された郭と思われる平坦面が検出された。トレンチ１と同様に上部が削平されており、遺構は検出されなかった。堀は土塁側となる南側が掘り抜けなかったが、郭と考えられる北側の平坦面との比高差が約2.8mとなる堀底は検出できた。

遺物は土師器の小片がごくわずかだが出土している。

まとめ

調査の結果、堀、土塁、平坦面２ケ所を確認した。北側の平坦面はすでに削平されており遺構は検出されなかったが、南側の平坦面からは数基の土坑が検出された。土塁は南側に盛土がされており、現況で確認できる土塁状の高まりとは規模、形態が異なるが、比較的よく残存するものと思われる。堀は堀底で幅2.5mを測る比較的大規模な箱堀が確認されたが、配置や平坦面との関係については試掘調査では明らかにし得なかった。下層遺構の時期や性格とともに、全面調査の際の課題と考えられる。

第3節　調 査 の 経 過

発掘調査は平成17年12月５日から開始した。調査区は竹や雑木で一面が覆われていたため、全ての雑木を伐採するところから始まった。伐採および伐採木の搬出作業は12月末まで行なった。年が明けてからは、土塁状の高まりや調査区内にあった庚申碑の搬出作業を行なった。これらの庚申碑は近接する公園に移設されるため、傷がつかないように石碑を保護して慎重に作業を行なった。庚申碑を搬出した後、重機を使用して抜根や表土掘削を開始し、表土及び木の根はダンプ等を使用して場外搬出した。

腐葉土を含めた表土は平坦面では平均すると0.4m程度堆積していたが、試掘調査の結果から土塁状の高まりの南側は、４m程度掘削できることが判明しており、多量の土を除去した。西側について

は、どこまで表土が堆積しているか不明確であったため慎重に掘削を進めていった結果、西側の高まりは土塁が残存しており、全体としてＬ字形の土塁の形状が判明した。また、土塁状の高まりの頂上に位置していた庚申碑の跡地を調査した結果、近現代の桟瓦とともにガラスなどの出土を確認したため、後世に移動されたものと判明した。

表土掘削が終了した２月13日から作業員による掘削作業を開始した。土塁の内側の包含層掘削と遺構検出を行ない、多数の遺構を検出した。また郭の構築方法や規模を確認するため、トレンチを掘削し、記録作業を行なった。検出した遺構の掘削と記録作業を進め、３月７日にラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を行なった。また、貝が多く堆積していた遺構では、サンプル採取作業も行なった。３月11日には現地説明会を開催し、地元住民の方々をはじめ多くの方に来跡して頂いた。

上層遺構の調査終了後、試掘調査で確認していた土塁の下層面調査を開始した。土塁の盛土を除去した結果、土塁の北側と西側で２基の墓坑と縄文時代の遺構などを検出した。墓坑の存在は予想外であったが、全ての遺構の掘削と記録作業を行い、３月23日に調査を終了した。

調査前（北から）

調査前（南から）

庚申碑

庚申碑搬出作業

表土掘削作業

遺構掘削作業

上層遺構（南から）

貝サンプリング作業

空中写真撮影

現地説明会

第３章　遺　　構

調査に入る前の状況では、土塁状の高まりと平坦部が確認できていたが、掘削を進めていくうちにＬ字形の土塁が残るだけで、現況にあった土塁状の高まりは近現代の造成によってできていたことが判明した。平坦部では、表土直下が地山の礫層となっていた。土塁状の高まりの堆積は、腐葉土を含んだ20㎝程度の表土（図版５　１層）、最大2.5m程度の厚さの赤褐色砂質土層（図版５　２～４層）、20㎝程度の浅黄色シルト質土（図版５　８・９層）、礫層の土塁構築土（図版５　10～18層）、砂質土からなる土塁構築土（図版５　24～32層）、黄橙色土質の地山、灰白色の円礫層の地山となる。浅黄色シルト質土の直上には、拳大から人頭大の円礫が堆積している箇所があった。浅黄色シルト質土層からは近現代と思われる桟瓦が多量に出土した。この土塁状の高まりから土塁構築土を検出するまでに南側から北側に向けて、約４ｍ掘削しなければならなかった。

第１節　遺　　構

本調査では長方形に成形された郭（郭１）を検出した。また、郭１の東側の切岸で腰郭（郭２）を検出した。郭１の北側から西側にかけ土塁と堀を検出した。堀をはさんで北側にも郭（郭３）が存在することが判明した。

遺構は主に郭１で土坑や溝、ピットを検出した。また、試掘調査で確認されている下層遺構の検出のために土塁を除去したところ、下面から古墳時代の墓坑を２基検出した。墓坑からはまとまった遺物の出土が見られた。また、縄文時代の土坑やピットを検出し、遺物も少量出土している。

なお、遺構番号はアラビア数字表記で管理し、遺構の性格から土坑１などと表記するものとする。ただし、郭と掘立柱建物の数字表記は別にしている。

１．郭１（図版４）

郭１は東西20m、南北の検出長44mを測る。全長は調査区外となるため不明だが、調査前の地形図から推定すると、郭１の長さは46mとなる。郭１の東側構造と規模を調査するためにトレンチ４、トレンチ５を設け掘削した結果、郭１の東側の切岸ラインを確定することができた。郭１を構成する地山はしまりのやや弱い砂礫層で、切岸覆土は礫層と砂質土層の互層になっている。それぞれのトレンチで現地表面から1.4～2.1m掘削したが地山を検出することは出来なかった。トレンチ５からは少量の山茶碗などが出土している。

郭１で検出した土坑や柱穴などの遺構の標高は24.0mを測り、南にいくにつれ緩やかに標高が高くなる。調査区の南側では遺構は検出されなかったが、郭の北半の遺構が確認できる平坦面とほぼ同一の標高であり、郭が存在していた頃にはなんらかの利用がされていたと考えられる。前述したように近世の寺跡や近代の料亭跡の影響で大きく地形が改変されているため、南半分については判然としない部分が多い。郭１を構成する地山は、北側は黄橙色の粘質土であるが、南側にいくにつれ砂礫層に変化していく。砂礫層中からも遺構を検出しているが、西側の土塁よりも南側から遺構は検出されな

かった。

２．郭２（図版４）

郭１の東側に取り付くいわゆる腰郭で、南北6.9m、東西3.3mを測り、主郭との標高差は1.3mを測る。断ち割り調査は行なっていないが、郭１と同様の地山を削り出して構築している。郭２では、遺構は検出されなかった。郭２を覆う埋土は、しまりの弱い砂礫層が互層になって堆積しており、郭２の南側切岸付近から土師器皿の小片が出土している。

３．郭３（図版４）

郭１とは堀をはさんで北側の位置にあり、検出した東西の長さは32mで、調査区の北側と西側に延びるが、調査区外となるため全体の規模は不明である。試掘で確認したように、郭３は上部が削平されており、遺構は検出されなかった。南東隅は直角に成形し、東側は急傾斜の切岸となっている。西側は部分的にトレンチを掘削して確認したが、全形は知りえなかった。

４．土塁（図版４・５・７）

主郭の北東から北西にかけて総延長32mを測るＬ字形の土塁を検出した。土塁と郭１との比高差は北側では2.5m、西側では2.3mを測る。土塁の構築土は上層に拳大程度までの円礫と砂質土との互層になっており、下層はきめの細かい砂質土層であった。西側の土塁については、地山を削りだして成形していることが判明した。以下、上層の砂礫質土塁構築土を上部土塁、下層の砂質土塁構築土を下部土塁と称する。

上部土塁は、下部土塁の堆積の傾斜に沿うように粒度の違う砂礫を互層に構築してあった。下部土塁が北側と西側では一様の標高ではないが、上部土塁は堀側から主郭に向かって傾斜するような堆積状況が一様に見られた。下部土塁は砂質土で形成されており、北側は標高26.3mを測る断面三角形の土塁を形成し、郭１との標高差は2.3mを測る。北西から西側にかけて急傾斜となり、中心部分にわずかに膨らみのあるだけの平坦な土塁となっている。西側土塁の上面の標高は25.5mを測り、郭１との比高差は1.5mである。しかし、土塁より西側にある堀底からは6.5mの標高差があると推定される。下部土塁は、西から東にかけて緩やかに傾斜する原地形を削り出すことによって成形した土塁の基底の上に形成されている。また、東側では後述する古墳時代の墓坑の掘り込まれている地山面を削平してから再度整地した上で土塁を形成していると考えられる。構築土埋土から出土した遺物は、上部土塁からは須恵器や灰釉陶器、山茶碗が出土し、下部土塁からは常滑焼などが出土している。

５．堀（図版４・６・８）

郭１の北側および西側で堀を検出した。調査の制約のため、すべて掘削することは出来なかったが、トレンチを設けることで検出した堀の形状と延長を確認した。堀は、幅6.5m、深さ３m、堀の下端幅1.8mを測り、断面形が台形となるいわゆる箱堀であった。北西部については、郭１を取り囲むように南へ屈曲し、またトレンチ３を掘削した結果、調査区の南側に向けて延びることが確認された。堀の埋土は、トレンチ３では現地表面から1.2mまでは近現代の盛り土であり、その下1.4mは堀の埋土であった。また北側での堀の堆積状況は、地表からしまりの弱い砂質土が1.8m堆積しており、その下0.9mはややしまりのある堀埋土であった。堀の埋土からは山茶碗などが若干出土している。また、堀と重なって近現代の井戸遺構を検出した。この井戸遺構からは、桟瓦と不明石製品が出土して

いる。

６．郭１で検出した遺構

主郭の北側でほとんどの遺構を検出した。検出した遺構は土坑、溝、ピットである。土坑は方形や不整形の土坑があるが、遺構内遺物のほとんどは土坑から出土したもので、ピット、溝からの出土は少ない。

ａ．土坑

土坑１（図版９）

Ｊ10グリッド。幅0.9m、長さ1.9m、深さ0.15mを測る長方形の土坑である。土坑31、溝２、土坑27と重複し、土坑１が埋没した後に土坑27、土坑31、溝２が掘削されている。埋土は黒褐色土で埋土からの遺物の出土はない。

土坑４（図版９）

Ｊ10グリッド。直径0.6m、深さ0.5mを測る、円形の土坑である。埋土は黒褐色土で、埋土からの遺物の出土はない。

土坑20（図版９）

Ｉ11グリッド。試掘トレンチ１で検出した土坑で、遺構検出面で検出した掘形から推定すると、直径1.9mほどの土坑になる。土坑底からは拳大の礫を検出した。埋土からの遺物の出土はない。

土坑21（図版10）

Ｈ10グリッド。幅2.5m、長さ3.5m、深さ0.8mを測る方形の土坑である。浅い土坑24と重複し、土坑21が埋没した後に土坑24が掘削されている。埋土はしまりの非常に強い砂質土で円礫を多く含んでいる。埋土から天目茶碗などが少量出土している。

土坑22（図版10）

Ｉ11グリッド。幅1.0m、長さ3.1m、深さ0.3mを測る不整楕円形の土坑である。浅い土坑24と重複し、土坑24が埋没した後に土坑22が掘削されている。埋土から山茶碗などの少片が出土している。

土坑24（図版10）

Ｈ10グリッド。南北6.8m、東西7.9m、深さ0.2mを測る不整楕形の浅い土坑である。しまりの弱いシルト質の埋土である。土坑21、土坑22、土坑40と重複し、土坑24が埋没した後に土坑40が掘削されている。埋土から土師器の少片が出土している。

土坑27（図版９）

Ｊ10グリッド。幅1.0m、長さ1.0m、深さ0.3mを測る楕円形の土坑である。土坑１、溝３と重複し、土坑27が埋没した後に溝３が掘削されている。埋土は黒褐色土で、埋土からの遺物の出土はない。

土坑28（図版９）

Ｊ11グリッド。幅0.85m、検出長1.7m、深0.3mを測る長方形の土坑である。土坑31、溝３と重複し、土坑28が埋没した後に溝３、土坑31が掘削されている。埋土は黒褐色土で、埋土からは土師器皿片が若干出土している。

土坑30（図版９）

Ｊ11グリッド。幅0.7m、長さ1.3m、深さ0.4mを測る長方形の土坑である。溝３と重複し、土坑

30が埋没した後に溝３が掘削されている。埋土は黒褐色土で、埋土からは土師器皿片が若干出土している。

土坑31（図版９）

Ｊ10グリッド。幅0.7m、長さ1.6m、深さ0.3mを測る長方形の土坑である。土坑１と重複し、土坑１が埋没した後に土坑31が掘削されている。埋土は黒褐色土で、埋土からの遺物の出土はない。

土坑32（図版11）

Ｉ12グリッド。東西幅3.6m、南北長4.4m、深さ0.7mを測る長楕円形の土坑である。土坑33、土坑45と重複し、土坑33、土坑45が埋没した後に土坑32が掘削されている。埋土はしまりが強く、上層は淡黄色シルトで下層が灰黄褐色土である。下層では拳大の円礫をやや多く含んでいた。埋土からは陶器や土師器が出土している。

土坑33（図版７・11）

Ｊ12グリッド。東西幅2.5m、南北長2.6m、深さ0.6mを測る楕円形の土坑である。土坑32と重複し、土坑33が埋没した後に土坑32が掘削されている。埋土はしまりが強く、上層は黄橙色の砂礫層で下層が淡灰黄橙色土である。埋土からは陶器や土師器が出土している。また、木製品から剥離したと思われる赤漆が少量出土した。

土坑38（図版12）

H11～12グリッド。幅4.4m、長さ6.2m、深さ0.35mを測る不整楕円形の土坑である。ピット50、ピット66と重複し、土坑38が埋没した後にピット50、ピット66が掘削されている。埋土はしまりが弱く、上層は黒色土で下層が灰褐色土や褐色土である。遺構検出段階では、上層の黒色土の範囲を土坑37としていたが、土坑37は土坑38の上層土として扱っている。また、混貝土層が土坑38の北東部を中心に10㎝程度の厚さで確認し、ブロックサンプルを取った。また混貝土層が厚く堆積していた箇所では人頭大の円礫を多量に検出した。円礫の中には焼けて赤くなっているものも混じっていた。これらの状況から、この土坑は廃棄土坑として掘削し、埋没したと考えられる。埋土からは陶磁器や土師器皿が多量に出土している。

土坑39（図版４）

G11グリッド。幅2.2m、長さ2.8m、深さ0.3mを測る不整方形の土坑である。埋土はしまりのない淡黄橙色砂質土で、埋土からは土師器皿片が若干出土している。

土坑40（図版４）

G11グリッド。幅0.9m、検出長1.1m、深さ0.2mを測る楕円形の土坑である。土坑39と重複し、土坑39が埋没した後に土坑40が掘削されている。埋土は淡黄橙色土で、埋土からは土師器皿が出土している。

土坑43（図版４）

Ｉ12グリッド。幅0.9m、長さ1.1m、深さ0.6mを測る楕円形の土坑である。土坑45と重複し、土坑45が埋没した後に土坑48が掘削されている。埋土は淡黄褐色土で、埋土からの遺物の出土はない。

土坑45（図版４）

Ｉ12グリッド。幅0.7m、長さ1.2m、深さ0.4mを測る楕円形の土坑である。土坑32、土坑43と重

複し、土坑45が埋没した後に土坑48、土坑32が掘削されている。埋土は淡黄褐色土で炭を若干含む。埋土からの遺物の出土はない。

土坑65（図版９）

G10グリッド。幅0.9m、長さ1.1m、深さ0.6mを測る長方形の土坑である。埋土は淡黄橙色土で、埋土からは土師器皿が出土している。

土坑71（図版16）

F11グリッド。東西2.5m、南北2.6m、深さ0.4を測る、方形の土坑である。埋土はしまりが強く、褐色粘質土で赤褐色粘質土ブロックを多く含む。埋土からは不明銅銭１点が出土している。

土坑72（図版16）

F11グリッド。幅0.8m、長さ1.4m、深さ0.3を測る、楕円形の土坑である。土坑72と重複するが、前後関係は不明確であった。埋土は赤橙色の粘質土で、しまりが強い。床面付近で数点の縄文時代早期の土器が出土した。

土坑73（図版16）

F11グリッド。幅1.5m、長さ2.0m、深さ0.3mを測る、楕円形の土坑である。土坑74、土坑72と重複するが、前後関係は不明確であった。埋土は赤橙色の粘質土で、しまりが強い。埋土からの遺物の出土はない。

土坑74（図版16）

F11グリッド。幅1.0m、長さ1.7m、深さ0.2を測る、楕円形の土坑である。埋土は赤橙色の粘質土で、しまりが強い。埋土からは縄文土器片が出土している。

土坑75（図版16）

F11グリッド。幅0.8m、検出長2.7m、深さ0.2mを測る、長楕円形の土坑である。土坑74と重複するが、前後関係は不明確であった。埋土は赤橙色の粘質土で、しまりが強い。埋土からの遺物の出土はない。

ｂ．溝

溝２（図版９）

J10グリッド。幅0.4m、長さ4.0m、深さ0.3mを測る溝である。北西側の土塁に沿うように掘削されている。土坑１と重複し、溝３が埋没した後に土坑１が掘削されている。埋土は上層に拳大の礫を多く含んでいる。埋土は黒褐色土で、埋土からの遺物の出土はなかった。

溝３（図版９）

J11グリッド。幅0.4m、長さ4.1m、深さ0.3mを測る溝である。北側の土塁に沿うように掘削され、トレンチ１をはさんで東側では検出できなかった。土坑27、土坑28、土坑31と重複し、土坑27、土坑28、土坑31が埋没した後に溝３が掘削されている。埋土は上層に拳大の礫を多く含んでいる。埋土は黒褐色土で、埋土からの遺物は土師器皿片が若干出土している。

溝44（図版４）

I13グリッド。幅0.6m、検出長2.2m、深さ0.2mを測る溝である。埋土はしまりのややある黒色土で、埋土からの遺物の出土はなかった。

c．掘立柱建物（図版８）

Ｊ10グリッド。１間×２間。柱間の間隔が不定であるが、柱穴８では柱痕を確認している。それぞれの柱穴の深さは、0.15mから0.38mである。柱穴の埋土は黒褐色土で、埋土からの遺物の出土はなかった。

d．ピットおよび柱穴

ピットと柱穴の識別は検出時と断面観察によって柱痕を確認したものを柱痕とし、それ以外の小規模の遺構をピットとした。

柱穴８（図版８・９）

Ｊ10グリッド。直径0.35m、深さ0.38mを測り、柱痕を確認した。ピット９と重複し、ピット９が埋没した後に柱穴８を掘削している。埋土は褐色土で、埋土からの遺物の出土はなかった。

ピット９（図版９）

Ｊ10グリッド。直径0.30m、深さ0.28mを測る。柱穴８と重複し、ピット９が埋没した後に柱穴８を掘削している。埋土は褐色土で、埋土からは土師器片が若干出土している。

ピット42（図版９）

H10グリッド。幅0.4m、長さ0.85m、深さ0.5mを測る。土坑24と重複し、ピット42が埋没した後に土坑24を掘削している。埋土は褐色土で、埋土からは陶器片が若干出土している。

柱穴46（図版９）

Ｆ11グリッド。幅0.40m、長さ0.63m、深さ0.45mを測り、柱痕を確認した。埋土は褐色土で、埋土からの遺物の出土はなかった。

ピット60（図版16）

Ｆ11グリッド。直径0.35m、深さ0.5mを測る。埋土はしまりのややある褐色土で、埋土からは土師器片が出土した。

第２節　下　層　遺　構

土塁を除去し、地山面まで掘削したところ、古墳時代の墓坑２基と縄文時代の土坑などを検出した。

墓坑85（図版14）

Ｌ11グリッドなど。中世の土塁を掘削した後検出した、幅3.0m、検出長6.8m、深さ0.8mを測る墓坑である。南東側で溝84と重複関係にあり、墓坑85が埋没した後に溝84が掘削されている。溝84は、しまりの強い上層埋土から中世の常滑焼が出土しており、少なくとも深さ0.65mまでは土塁構築時に埋没したものと考えられる。溝84の北東隅の淡黒褐色土層から須恵器が出土しているが、溝84は墓坑85と切り合い関係にあり、関連のある遺構ではない。また、溝84と墓坑が重複する部分で幅0.5m、長さ1.8m、深さ0.2mの浅い掘り込みを検出した。埋土はしまりの強い黒褐色で、遺物の出土はなかった。墓坑85はしまりの弱い黒褐色砂質埋土が堆積していた。また東西方向の土層断面観察から、墓坑の東西それぞれの壁際にしまりの強い褐色土が堆積していたことから、木棺によって埋葬されていた痕跡の可能性が考えられる。しかし、このしまりの強い埋土は連続的に存在せず、木棺の痕跡範囲を

検出することは困難であった。なお北端の断面では痕跡を観察できなかった。地山直上埋土から、須恵器脚付三連壷や土師器の高杯が出土した。なお、墓坑埋土は全てふるいにかけたが、微細遺物は確認できなかった。

墓坑88（図版15）

Ｉ７グリッド。西側土塁の盛り土を除去した後に検出した、南北2.5m、東西の最大検出長2.9m、深1.0mを測る墓坑である。北東隅と南東隅の壁面はややオーバーハングしている。貼床の痕跡は確認できなかった。床面には、幅0.5m、長さ0.74mの範囲に人頭大の円礫を２列に敷き並べている。

なお、検出した円礫の列よりも西側では、円礫を検出していない。円礫の直上では、頭骸骨の破片や棗玉が出土した。また、円礫の周囲からは提瓶や壷、杯蓋が出土した。埋土は黒褐色のしまりの弱い粘質土で、地山土のブロック土などは含まれていない。また、埋土中からも骨が出土しているが、円礫上で確認した頭骸骨と同じ被葬者のものかは確定できない。円礫を取り除いた後、トレンチにて床面の遺構を確認したが、下部遺構は確認できなかった。この遺構は横穴墓の可能性も残り、横穴墓であるならば土塁の構築時に天井部が破壊されたものとも考えられる。また、墓坑88を構築した土質は粘質土で、壁面や天井部は崩落しやすいと考えられる。

土坑69（図版11）

Ｈ８グリッド。西側土塁の最南端で検出した。幅1.3m、長さ1.9m、最大深さ0.9mを測る楕円形の土坑である。埋土は灰黄褐色砂質土で、埋土の上位からは陶器片が出土している。

土坑87（図版15）

Ｉ８グリッド。幅1.0m、検出長2.3m、深さ0.4mを測る、長楕円形の土坑で、中心部分が一段低くなっている。埋土は灰黄褐色砂質土で、埋土からは土師器の胴部片が出土している。

土坑92（図版16）

Ｊ12グリッド。幅0.7m、長さ1.0m、深さ0.2mを測る、楕円形の土坑である。埋土はしまりの強い赤褐色粘質土で、埋土からは縄文土器片が出土している。

土坑93（図版16）

Ｉ12グリッド。幅0.68m、長0.75m、深さ0.4mを測る、楕円形の土坑である。埋土はしまりの強い赤褐色粘質土で、埋土からは縄文土器片が出土している。

トレンチ１　土色一覧

1	黒褐色土	（シルト質）	しまり弱い。植物根、有機物を多量に含む。小礫、中礫を多く含む。
2	灰褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を多く、中礫を少量含む。
3	褐灰色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫、中礫を大量に含む。土塁崩落層。
4	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を微量含む。
5	にぶい黄褐色土	（シルト質）	しまり弱い。植物根を多く含む。焼土粒子、炭化物を微量含む。
6	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を少量含む。焼土粒子、炭化物を微量含む。
7	暗褐色土	（シルト質）	しまり弱い。少礫を微量含む。
8	橙色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を少量、中礫を多く含む。土塁構築層。
9	暗褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫、中礫を少量含む。土塁構築層。
10	にぶい褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を少量、中礫を多く含む。土塁構築層。
11	にぶい褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を微量、中礫を少量含む。土塁構築層。
12	にぶい褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を少量、中礫を微量含む。土塁構築層。
13	にぶい褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を微量含む。中礫を少量含む。土塁構築層。
14	にぶい褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を微量含む。土塁構築層。
15	にぶい褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を少量含む。土塁構築層。
16	にぶい褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を多く、中礫を微量含む。土塁構築層。
17	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を多く、中礫を少量含む。土塁構築層。
18	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を少量含む。土塁構築層。
19	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫、中礫を少量含む。土塁構築層。
20	にぶい褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫、中礫を少量含む。土塁構築層。
21	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫、中礫を微量含む。土塁構築層。
22	黒褐色土	（シルト質）	しまり弱い。粗粒砂を微量含む。土塁構築層。
23	黄褐色土	（シルト質）	しまり弱い。中礫を少量含む。焼土粒子を微量含む。土塁構築層。
24	極暗褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を多く、中礫を少量含む。土塁構築層。
25	明褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を多く含む。小礫を多く含む。土塁構築層。
26	褐色土	（シルト質）	ややしまりやや弱い。小礫を少量含む。墓坑埋土。
27	暗褐色土	（シルト質）	しまりややよい。小礫を少量含む。土塁構築層。
28	黒褐色土	（シルト質）	しまりやや弱い。小礫を微量含む。褐色シルト粒子を少量含む。土塁構築層。
29	黒褐色土	（シルト質）	しまりやや弱い。褐色シルト粒子を少量含む。小礫を少量含む。土塁構築層。
30	暗褐色土	（シルト質）	ややしまりやや弱い。褐色シルト粒子を多く含む。土塁構築層。
31	暗褐色土	（シルト質）	しまりややよい。小礫を多く含む。粗砂を多く含む。土塁構築層。
32	灰褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を少量含む。土塁構築層。
33	褐色土	（シルト質）	ややしまり弱い。小礫を微量含む。土塁構築層。
34	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を多く含む。中礫を微量含む。土塁構築層。
35	褐色土	（シルト質）	ややしまりややよい。粘性あり。小礫を微量含む。
36	黒褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を少量含む。土塁構築層。
37	暗褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を微量含む。土塁構築層。
38	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。極暗褐色シルト粒子を少量含む。小礫を少量含む。墓坑埋土。
39	明褐色土	（シルト質）	しまり弱い。墓坑埋土。
40	灰褐色土	（シルト質）	ややしまりやや弱い。褐色シルト粒子を微量含む。
41	褐色土	（シルト質）	ややしまり弱い。小礫を少量含む。焼土粒子を多く含む。
42	赤褐色土	（シルト質）	ややしまり弱い。焼土粒子を多く含む。
43	暗赤褐色土	（シルト質）	ややしまり弱い。焼土粒子を多く含む。
44	明褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を多く、中礫を少量含む。墓坑埋土。
45	灰褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を少量含む。小礫、中礫を多く含む。
46	灰褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を少量含む。小礫、中礫を多量に含む。
47	暗褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を微量含む。小礫を少量含む。
48	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を微量含む。小礫を少量含む。
49	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を微量含む。小礫を微量含む。
50	灰褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を少量含む。小礫、中礫を多量に含む。
51	暗褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を微量含む。小礫を微量含む。
52	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を微量含む。小礫、中礫を微量含む。
53	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を微量含む。
54	灰褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を微量含む。小礫を微量含む。
55	灰褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を微量含む。小礫を微量含む。
56	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を少量含む。小礫を微量含む。
57	極暗褐	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を極微量含む。小礫を微量含む。
58	黒褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を極微量含む。小礫を微量含む。
59	灰白色土	（シルト質）	しまり弱い。灰褐色シルト粒子を微量含む。粗粒砂を多く含む。小礫、中礫を多量に含む。
60	明褐色土	（シルト質）	ややしまりやや弱い。明褐色シルト粒子を多量に含む。小礫を少量含む。
61	にぶい橙色土	（シルト質）	しまり弱い。粘性あり。明褐色シルト粒子を多量に含む。小礫を微量含む。
62	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を極微量含む。小礫を多く含む。
63	黄褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を多く含む。小礫を少量含む。
64	明黄褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を多く含む。小礫を微量含む。
65	にぶい橙色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を多く含む。小礫を微量含む。
66	暗褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を極微量含む。
67	暗褐色土	（シルト質）	しまり弱い。粘性あり。明褐色シルト粒子を極微量含む。小礫を微量含む。
68	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を多量に含む。小礫を微量含む。
69	にぶい褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を少量含む。灰白色粒子を多く含む。小礫を微量含む。
70	黒褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を極微量含む。小礫を微量含む。
71	黒褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を極微量含む。小礫を微量含む。
72	灰褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を極微量含む。小礫を少量含む。
73	にぶい褐色土	（シルト質）	しまり弱い。明褐色シルト粒子を多量に含む。中礫を微量、小礫を少量含む。
74	にぶい黄褐色土	（シルト質）	しまり弱い。粗粒砂を多く含む。小礫を多く含む。中礫を少量含む。
75	にぶい黄橙色土	（シルト質）	ややしまりやや弱い。明褐色シルト粒子を微量含む。小礫を多量に含む。中礫を少量含む。粗粒砂を多く含む。
76	灰白色土	（シルト質）	ややしまり弱い。粗粒砂を多量に含む。小礫、中礫を多量に含む。
77	暗赤褐色土	（シルト質）	ややしまり弱い。黒褐色シルト粒子、明黄褐色シルト粒子、灰オリーブ色シルト粒子や小礫、中礫を少量含む。植物根を含む。撹乱。
78	灰オリーブ色土	（シルト質）	しまり弱い。粘性強い。粗粒砂を多く含む。
79	明黄褐色土	（シルト質）	ややしまり弱い。粗粒砂、小礫を多く含む。
80	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を多く含む。中礫、粗粒砂を少量含む。
81	暗褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を多く含む。中礫、粗粒砂を少量含む。
82	にぶい黄褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫を多量に含む。中礫、粗粒砂を多く含む。植物根を含む。
83	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫、粗粒砂を多く含む。
84	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫、粗粒砂を多く含む。
85	褐色土	（シルト質）	しまりややよい。中礫、粗粒砂を多量に含む。
86	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。中礫、粗粒砂を多量に含む。
87	暗褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫、粗粒砂を少量含む。
88	黒褐色土	（シルト質）	しまり弱い。シルトブロックを少量含む。
89	黒褐色土	（シルト質）	しまり弱い。シルト粒子を少量含む。
90	褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫、粗粒砂を多く含む。
91	黒褐色土	（シルト質）	しまり弱い。小礫、粗粒砂を多く含む。

第４章　遺　　物

遺物は包含層、遺構等を中心にコンテナケース20箱の出土をみた。以下に器種毎に特徴等を記述する。

なお、法量や出土位置、層位等の詳細は遺物一覧表を参照されたい。

縄文土器（１～７）

楕円形の押型文の施された深鉢片。１は口縁端部に刻み目が認められる。色調は茶褐色を呈し、胎土には長石、石英等を含む。

土師器（８～29）

８～11は高杯。８、９の外面には指頭による調整が明瞭に残る。12は甕。外面は縦方向、内面は横方向のハケ目が認められる。一部に粘土の輪積みの痕跡が残る。外面には煤の付着が顕著である。13～22は手づくねの皿。18、19には油煙が付着する。28、29はロクロ成形の皿。外面底部に回転糸切り痕が残る。29は底部を肥厚させ、高台状としている。23はいわゆる伊勢型鍋。内外面とも磨耗が激しく調整等は不明である。24は長胴甕。磨耗が著しい。25～27は羽釜。いずれも鍔より下方には煤が認められる。26は鍔の直上が焼成前に外側から穿孔される。

須恵器（30～40）

30は杯蓋。外面は激しく降灰し、ヘラ削り等の調整痕は看取できない。31、32は杯身。31は暗灰色で焼成はやや軟質だが、32は赤褐色に焼け締まる。33は高杯の脚部。ハの字形に下方に向かって広がる。色調は暗灰色を呈し、焼成はやや軟質である。34は甕。外面には平行状のタタキ痕が顕著に残るが、内面の当て具痕等の調整は判然としない。35は提瓶。体部腹面は丸みを帯び、さほど目の細かくないカキメが施される。背面は平坦で回転ヘラ削り調整が施される。36は広口で丸底となる壷。外面の体部下半には格子状のタタキ目が認められる。内面の口縁部及び外面口縁部から頸部、肩部にかけて厚く降灰する。37は脚付三連壷。壷１個体分は欠損する。胴部には台形の透かし孔が１ケ所のみ残る。脚部にも台形の透かしが穿孔される。これも１ケ所のみの残存であるが、残存状況から四方に配置されていたと思われる。外面には簡素化された波状文が３段に施される。38は短頸壷。肩部には二条の沈線が施され、その直上には長さ１㎝程の刻み目が細かく記される。内面は同心円状となる当て具痕が若干認められる。底部には性格不明のヘラ記号が認められる。39も短頸壷。38よりもなで肩で肩部には長さ１㎝程の刻み目が細かく施される。40は甕。外面は口縁部から肩部、内面は頸部にかけて著しい降灰が認められる。

灰釉陶器（41～43）

41は椀。無釉で口縁はやや外反する。42は長頸瓶。胎土は灰白色で外面には降灰が著しい。

山茶碗（44～54）

山茶碗はすべて東海地方南部系のものである。内面底部と高台端部には使用痕と考えられる磨耗が認められる。

瀬戸美濃陶器（55～77、85、88～95）

55～60、62は天目茶碗。55には濃黒色の鉄釉が掛けられる。58、59は高台部周辺を除き黒褐色の鉄釉が掛けられる。高台部にはごく薄いサビ釉が施される。58の高台内側は削り込まれ内反高台となる。

63～69は小型の皿である。63、64は淡緑色の灰釉の掛けられた丸皿。65は全面に鉄釉が掛けられているが高台周辺は拭い取られる。66は淡緑色の灰釉の掛けられた丸皿。内面を丸ノミ状の工具で削ぎ取り、菊花状としている。68、69は丸皿の底部。淡緑色の灰釉が全面に掛けられるが高台周辺は拭い取られる。内面底部には印花文が施される。69は高台内側に重ね焼の際の輪ドチの痕跡が顕著に残る。

70、71は花瓶。内外面全面にサビ釉が施される。

72は香炉。外面には淡緑色の灰釉が厚く掛けられる。内面にも灰釉が掛けられるが外面よりは釉層が薄い。外面底部には脚が付けられる。

73は筒型容器。外面残存部全面と内面の口縁部直下までは黒褐色の鉄釉が掛けられる。内面は露胎となる。

74～77は徳利。74、75は同一個体の可能性がある。外面には黒褐色の鉄釉が掛けられ、内面は無釉となる。76も鉄釉が施されるが外面底部は拭い取られている。77は外面に茶褐色を呈する鉄釉が施され、内面には鉄釉の飛沫がわずかに認められる。底部のみの出土であるため、筒型容器の可能性も残る。

85、88～95はサビ釉の施された擂鉢である。85は口縁を肥厚させ、上部に若干挽き出す。88は口縁を下方に若干挽き出す。89は内面から口縁を変形させて注口が付けられる。口縁端部は下方に挽き出され縁帯状となる。91は内面体部に縦方向のクシ目が施された後、内面口縁直下に横方向のクシ目が付けられる。さらにその後、口縁の一部を内面から外に向かって押し出すことによって注口がつくられる。94は内面はほとんど磨耗せず、口縁端部のみ若干磨耗する。口縁は内側に折り返される。95は外面体部下方と外面底部はサビ釉が掛けられていない。内面は使用によりよく磨耗している。

朝鮮陶器（78）

体部片のみであるがおそらく碗と思われる。内面体部上方は象嵌され乳白色の化粧土が施される。

白磁（79）

口縁が外反する碗。焼成は良好で堅緻に焼け締まる。

青磁（80、81、83）

３点とも器形は碗である。80は外面に剣先蓮弁文が刻まれる。81は体部片のみの出土であるが、外面に蓮弁文と推測される文様が施される。釉調はやや黄みを帯びたオリーブ色で、焼成は若干軟質である。83も内面底部に文様が認められる。高台内側は露胎となり、高台端部は釉が拭い取られている。焼成は良好で堅緻に焼け締まる。

染付（82、84）

82は碗。内外面とも呉須が染付けされるがややにじんでいる。84は皿。内外面に濃紺に発色する呉須が染付けされる。全面に施釉されるが、高台端部のみ拭い取られる。

常滑陶器（86、87、96、97、98）

86、87、96は鉢。86は内面に降灰するため調整は不明。クシ目も確認できない。87は口縁を変形さ

せた注口がわずかに残る。96はやや軟質の焼成で橙褐色を呈する。口縁には内側をわずかに凹ませただけの注口が付けられる。内面は使用痕と考えられる磨耗が顕著である。内面口縁直下から内面体部下方にかけて棒状の工具によるクシ目が３条刻まれる。

97は壷。堅緻に焼け締まり、赤褐色を呈する。98は大型となる甕。口縁は下方に挽き出され頸部に接着する。

木製品（99～104）

棗玉が６点出土している。すべていわゆる埋木を研摩したもので、穿孔は両側から行われている。

石製品（105）

濃緑色を呈する碧玉製の管玉。円柱形に丁寧に研摩される。穿孔は片側から行われている。

表１　出土遺物一覧表（１）

	種別	器種	出土位置（グリッド）	出土遺構	出土層位	法量			調整・技法等	推定年代
						口径	器高	底径		
1	縄文土器	深鉢	F11	土坑74	１層	－	－	－	外面押型文、口縁端部に刻み目	縄文早期前半
2	縄文土器	深鉢	F11	土坑72	１層	－	－	－	外面押型文、口縁端部に刻み目	縄文早期前半
3	縄文土器	深鉢	I12	土坑93	１層	－	－	－	外面押型文	縄文早期前半
4	縄文土器	深鉢	J13	溝84	８層	－	－	－	外面押型文	縄文早期前半
5	縄文土器	深鉢	J13		包含層	－	－	－	外面押型文	縄文早期前半
6	縄文土器	深鉢	J13		包含層	－	－	－	外面押型文	縄文早期前半
7	縄文土器	深鉢	J13		包含層	－	－	－	外面押型文	縄文早期前半
8	土師器	高杯	L11	墓坑85	16層	12.4	8.2	8.3	内外面口縁部・脚部ヨコナデ、外面体部ナデ	６世紀後半～７世紀前半
9	土師器	高杯	L11	墓坑85	16層	12.6	8.0	7.8	内外面口縁部・脚部ヨコナデ、外面体部ナデ、内面底部磨耗ヵ	６世紀後半～７世紀前半
10	土師器	高杯	L11	墓坑85	16層	(12.1)	－	－	内外面口縁部ヨコナデ、外面体部ナデ、内面体部磨耗ヵ	６世紀後半～７世紀前半
11	土師器	高杯	L11	墓坑85	16層	－	－	－	内外面口縁部ヨコナデ、外面体部ナデ、内面体部磨耗ヵ	６世紀後半～７世紀前半
12	土師器	甕	Ｉ９	土坑87	１層	－	－	－	内面横方向ハケメ、外面縦方向ハケメ、外面体部煤付着	
13	土師器	皿	H12	土坑38	３～４層	(11.7)	1.7	－	調整痕不明瞭	
14	土師器	皿	K11	トレンチ1	下部土塁埋土	(10.0)	2.3	－	外面口縁部ヨコナデ	
15	土師器	皿	G12	土坑38	３～４層	(9.2)	2.0	－	内外面指オサエ・ナデ	
16	土師器	皿	Ｋ９	上部土塁	12層	(11.5)	1.9	(5.2)	内面ヨコナデ、外面指オサエ・ナデ	
17	土師器	皿	F11	ピット64	１層	(11.2)	2.3	(4.0)	内面ヨコナデ、外面口縁部ヨコナデ、外面体部・底部ナデ	
18	土師器	皿	J11		包含層	(12.0)	2.3	－	内面・外面口縁部ヨコナデ、外面体部・底部指オサエ・ナデ、内面・外面口縁部油煙、外面体部・底部の一部煤付着	
19	土師器	皿	H11	土坑38	３～４層	(11.4)	－	－	内面・外面口縁部ヨコナデ、外面体部・底部指オサエ・ナデ、内面・外面口縁部油煙	
20	土師器	皿	H11	土坑24	１層	－	－	－	内面口縁部ヨコナデ	
21	土師器	皿	H10	土坑21	３～５層	－	－	－	内面・外面口縁部ヨコナデ、外面体部・底部指オサエ・ナデ	
22	土師器	皿	G10	土坑65	１層	(7.3)	1.8	－	内面体部・底部非常に平滑なナデ、外面指オサエ・ナデ	
23	土師器	鍋			排土	－	－	－	伊勢型鍋、内外面磨耗	12世紀前半
24	土師器	甕	H11	土坑24	１層	－	－	－	長胴甕、外面口縁部ヨコナデ	６～８世紀
25	土師器	羽釜	H12	土坑38	４層	－	－	－	胎土に雲母少混、外面口縁部ヨコナデ、内面磨耗、外面鍔部から体部に煤付着	15世紀
26	土師器	羽釜	B12	トレンチ5	12層	－	－	－	外面体部にハケメ、口縁部に直径0.6㎝の穿孔、外面鍔部から体部にかけて煤付着	14世紀
27	土師器	羽釜	H10	土坑21	６層	(21.0)	－	－	外面鍔部下面から体部に煤付着	16世紀
28	土師器	皿	G11	土坑40	１層	－	－	(6.1)	外面底部糸切痕、ロクロ成形	
29	土師器	皿	Ｋ９	上部土塁	３層	－	－	(6.8)	外面底部糸切痕、ロクロ成形	
30	須恵器	杯蓋	Ｉ７	墓坑88	４層	14.5	－	5.1	外面降灰	６世紀後半～７世紀前半
31	須恵器	杯	J13	溝84	８層	－	－	－		６世紀後半～７世紀前半
32	須恵器	杯	H11	土坑38	３～４層	－	－	－		６世紀後半～７世紀前半
33	須恵器	高杯	K13	溝84	８層	－	－	10.4		６世紀後半～７世紀前半
34	須恵器	甕	K13		包含層	－	－	－	外面平行叩き	６世紀後半～７世紀前半
35	須恵器	提瓶	Ｉ７	墓坑88	４層	5.9	16.5	－	外面体部に４条の櫛目、外面体部前面・頸部に降灰	６世紀後半～７世紀前半

表２　出土遺物一覧表（２）

	種別	器種	出土位置（グリッド）	出土遺構	出土層位	法量			調整・技法等	推定年代
						口径	器高	底径		
36	須恵器	壷	Ｉ７	墓坑88	４層	14.0	21.2	－	内面体部下半から底部にかけて当て具痕、内面体部上半より口縁部にかけて強い横方向のナデ、外面体部下半格子叩き､外面体部上半櫛目(11条ヵ)、外面口縁部ナデ、内面底部・内面口縁部・外面肩部から口縁部にかけて降灰	６世紀後半～７世紀前半
37	須恵器	脚付三連壷	Ｌ11	墓坑85	４層	－	－	(20.5)	（壷部分）内外面ナデ、外面底部のみヘラ削りが施される。（胴部）台形の透かし１カ所、長さ１cm程の縦方向のヘラによる模様が約0.5cmおきに施される。（脚部）台形の透かしが２段に施される。外面にヘラによる波状文が３段に施される。	５世紀後半～６世紀初頭
38	須恵器	短頸壷	Ｉ７	墓坑88	４層	7.2	9.6	－	外面体部に２条の沈線が施され、その上に長さ１cmほどの刻み目が約0.2cmおきに斜めに施される。外面底部ヘラ削り、外面底部にヘラ書き	６世紀後半～７世紀前半
39	須恵器	短頸壷	Ｊ13	溝84	８層	(7.4)	－	－	外面体部長さ１cmほどの刻み目が約0.2cmおきに斜めに施される。	６世紀後半～７世紀前半
40	須恵器	甕	Ｋ12	上部土塁	不明	(17.2)	－	－	内外面降灰	６世紀後半～７世紀前半
41	灰釉陶器	椀	Ｋ８	上部土塁	17層	－	－	－	内面降灰	11世紀後半
42	灰釉陶器	長頸瓶	Ｃ４	トレンチ３	８～10層	－	－	－	内面降灰	
43	灰釉陶器	瓶ヵ	Ｉ11	土坑22	１層	－	－	－	内外面降灰	
44	山茶碗	椀	Ｋ８	上部土塁	17層	－	－	－	内外面降灰	13世紀前葉
45	山茶碗	椀	Ｈ10	土坑21	６層	－	－	－	内面降灰	12世紀中葉
46	山茶碗	椀	Ｊ12	土坑33	２～３層	12.8	－	－	外面底部磨耗	13世紀後葉
47	山茶碗	椀	Ｋ８	上部土塁	17層	－	－	(7.8)	付高台、内面底部重ね焼き痕、高台端部磨耗	12世紀前葉
48	山茶碗	椀	Ｎ12	堀	４～11層	－	－	7.4	外面底部糸切痕、付高台、モミガラ痕、内面底部・高台端部磨耗	12世紀後葉
49	山茶碗	椀	Ｂ12	トレンチ５	12層	－	－	(7.4)	付高台、モミガラ痕	12世紀後葉
50	山茶碗	小椀	Ｋ８	上部土塁	17層	－	－	5.4	付高台、砂粒痕、内面体部降灰、内面底部・高台端部磨耗	12世紀中葉
51	山茶碗	椀	Ｉ11	土坑22	１層	－	－	(5.4)	糸切痕、付高台、モミガラ痕、内面底部・高台端部磨耗	13世紀中葉
52	山茶碗	椀	Ｃ４	トレンチ３	８～10層	－	－	(8.1)	糸切痕、付高台、モミガラ痕、内面底部・高台端部磨耗	12世紀中葉
53	山茶碗	椀	Ｊ12	土坑33	４層	－	－	(9.3)	付高台、内面底部・高台端部磨耗、	12世紀中葉
54	山茶碗	小皿	Ｊ11		包含層	(8.2)	1.4	(4.8)	糸切痕、指圧痕	13世紀中葉
55	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	Ｈ10	土坑21	６層	－	－	－	内面・外面鉄釉	1480年代頃～1530年代前半
56	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	Ｊ12	土坑33	４層	－	－	－	内面・外面体部鉄釉、外面体部下半錆釉	1570年代後半～1580年代
57	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	不明	トレンチ１	下部土塁埋土	－	－	－	内面・外面体部鉄釉、外面体部下半錆釉	15世紀後葉～1530年代前半
58	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	Ｈ10	土坑21	３～５層	(11.6)	6.6	(4.4)	内面・外面体部鉄釉、外面体部下半錆釉、高台端部磨耗	1560年代～1570年代前半
59	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	Ｈ11	土坑38	４層	(12.5)	6.3	(3.6)	内面・外面体部鉄釉、外面体部下半錆釉、高台端部磨耗	1570年代後半～1580年代
60	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	Ｈ10	土坑21	６層	(11.2)	－	－	内外面鉄釉	1480年代頃～1530年代前半
61	瀬戸美濃陶器	丸椀	Ｉ12	土坑32	１層	－	－	－	内外面鉄釉＋灰釉	
62	瀬戸美濃陶器	天目茶碗	Ｉ12	土坑33	３層	－	－	4.3	内面鉄釉、外面錆釉	1480年代頃～1530年代前半頃
63	瀬戸美濃陶器	丸皿	Ｈ11	土坑24	１層	－	－	－	内外面灰釉	16世紀
64	瀬戸美濃陶器	丸皿	Ｈ11	土坑24	１層	－	－	－	内外面灰釉	16世紀
65	瀬戸美濃陶器	皿	Ｈ10		包含層	－	－	(5.8)	内面・外面鉄釉	16世紀
66	瀬戸美濃陶器	丸皿	Ｈ10		包含層	－	－	－	菊皿、内面に丸ノミ状の工具によるソギが入る、内外面灰釉	16世紀
67	瀬戸美濃陶器	丸皿	Ｈ10		包含層	6.8	1.9	2.7	口縁端部を指で押さえ輪花風にしている、内外面灰釉、口縁端部・高台端部磨耗	
68	瀬戸美濃陶器	丸皿	Ｉ10		包含層	－	－	(5.0)	内面底部に印花、内面・外面灰釉、外面の灰釉が一部剥離、高台端部磨耗	16世紀

表３　出土遺物一覧表（３）

	種別	器種	出土位置（グリッド）	出土遺構	出土層位	法量			調整・技法等	推定年代
						口径	器高	底径		
69	瀬戸美濃陶器	丸皿	H11	土坑38	１層	－	－	5.8	内面底部に印花、内面・外面灰釉、高台内輪ドチ痕	16世紀
70	瀬戸美濃陶器	花瓶	H11	土坑38	３～４層	－	－	－	頚部に耳２箇所、耳に遊環、内面・外面錆釉	16世紀
71	瀬戸美濃陶器	花瓶	H11	土坑38	１層	－	－	6.6	内面・外面錆釉	16世紀
72	瀬戸美濃陶器	香炉	H10	土坑21	３～５層	－	－	－	外面体部下半に水平に３条の沈線、脚１カ所、内面・外面灰釉	16世紀
73	瀬戸美濃陶器	筒型容器	H10	土坑21	３～５層	－	－	－	内面口縁部・外面鉄釉、	16世紀
74	瀬戸美濃陶器	徳利	H11	土坑38	３～４層	－	－	－	外面・内面口縁部鉄釉	16世紀
75	瀬戸美濃陶器	徳利	H11	土坑38	３～４層	－	－	－	外面鉄釉	16世紀
76	瀬戸美濃陶器	徳利	H11	土坑38	３～４層	－	－	(11.2)	外面鉄釉	16世紀
77	瀬戸美濃陶器	徳利	I11	土坑22	１層	－	－	(9.1)	外面底部糸切痕、外面体部鉄釉、外面体部下半・底部磨耗	16世紀
78	朝鮮陶器	碗	J11		表土礫層	－	－	－	舶載品、内面体部象嵌、内面・外面施釉	15～17世紀
79	白磁	碗	H10	土坑21	３～５層	－	－	－	舶載品	15～16世紀
80	青磁	碗	I12	土坑32	２～３層	－	－	－	舶載品、外面連弁文	15～16世紀
81	青磁	碗	C４	トレンチ3	８～10層	－	－	－	舶載品、外面連弁文	14～15世紀
82	染付	碗	J11		表土礫層	－	－	－	舶載品、内外面染付	15世紀
83	青磁	碗	K14	撹乱		－	－	5.1	舶載品、内面体部・底部文様、高台内無釉	14～15世紀
84	染付	皿	H10	土坑21	３～５層	(10.3)	2.8	(3.8)	舶載品	15～16世紀
85	瀬戸美濃陶器	擂鉢	L12	上部土塁		－	－	－	内面体部に櫛目、内外面錆釉	1480年代頃～1530年代前半
86	常滑陶器	鉢	H11	土坑33	４層	－	－	－	焼締、内面降灰、	15世紀後半
87	常滑陶器	鉢	I11	土坑22	１層	－	－	－	焼締、片口部ヵ、	16世紀
88	瀬戸美濃陶器	擂鉢	I12	土坑32	２～３層	－	－	－	内外面錆釉、口縁部一部剥離・磨耗	1530年代後半～1580年代
89	瀬戸美濃陶器	擂鉢	I12	土坑32	２～３層	－	－	－	片口、内面体部に櫛目、内外面錆釉、片口部の口縁端部磨耗	1530年代後半～1560年代
90	瀬戸美濃陶器	擂鉢	J12	土坑33	４層	－	－	－	内面体部に櫛目、内外面錆釉、口縁端部磨耗	1560年代～1580年代
91	瀬戸美濃陶器	擂鉢	H10	土坑21	３～５層	－	－	－	片口、内面体部縦方向の櫛目（12本）の後に横方向の櫛目が入る、内外面錆釉、	1530年代後半～1560年代
92	瀬戸美濃陶器	擂鉢	H11	土坑38	１層	－	－	－	内面体部に櫛目、内外面錆釉、口縁端部磨耗	1560年代～1580年代
93	瀬戸美濃陶器	擂鉢	H11	土坑38	３～４層	－	－	－	内面体部に櫛目、内外面錆釉、口縁端部磨耗	1530年代後半～1580年代
94	瀬戸美濃陶器	擂鉢	H11	土坑38	３～４層	(34.0)	－	－	内面体部に櫛目（12本ヵ）、内外面錆釉、口縁端部磨耗	1560年代～1580年代
95	瀬戸美濃陶器	擂鉢	H11	土坑38	３～４層	－	－	(10.0)	内面体部に櫛目（18本ヵ）、外面底部糸切痕、内面・外面体部上半錆釉、内面・外面底部磨耗	16世紀
96	常滑陶器	鉢	J12	土坑33	３層	－	－	－	焼締、内面体部に櫛目、口縁端部・内面体部下半・外面体部磨耗	16世紀後半
97	常滑陶器	壷	J13	溝84	８層	(15.0)	－	－	焼締、外面降灰	1550～1600年
98	常滑陶器	甕	I11	包含層	浅黄色シルト	－	－	－	焼締、口縁端部磨耗	1450～1500年
99	木製品	棗玉	Ｉ７	墓坑88	４層	最大長1.8、最大幅1.3、孔径0.4				
100	木製品	棗玉	Ｉ７	墓坑88	４層	最大長1.8、最大幅1.3、孔径0.4				
101	木製品	棗玉	Ｉ７	墓坑88	４層	最大長2.0、最大幅1.3、孔径0.3				
102	木製品	棗玉	Ｉ７	墓坑88	４層	最大長2.1、最大幅1.4、孔径0.4				
103	木製品	棗玉	Ｉ７	墓坑88	４層	最大長2.1、最大幅1.4、孔径0.4				
104	木製品	棗玉	Ｉ７	墓坑88	４層	最大長2.2、最大幅1.6、孔径0.4				
105	石製品	管玉	I12	包含層	黒色砂質土	最大長2.4、最大幅1.0、孔径0.3				

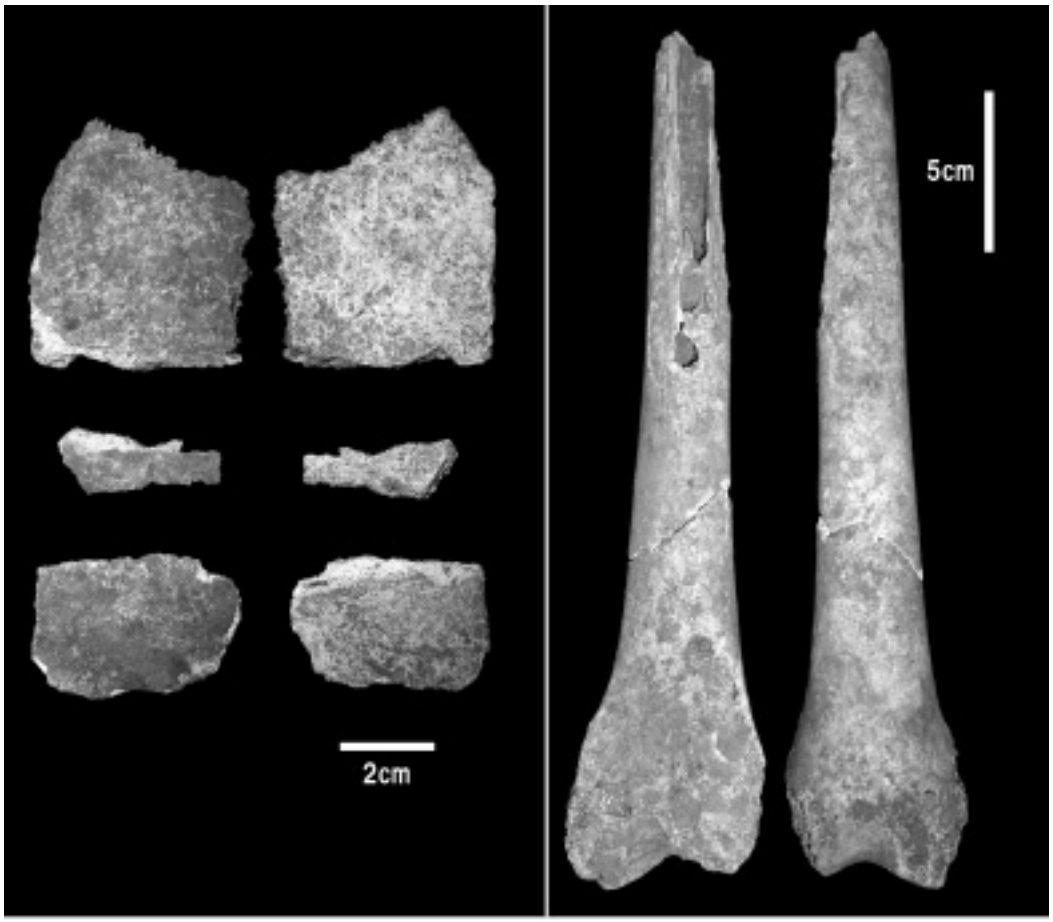
第５章　自然科学分析

第１節　墓坑88検出骨について

Ｊ８グリッドの墓坑88から骨が数点検出された。

検出された骨片には板状骨と棒状骨が含まれ、いずれも白骨化が進み、脆弱な状態である。板状骨は内面および外面に緻密質があり、その間に海綿質が認められる。また一部の板状骨には縫合線が認められる。これらのことから人の頭蓋骨であり、縫合線が外面と内面の両方から認められ、縫合が閉じていないことから壮年より若い個体であると考えられる。棒状骨については、その形状より、人の左大腿骨の骨幹部から遠位部である。保存状態が悪く、骨陵などの表面形状が残存しておらず、年齢や性別などの詳細な検討にはいたらないが、骨幹が太く、緻密質が比較的厚いことから男性の可能性が高いと考えられる。頭蓋骨の骨厚も厚く、このことと矛盾はないが、遺存状態が悪いため、可能性の示唆にとどめる。

なお、これらの骨試料は白骨化が進み、かなり脆弱な状態になってしまっているため、コラーゲン抽出が難しく、炭素窒素同位体の測定などをおこなうことは困難であった。



図版　愛宕山城趾遺跡Ｊ８グリッド検出人骨
左：頭蓋骨（左：外面　右：内面）
右：大腿骨　右（左：後面　右：前面）

第２節　土坑38検出魚骨、貝類の同定

１．はじめに

愛宕山城跡土坑38より小規模な貝層が検出された。本節ではこれらの貝類について分類・同定を行なった。以下に出土した貝類について種類別に説明する。

２．同定結果

試料は、土坑38の２層よりブロックサンプリングされた資料及び、３層、４層から採取された試料17点である。ブロックサンプリング試料（タテ50㎝×ヨコ30㎝×厚さ10㎝）は１件のみで、水洗した後、貝殻片および魚骨片を抽出した。

今回分析した貝類は723点であり、その地点別の内容を表４に示した。全体の傾向としては、ハマグリが最も多く出土し、シジミとマガキが出土する特徴を持つ。以下に主要な分類群について説明する。なお、個体数については、二枚貝は殻頂の残存している個体を、巻貝は芯が２巻以上残存する個体を計数した。なお、表記する割合は左右殻の最小数を用いた最小個体数より算出したものである。

表４　愛宕山城跡検出貝類出土表

地区名		H12	H13	I 12	種類別合計（殻数）	
遺構番号		土坑38				
層位		２層	３層	４層		
採取年月日		2006.3.3	2006.2.27	2006.2.28		
巻貝類						
オオタニシ		2	—	—		2
ヒメタニシ		1	—	—		1
二枚貝類						
フネガイ科	*Fr.*	＋	—	—		
マガキ	*L*	38	1	—	39	
	R	15	—	—	15	54
ハマグリ	*L*	226	6	1	233	
	R	222	6	2	230	463
シオフキガイ	*L*	5	—	—	5	
	R	2	—	—	2	7
シジミ	*L*	101	—	1	102	
	R	93	—	—	93	195
巻貝類（殻数）		3	—	—		3
二枚貝類（殻数）		702	13	4		719
合　計（殻数）		705	13	4		722

ハマグリ

ハマグリは本遺跡から出土した貝類の中でもっとも多く、全体の67％を占める。その殻長値は、小さいもので約25㎜、大きいものでは65㎜を超える。その中で35～50㎜程度がもっとも多く出土している。

ハマグリは、日本周辺の沿岸域に広く分布し、潮間帯から水深20m前後の砂泥底に生息する。干潟などから容易に採取できることから多くの遺跡で比較的多く産出し、一般的な食用の貝類のひとつで

ある。

シジミ

シジミは27%を占め、ハマグリに次いで多く出土している。シジミの殻長値は、およそ16～29㎜程度、17～19㎜程度と23～24㎜程度がもっとも多く出土している。

シジミ科は、日本全国の淡水域から汽水域に広く生息しており、種によってその生息域は異なる。淡水域に生息するマシジミ、汽水域に生息するヤマトシジミなどが存在するが、本遺跡から出土する個体はその形態的特徴からヤマトシジミと考えられる。このヤマトシジミは河口の汽水域の砂中に生息しており、採取が容易であることから、ハマグリと同様に一般的な食用貝類のひとつとされており、多くの遺跡でも検出されている。

マガキ

マガキは全体の４％を占める。マガキは貝殻の性質上、破片化しやすいため、その多くは破片であり、縁辺部が欠けてしまうことが多い。そのため、殻高の計測が難しいが、最大のものでおおむね114㎜程度である。

マガキは、日本全国に分布し、潮間帯の岩礁に固着するか、砂礫底に密集してカキ礁をつくり生息している。

シオフキガイ

シオフキガイは全体の0.6%を占める。

シオフキガイは、房総半島以南に分布し、潮間帯から水深20ｍの砂泥底に生息している。

オオタニシ

オオタニシは１個体が出土している、

オオタニシは本州から九州に分布し、おもに池、沼、川に生息している。

ヒメタニシ

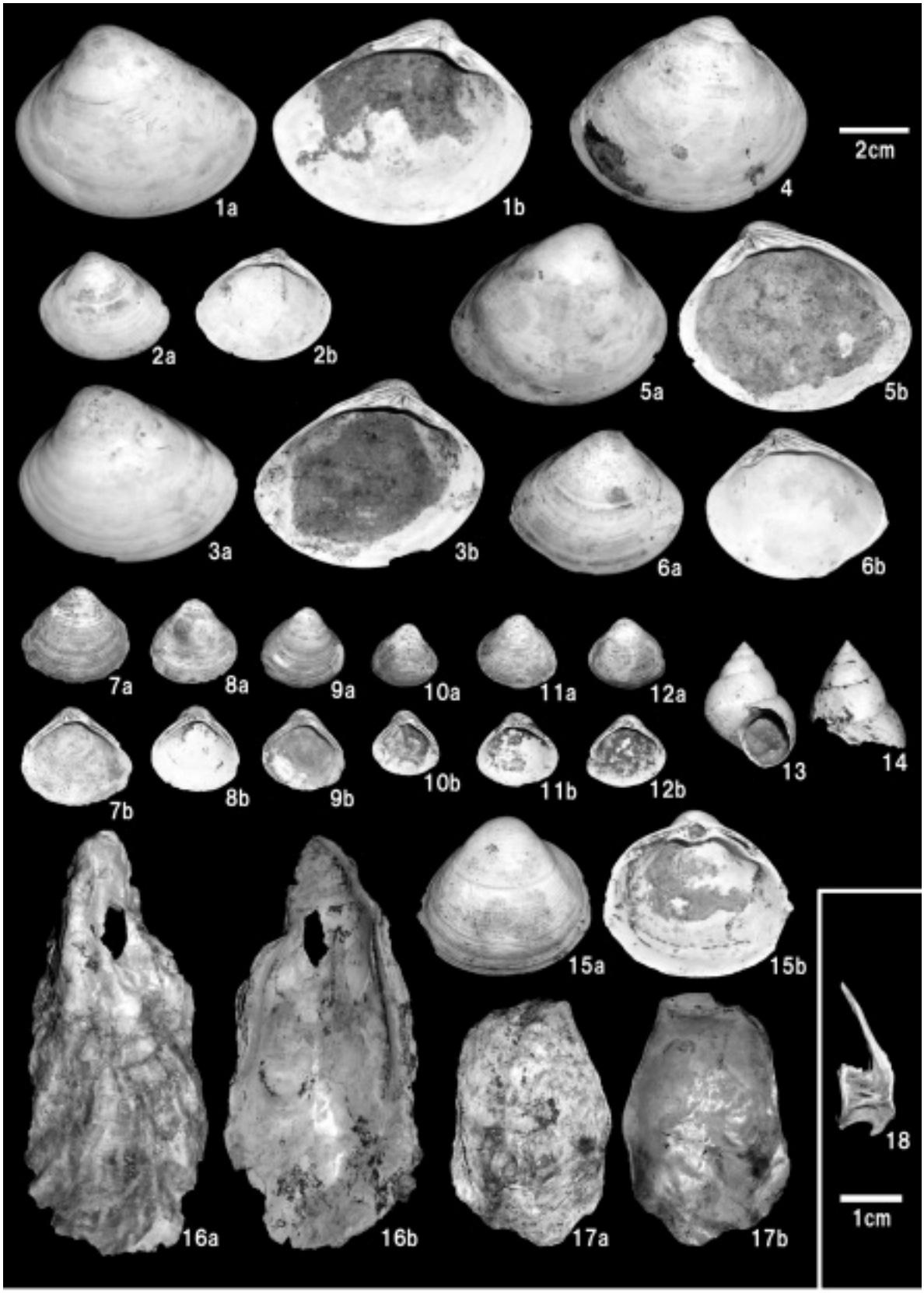
ヒメタニシは２個体が出土している、

ヒメタニシは本州から九州に分布し、おもに池、沼に生息している。

また、これらの貝類試料中にコイ科の尾椎が含まれていた。この椎骨の椎体横径は8.8㎜であり、体長33㎝の現生標本よりやや大きく、40～50㎝程度の比較的大型の個体と考えられる。同定された椎骨は１つであったがそのほかにも同定にいたらない椎骨片が確認されており、残存する形状からおそらく同一のもの、コイ科のものと考えられる。

３．おわりに

愛宕遺跡より検出された貝類の多くは一般的な食用貝類であるハマグリであり、全体の２／３を閉めていた。またそのほかについては、同様に一般的な食用貝類であるシジミが全体の１／４以上を占め、これら２種と、同じく一般的に食用とされるマガキの３種をあわせると貝類全体の98%を占めることになる。これらは河口域から潮間帯に生息している種類であるため、比較的容易に採取できるもののみ検出され、サザエやアワビなどを含まないことから、おそらく一般的な庶民のゴミ捨て場であると考えられる。



図版　愛宕遺跡出土貝類・魚類（a：外面、b：内面）

1～6．ハマグリ（1～3．左殻、4～6．右殻）

7～12．シジミ（7～10．左殻、11・12．右殻）

13．ヒメタニシ　14．オオタニシ　16・17．マガキ（16．左殻、17．右殻）

18．コイ科　尾椎

第３節　炭化材の樹種同定

１．はじめに

愛宕山城跡から出土した炭化材４試料の樹種同定結果について報告を行った。出土位置、層位については表５を参照されたい。

２．方法

同定を行った炭化材４試料のうち２試料は、複数の炭化材が混在するものであった。そこで、各試料にＡからＤまでの試料番号を設定し、複数の炭化材が含まれるものについては１から４までの枝番号を割り振った。複数の炭化材が含まれている試料は、形状、色などの状態が似ている炭化材をまとめ、さらにその中でも大きな炭化材を選び出し同定用の試料とした。

次に、走査電子顕微鏡で観察を行うため、材の３方向の断面（横断面・接線断面・放射断面）を作成した。走査電子顕微鏡用の試料は３断面を５㎜角程度の大きさに整形し、直径１㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を乾燥させたあと金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で撮影を行った。同定を行った試料のうち、各分類群を代表する試料については写真図版（図版１および図版２）を添付し、同定の根拠とするとともに、その同定の根拠を結果に記述した。

３．結果

同定の結果、アカマツ３点、ヒノキ属１点、コナラ亜属アカガシ亜属１点、クマシデ属イヌシデ節１点、モクレン属１点、カエデ属２点、以上合計９点が検出された。表２に樹種同定結果を示す。

表５　愛宕山城跡の炭化材樹種同定結果

試料番号		グリッド	遺構層位	同定樹種
A	A－１	I 12	土坑38　４層	コナラ属アカガシ亜属
	A－２	I 12	土坑38　４層	モクレン属
	A－３	I 12	土坑38　４層	アカマツ
B	B－１	I 12	土坑38　４層	カエデ属
	B－２	I 12	土坑38　４層	アカマツ
	B－３	I 12	土坑38　４層	クマシデ属イヌシデ節
	B－４	I 12	土坑38　４層	ヒノキ属
C	C	H13	土坑38　３層	アカマツ
D	D	I 12	土坑38　４層	カエデ属

次に、同定された樹種の材組織の記載を行う。

⑴　アカマツ　*Pinus densiflora* Sieb. Zucc.　マツ科　図版１　１ａ－１ｃ　（試料番号Ｃ）

垂直および水平樹脂道あり。早材から晩材への移行はゆるやか。分野壁孔は窓状、放射仮道管の内壁には、重鋸歯状の肥厚が顕著である。アカマツは山麓から高所にまで生育し、乾燥したやせ地に対する適応性が強いので、乱伐された地域にもよく生育する種である。

⑵　ヒノキ属　*Chamaecyparis*　図版１　２ａ－２ｃ　（試料番号Ｂ－４）

仮道管、放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材部は少なく、早材から晩材への移行はやや急である。分野壁孔はやや大きく、ヒノキ型から小型のスギ型であるが、孔口は水平近くに開き、１

分野に２～３個ある。

⑶ クマシデ属イヌシデ節　*Carpinus* Sect. *Eucarpinus*　カバノキ科　図版１　３ａ-３ｃ　（試料番号Ｂ-３）

単独ないし２から３個結合した小径の道管が、接線状に並ぶ散孔材。単穿孔ないし階段数の少ない階段穿孔あり。道管の内壁にらせん肥厚あり。放射組織は１～３列で同性、集合放射組織あり。山地にふつうに見られる落葉高木である。

⑷ コナラ属アカガシ亜属　*Quercus* Subgen. *Cyclobalanopsis*　ブナ科　図版２　４ａ-４ｃ　（試料番号Ａ-１）

円形で壁の厚い大型の道管が、単独で放射状に並ぶ放射孔材。同性の放射組織によって構成される単列および集合放射組織を持つ。コナラ属アカガシ亜属には、照葉樹林を構成する主要な常緑広葉樹であるイチイガシ、アカガシ、ツクバネガシ、アラカシ、ウラジロガシ、シラカシなどが含まれる。

⑸ モクレン属　*Magnolia*　モクレン科　図版２　５ａ-５ｃ　（試料番号Ａ-２）

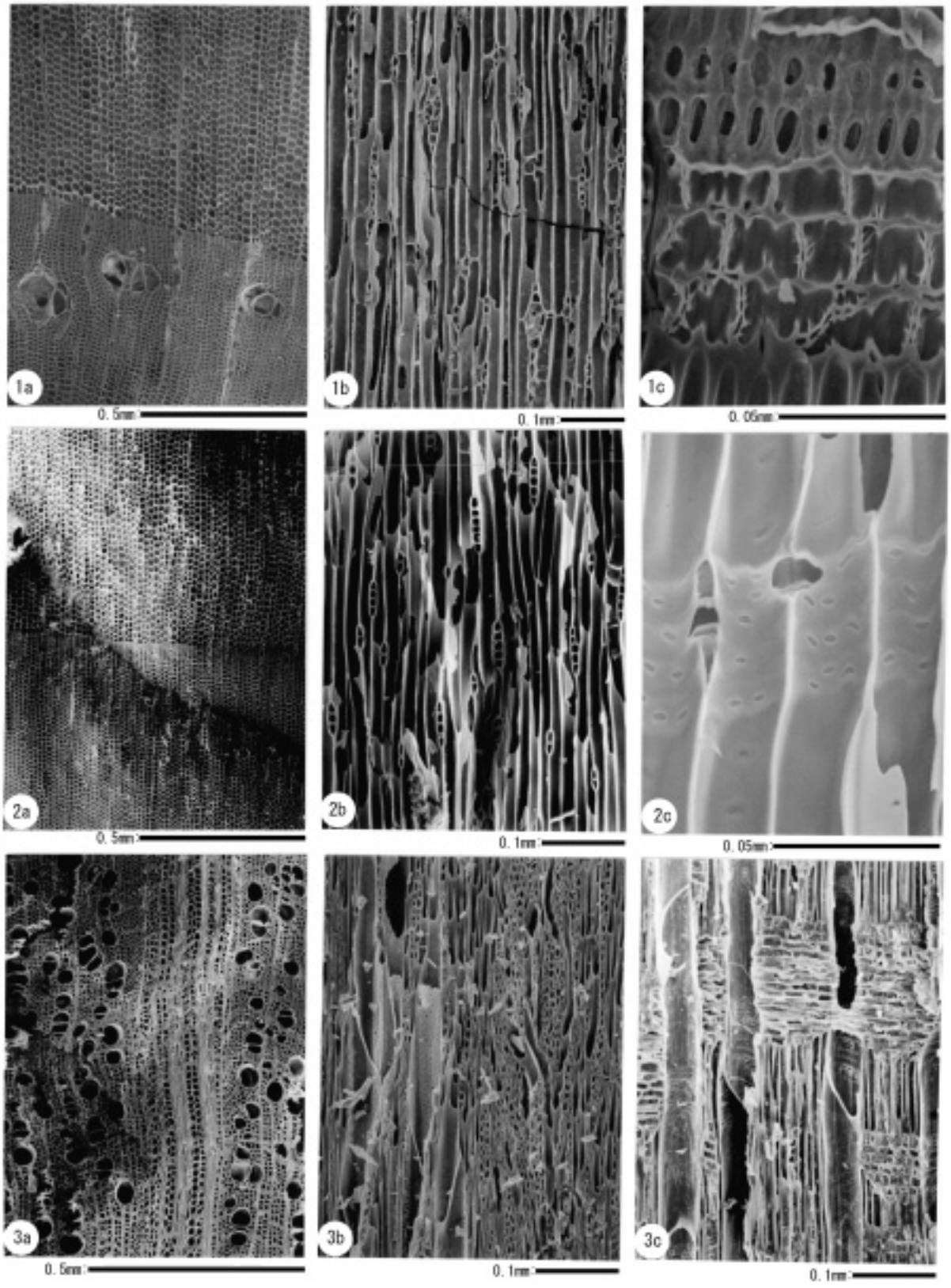
道管径中庸からやや小の道管が、単独ないし２～６個不規則に複合する散孔材。単穿孔で側壁の壁孔は対列状または階段状。放射組織は異性で１～２列。モクレン属にはホオノキやコブシ、タムシバなどを含む。いずれも山地から低地に分布する落葉高木である。

⑹ カエデ属　Acer　カエデ科　図版２　６ａ-６ｃ　（試料番号Ｂ-１）

道管径は中庸、散孔材。単独ないし２、３個放射方向に複合して平等に分布する。単穿孔でらせん肥厚あり。放射組織は１～４列。カエデ属は日本に28種自生する。落葉高木または小高木である。

４．まとめ

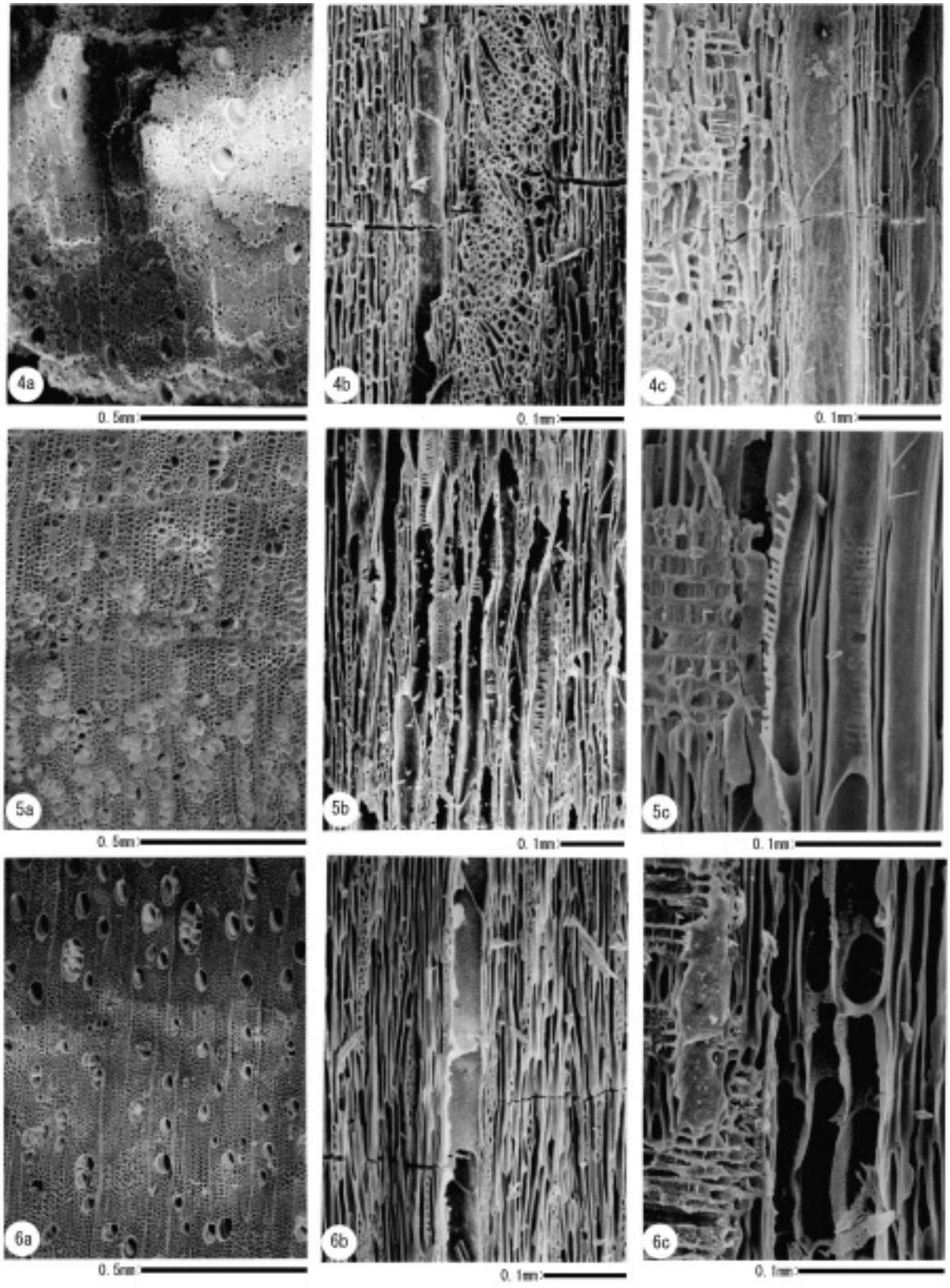
以上の分析結果より検出された樹種は、出土遺物が生育していた当時の植生状況から考えても、愛宕遺跡周辺でふつうに分布し、近隣の山野から容易に採取、利用できたと考えられる樹種である。とくにアカマツやイヌシデ節、モクレン属、カエデ属などは、おもに照葉樹林ではなく雑木林などの落葉広葉樹林を構成する樹種であることから､これらの種が検出されたことは当遺跡周辺の植生が当時、比較的開けていたことを示すものである。なお、今回検出された炭化材から１点であるがコナラ属アカガシ亜属が検出された。堅炭の定義は、梅棹ほか（1992）によると材質の硬いカシ・ナラなどを蒸し焼きにしてつくった炭であるとしている。このことからコナラ属アカガシ亜属の出土は、堅炭として生産されたことも考えられる。



図版 1　愛宕遺跡出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

1a-1c：アカマツ（試料番号 C）　2a-2c：サワラ（試料番号 B-4）　3a-3c：クマシデ属イヌシデ節（試料番号 B-3）

a：横断面　b：接線断面　c：放射断面



図版２　愛宕遺跡出土炭化材材組織の走査電子顕微鏡写真

4a-4c：コナラ属アカガシ亜属（試料番号 A-1）　5a-5c：モクレン属（試料番号 A-2）　6a-6c：カエデ属（試料番号 B-1）

a：横断面　b：接線断面　c：放射断面

第６章　ま　　と　　め

第１節　縄文時代の遺構と遺物

土塁除去後の下層遺構より縄文時代の遺構・遺物が検出された。本節では縄文時代の遺構・遺物について列挙し、今後の課題を考えてみたい。

縄文時代の遺構として土坑６基（土坑72～75、92、93）が検出された。これらはすべて性格不明な土坑であるが、埋土はよく締まった赤褐色の粘質土で共通する。土坑72、74、92、93からは縄文時代の早期前半に比定される押型文の施された縄文土器の深鉢が出土した。

愛宕山城跡及び周辺の丘陵で、縄文時代の遺構・遺物が確認されたのは本調査が初めてである。今回の資料は、縄文時代の遺跡の立地と土地利用を考えるうえで重要な情報と思われる。愛宕山城跡周辺の丘陵には本調査地と同様な地形が広がっており、現段階では遺跡と認識されていないが、今後は分布調査等をすすめ遺跡の把握を行っていくべきと思われる。

また、今回は図示できなかったが無文の土器も数点出土している。これらを資料化し、有文土器との比較を行っていくことも今後の課題としておきたい。

第２節　古墳時代の遺構と遺物

本節では土塁の断ち割り、除去後に検出された墓坑85、88を中心に古墳時代の遺構・遺物についてまとめておきたい。

なお、後述するがこれらは後世の削平・撹乱が激しく、詳細な形態が不明であるためここではひとまず墓坑として報告する。

墓坑85

東西に伸びる土塁の中央やや東寄りから検出された。土師器高杯、須恵器脚付三連壷が出土していること等から墓坑と判断した。北は堀及び郭１構築時に削平され、南東は溝84に切られるといった削平や撹乱が激しいため、埋葬形態の詳細は明らかにし得ない。北に開口する横穴墓の可能性も考えられるが、砂質で崩落しやすい地山であることや、埋土中に天井崩落層が認められないこと、地形からみて北に開口するのが不自然であること等から可能性の指摘に留めたい。

また、時期不明であるが墓坑85の約５ｍ西には比高差約0.5ｍの段が、地山を削り出すことによって設けられている。この段が墓坑85と関連があるならば、地山を塚状に削ったうえで墓坑85が掘り込まれていることになり、古墳あるいは土坑墓となる可能性も考えられる。しかし、この段も堀及び郭１構築時に削平を受けており、現況では約10.5ｍしか残存しない。また、構築の時期も不明であるため、これも可能性の指摘に留めておきたい。

遺物は６世紀後半頃の土師器高杯（10、11）、須恵器脚付三連壷（37）が出土している。両者とも類例は少なく、脚付三連壷がわずかに名古屋市守山区上志段味所在の羽根古墳等から出土している。

羽根古墳出土の脚付三連壷は５世紀後半から６世紀初頭のものと考えられており、墓坑85出土のものは波状文が若干簡素化されていることから６世紀前半以降のものと考えられよう。

墓坑85の南東で検出された溝84は、平面プランからは横穴式石室等の前面につくられる墓道にも見えるが、墓坑85とは切り合い関係にあり、明らかに後世の掘削である。また、埋土も墓坑85がさほど締まりの強くない黒色土であるのに対し、溝84は締まりの強い砂質土で充填されている。これらのことから、溝84と墓坑85に直接的な関連は極めて薄いと思われる。溝84の掘削時期は、土塁構築以前であることは明らかであるが、詳細な時期は判然としない。埋土上層より常滑産の壷（97）が出土していることから、土塁構築時に埋没した可能性が高い。

墓坑88

南北に伸びる土塁の南端部から検出された。床面に設置された石列の直上から人骨が検出されていること、また出土した遺物等から墓坑と判断した。南は堀及び郭１構築時に削平されているため全形は知り得ない。北東隅と南東隅の壁面が若干オーバーハングすること等から、西に開口する横穴墓の可能性も考えられるが、墓坑85と同様に砂質で崩落しやすい地山であることや、埋土中に天井崩落層が認められないこと、地形からみて西に開口するのが不自然であること等からこちらも可能性の指摘に留めたい。

人骨は頭蓋骨と左大腿骨が出土している。頭蓋骨がほぼ原位置と考えられる石列直上から検出されたのに対し、大腿骨は床面から浮いた状態で検出されている。よって頭蓋骨と大腿骨は同一の被葬者のものかは断定できない。

遺物は須恵器杯蓋（30）、提瓶（35）、壷（36）、短頸壷（38）、棗玉（99～104）が出土した。須恵器は生産地が不明のものが多いが、概ね６世紀後半から７世紀前半のものと思われる。

その他、古墳時代に属する遺物が主に包含層中より出土している。これらはおおむね墓坑85、88より出土した須恵器とほぼ同様の年代と考えられる。よって、後世、特に戦国期の愛宕山城跡の造成により失われた古墳時代の遺構も、少なからず存在するものと思われる。大正13年、三重県によって発行された『名勝舊蹟天然記念物調査報告』には、愛宕山徳成でハマグリ、シジミ、アカニシ等の貝類や土器等が出土したという記事が見られる。今回の調査で発見した古墳時代の遺構・遺物はこうした記事を裏付けるものである。『名勝舊蹟天然記念物調査報告』では、土器の出土量の多さから古墳の存在には否定的で「住民居宅の址の類」と想定している。その後の造成等で滅失した遺構も多いと思われるが、今後慎重に分布調査等をすすめ、愛宕山城跡及び周辺丘陵における古墳時代の土地利用を考えていくべきと思われる。

第３節　近世地誌類にみる愛宕山城跡

戦国期の北伊勢地域（桑名・員弁・朝明・三重・鈴鹿・河曲郡）には、当地に伝わる軍記・地誌によると、いわゆる「四十八家」（または「四十八士」）と呼ばれる小領主が割拠していたことが伝えられている。

ここ桑名では、小領主が村ごとにあり、それらの城館が点在していたといわれているが、一次史料

で確認できる小領主は僅か数家であり、その存在自体が確証に至っておらず、城館跡の確認も容易ではない。その中でも、現在は走井山公園となり、「矢田城跡」と呼ばれている桑名市大字矢田字城山の城館跡については、太田牛一著『信長公記』の天正元年（1573）長島一向一揆攻略の記事に、「北伊勢一篇に罷成、川内長嶋（現桑名市長島町）も過半相果、迷惑仕之由也、矢田之城、御普請丈夫に被仰付、瀧川左近入をかせられ」（括弧引用者）とあるので、天正以前から、当地に城館が存在していたことは確かなようである。

現在の『桑名市遺跡分布地図』では、矢田城跡の周辺には２箇所の城館跡が確認できる。１つは、矢田城より150mほど東北東に「愛宕山城」（矢田字城山）、そして矢田城より１㎞ほど北北西にある西方字南之広の城館跡は「西方城」と名付けられている。この２箇所の城館は、近年の調査においても、確かに城館跡が存在することがわかっている。ところが、地誌や軍記、そして現在の市史や遺跡分布図において、城館跡の名称が混乱しやすい状況となっているので、整理しておきたいと思う。

まず、桑名とその周辺に限定された地誌では最古となる『勢桑見聞略志』（宝暦２年〈1752〉序文）では、「愛宕山、矢田八郎右衛門、今、走井ノ東カ城ノ跡ト見ユ、山ノ西堀ノ跡モ見ユ」「元愛宕山、近藤右近、是、西別墅ト云、昔此城ノ鎮守ニヤ、此山ニ愛宕ノ小社アリ、寛永年中走井山ノ裏、東ノ古城跡ニ定綱公ノ代ニ遷サル、是ヨリ此所ヲ愛宕山ト云、西別所ノ旧地ヲ元愛宕ト云也、今ノ愛宕山ノ城モ矢田ノ城ト云、観音山ノ城モ矢田城ト云シ也」とある。すなわち、「愛宕山」は、現在は矢田字城山の愛宕山城と呼ばれている城館跡を示し、そして「西別墅」の「元愛宕山」は、現在西方城と呼ばれている城館跡を示し、西別所字愛宕山という地名も存在する。なお、西方字南之広は、西別所字愛宕山の南西にあって隣接し、およそ城館跡も両地を跨いでいる。

次に、同地誌の由来によると、寛永年間（1624～44）までは、「元愛宕山」の地に愛宕の小社があり、この社が矢田字城山に移されると、当地は愛宕山と呼ばれるようになったという。他の地誌では、西方字南之広の城館は、その城主といわれる加藤三助（または甚助・勘助）によって「加藤城」と記すものや（『久波奈名所図会』中）、地名によって「愛宕山城」と記すものもある（『桑名志』３）。一方、矢田字城山の城館は、天保６年（1835）序文の『桑名志』が「矢田北辺城」と記し、後の『桑名郡志』『桑名市都城址考』がそれに習い、他に『伊勢軍記』『北伊勢戦伐記』は、その城主を矢田市郎左衛門とすることで「愛宕ノ城主」「愛宕山ノ城主」と記し、『桑名市史補編』も俗称によって「愛宕山城」と記している。近年では、『桑名市遺跡分布地図』も『桑名市史補編』に習い、矢田字城山の城館跡は「愛宕山城」の名称で定着したわけである。

第４節　戦国期の遺構

本調査では戦国期の遺構が最も多く検出されている。第１章第２節で記したように、愛宕山城跡には近世以降、愛宕社や呑景楼等の施設が建てられていたようであるが、戦国期の遺構は比較的良好に残存していた。本節では特徴ある遺構を概観し、第６節で愛宕山城跡の構造について考えてみたい。

郭１

南は調査区外となるため全形と規模は知り得なかったが、南北に長い平坦面で、東は郭２及び切岸

が設けられ、北側の郭３とは堀によって隔てられる。また西側にも堀が巡るが、堀のさらに西側は調査区外になるため掘削できなかった。背後となる丘陵、もしくは西側に展開する未知の郭と、郭１を隔絶するためのものと考えられる。南は切岸状の崖となる。この切岸状の崖が削平されておらず、愛宕山築城時の地形そのままだとすれば、隅部は若干崩落しているものの、南北に長い長方形の郭となる。

北と西の一部にはＬ字型に屈曲する土塁が構築される。土塁の構築方法については後述する。

平坦面は地山を削平し確保している。北半には土坑、柱穴が多数確認されたが、性格の明確なものはごく少ない。南半では遺構は確認されなかったが、北半とほぼ同様の標高であることから何らかの利用が為されていたと思われる。

土坑38

郭１から検出された廃棄土坑。小規模であるが貝類の混じる土層が確認された。貝類の同定等の詳細は第５章を参照されたい。

貝類はほとんどが近在で採取でき、食用にされたと考えられるハマグリ、シジミ、マガキであった。また、その他に出土した貝や魚（コイ）も近隣で容易に採取できるものである。同様に炭化材の樹種も周辺で容易に採取が可能なものであった。

出土遺物から16世紀後葉もしくはそれ以降に埋没したものと考えられる。

土塁

Ｌ字型に屈曲し、郭１の北と西の端部に構築されている。断ち割り調査の結果、構築方法は地山を削り出して基部をつくった後に、砂質土を盛り上げ（下部土塁）、その上に砂礫を盛土（上部土塁）しているが、意図は不明である。盛土は郭側から順次土塁上に積み上げる方法で行ったと考えられる。

堀

郭１の北と西にＬ字状に巡る。安全上の問題から堀を完掘することはできなかったが、部分的なトレンチによって、断面が逆台形となるいわゆる箱堀であることを確認している。

東端は切岸まで伸び、北西隅でほぼ直角に南に屈曲する。北は調査区外となるため掘削できなかったが、土橋状の高まりをはさんで南の切岸状の崖まで伸びるようである。

郭２

郭１の東側ほぼ中央部に取り付くいわゆる腰郭。ごく小規模で遺構も検出されなかった。地山を削り出して構築している。

郭３

郭１より堀を隔てて北に展開する郭。上部は削平され遺構は残存していなかったが、東は急峻な切岸となる。南東隅はほぼ直角になるように成形される。

切岸

郭１及び郭３の東は急傾斜の切岸となる。調査区外となる部分も多く、安全上からもすべてを掘削することは困難であった。掘削していないが、郭１の南も急峻な崖となっている。後世の削平である可能性もあるが、切岸として利用されていたものと思われる。

第５節　戦国期の遺物

戦国期の遺物は瀬戸美濃の大窯で焼造された陶器（以下、瀬戸美濃陶器と記述する）や、常滑窯産の壷・甕・摺鉢、土師器の皿、舶載品の陶磁器等である。本節では出土遺物のうち最も数量の多い瀬戸美濃陶器の天目茶碗と擂鉢に着目し、愛宕山城跡の成立と存続時期を考えてみたい。

出土した瀬戸美濃陶器天目茶碗と擂鉢のうち、図化できたものは16点である。これらの年代観は、藤澤良祐の大窯編年（藤澤2001・2001）によると、概ね大窯第１段階（1480年代頃～1530年代前半）から第２段階（1530年代後半～1560年代）を経て、第３段階（1560年代～1580年代）に該当する。その中で第１段階に比定されるものは55、60、62、85の４点、第２段階におさまるものは89、91の２点、第３段階のものは残りの10点である。

なお、藤澤の大窯編年には年代観に疑義も示されており、大窯第１段階を1520年代～1560年頃、第２段階を1540年代～1570年代、第３段階を1560年頃～1590年頃とする考え方もある（高木ほか2002、尾野2004ａ・ｂ）。

愛宕山城跡から出土した遺物には紀年銘等の記された直接的な資料がないため、今のところこれらの年代観には言及できないが、いずれにせよ、瀬戸美濃陶器天目茶碗・摺鉢は大窯第１段階から出現し、第３段階で最も数量が多くなり、その後は遺物が出土しなくなる。これは図化が可能なわずか16点を検討したのみであり、推測の域を出ないが、この年代観をもとにして次節で築城の契機と存続年代について述べたい。

また、これらの戦国期の遺物に先行する、山茶碗等の中世前半の遺物も相当量が出土している。遺構に伴って出土したものはさほど多くなく、中世前半の愛宕山城跡を復元することはできないが、立地等から集落が形成されていた可能性も考えられよう。

第６節　愛宕山城跡の構造と築城の契機

前節までに検出された遺構・遺物等について述べてきた。本節では愛宕山城跡の構造と築城の契機、存続年代、また、隣接する矢田城跡との関連等について考えてみたい。

前節で述べたように、年代がある程度絞り込める瀬戸美濃陶器天目茶碗及び、擂鉢は大窯第１段階から出現し、第３段階で最も多くなり、その後、遺物は出土しない。染付や常滑窯製品等で14世紀に遡る年代のものもあるが、これらのことから愛宕山城跡成立の時期はおおよそ15世紀末から16世紀初頭にかけてであり、16世紀後半に盛期を迎えたが、16世紀の終わりには使用されなくなったものと思われる。

すなわち、第１章第２節でふれたが、桑名市矢田周辺を本拠としていた土豪である矢田氏は、15世紀末から16世紀初頭にかけて矢田城跡及び、愛宕山城（矢田北辺城）跡を築いたが、永禄・元亀・天正年中、伊勢に侵攻した織田信長に降り、その際に愛宕山城跡は廃されたと考えることができよう。

また、天正元（1573）年、織田信長が瀧川一益に矢田城を堅固にするよう命じた、『信長公記』の記事に着目するならば次のように考えることも可能である。

織田信長の命により桑名に配された瀧川一益は、矢田氏が築いた矢田城跡に本拠を構え、天正元（1573）年、矢田城跡を堅固にするために北東に愛宕山城跡（矢田北辺城）を築いた。大窯第３段階の遺物が最も多く出土するのはこのためである。それ以前の遺物は矢田城跡から搬入されたものと考えられよう。その後、瀧川一益は天正２（1574）年の長島一向一揆平定の後、本拠を長島に移す。その際に矢田城跡、愛宕山城跡は廃城となったため、大窯第３段階以降の遺物は出土が見られない。

矢田城跡、愛宕山城跡に関する同時代資料はほとんど残存しておらず、矢田城跡の発掘調査も実施されていないため、これらの考え方はあくまで推測となってしまう。しかしながら遺構の状況や地誌類の検討等から今のところ、後者の考え方を支持したい。

前述のように断ち割り調査の結果、土塁の基部には古墳時代の墓坑が２基確認された。２基はいずれも土塁ないしは堀、郭１等の構築時に削平を受けている。すなわち、愛宕山城跡は旧地形を最大限活かしているのではなく、何らかの規範性のもと、旧地形を方形に成形しているものと思われる。郭１及び、郭３の隅部を直角に成形しているのも同様に方形を意識したものであろう。これは在地の土豪が築城したのではなく、郭の機能分化の重要性を熟知したより広範囲に権力を発揮する者―例えば織田信長であり、その命を受けた瀧川一益―によって築城された証左と見ることはできないだろうか。

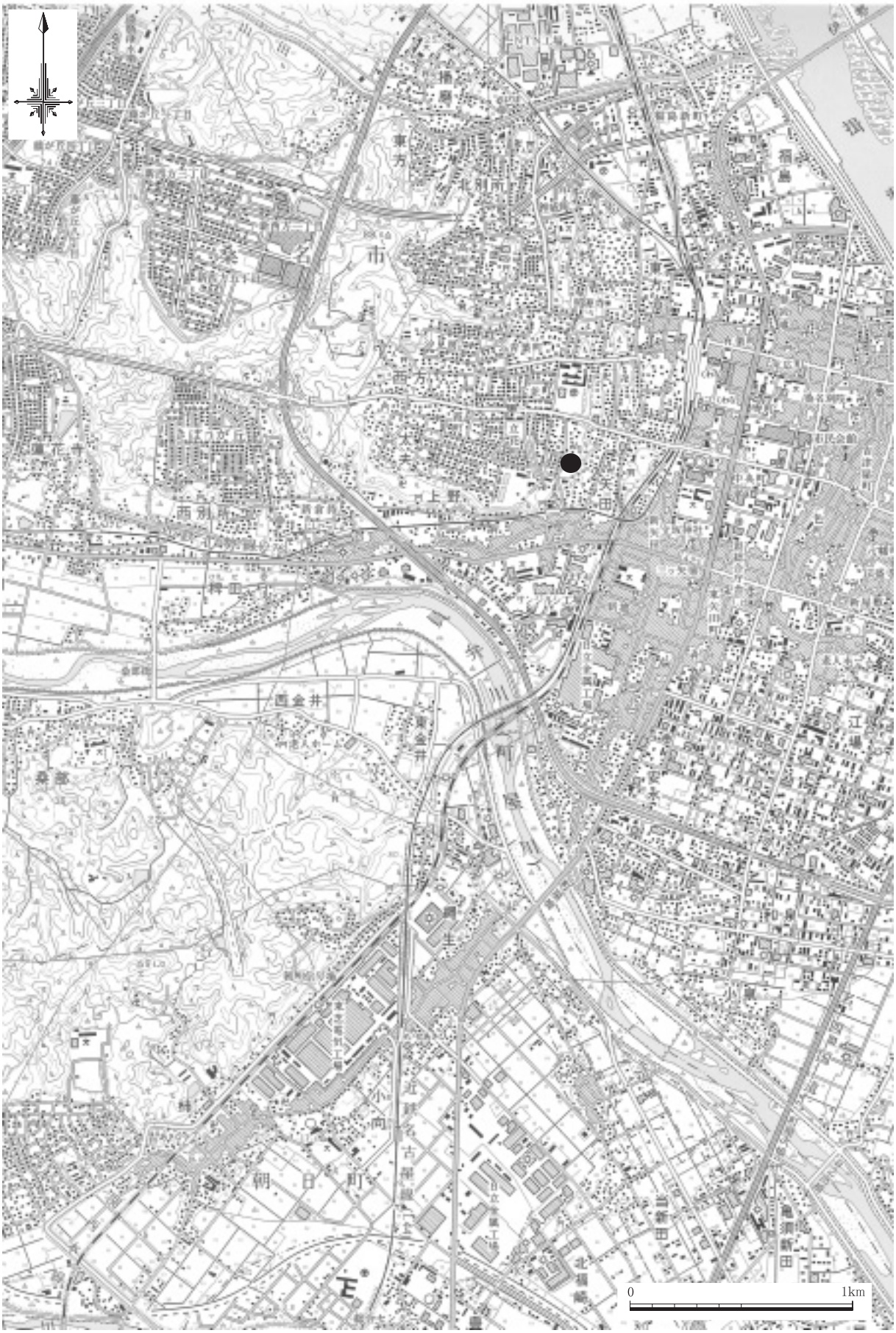
矢田城跡、愛宕山城跡の後背にあたる部分は、宅地造成により、かつての地形を窺い知ることはできない。矢田城跡の北に、現在は道路として利用されている、比高差５ｍ以上になる南北に伸びる大規模な溝状のものは、矢田城跡の堀と伝承される。矢田城跡、愛宕山城跡が立地する丘陵には、織田信長の北勢地域の拠点にふさわしい複数の郭を持った大規模な城郭が展開していたのかもしれない。

参考文献

『伊勢軍記』上・下（桑名市立中央図書館蔵）
『北伊勢北郡諸士録　全』（国立国会図書館蔵）
『勢桑見聞略志』上・中・下（桑名市立中央図書館蔵）
『桑府名勝志』１～６（桑名市立中央図書館蔵）
『桑名志』１～６（桑名市立中央図書館蔵）
『桑名市都城址考』（桑名市立中央図書館蔵）
三崎家文書『北伊勢戦伐記』（桑名市博物館蔵）
三崎家文書「公私用留記」（桑名市博物館蔵）
成瀬白刃編『桑名案内』（私家版、1919年）
岡山大学池田家文庫等刊行会編『信長記』　福武書店　1975
倉田正邦校訂『勢陽五鈴遺響』１～５　三重県郷土資料刊行会　1975
『影印・校注　久波奈名所図会』上・中・下　久波奈古典籍刊行会　1977
「織田信雄分限帳」『新編　一宮市史』資料編補遺２　一宮市　1980
『桑名郡志』上・中・下　歴史図書社　1980
「桑名雑志」『桑名藩史料集成』　桑名市教育委員会　1990
「案内雑書　全」『桑名藩史料集成』　桑名市教育委員会　1990

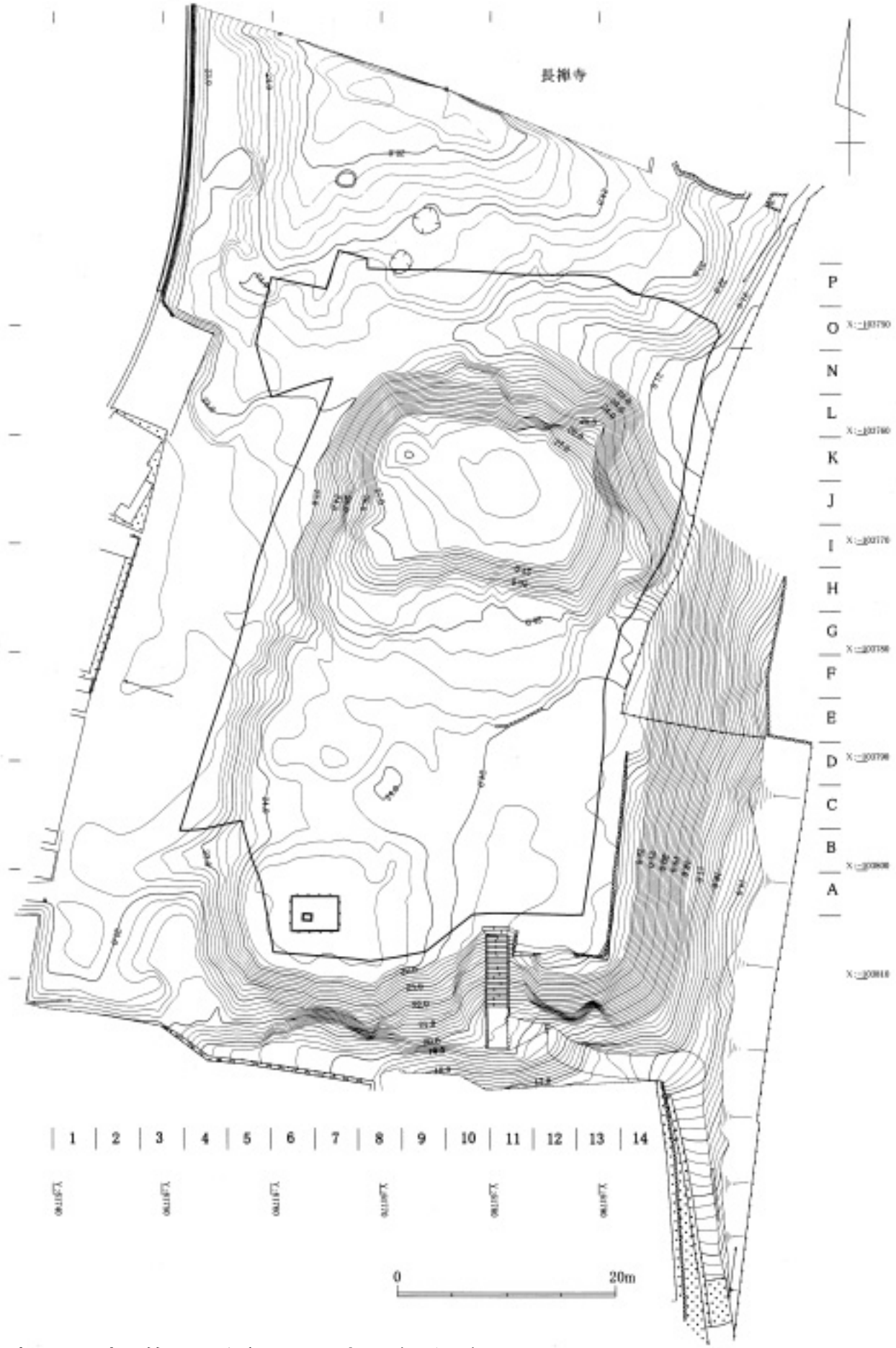
赤羽一郎・中野晴久「生産地の編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼をおって」資料集』　日本福祉大学知多半島総合研究所　1994
伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」『第４回東海考古学フォーラム　鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会　1996
上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』第２号　1982
小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』第２号　1982
尾野善裕「一五・十六世紀における流通・海運の変革」『国立歴史民俗博物館研究報告』第113集　国立歴史民俗博物館　2004ａ
尾野善裕「戦国時代瀬戸・美濃陶器の暦年代観」『第12回東海考古学フォーラム　守護所・戦国期城下町を考える』―第１分冊　シンポジウム資料集―　守護所シンポジウム@岐阜研究会　2004ｂ
北村和宏「尾張の羽釜」『第４回東海考古学フォーラム　鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会　1996
北村和宏「尾張の「伊勢型鍋」『第４回東海考古学フォーラム　鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会　1996
吉良哲明『原色日本貝類図鑑（増補改訂版）』保育社　pp.240　1954
桑名市教育委員会『桑名市史』本編　1959
桑名市教育委員会『桑名市史』補編　1960
桑名市教育委員会『桑名市遺跡分布地図』　1995
財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター「瀬戸・美濃系大窯　生産地資料集成」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品　―東アジア的視野から―』資料集　2001
茶道資料館『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁―名碗と考古学―』1990
澤下春男・澤下能親校訂『桑名日記』１～４　私家版　1984
高木晃ほか『鷺山仙道遺跡　―岐阜市鷺山・下土居土地区画整理事業における太平町下西郷線建設に伴う緊急発掘調査―』岐阜市教育文化振興事業団　2002
永井宏幸「尾張平野を中心とした古代煮炊具の変遷」
『第４回東海考古学フォーラム　鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会　1996
中野晴久「常滑・渥美窯」『菊川城館遺跡群国指定記念シンポジウム　陶磁器から見る静岡県の中世社会―東でもない西でもない―』資料集　発表要旨・論考編　菊川シンポジウム実行委員会　2005
藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」『研究紀要』Ⅰ　瀬戸市歴史民俗資料館　1982
藤澤良祐「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』第10輯　財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター　2002
藤澤良祐「瀬戸大窯発掘調査報告」『研究紀要』Ⅴ　瀬戸市歴史民俗資料館　1986
不破直幹・不破正人校訂『御領分案内帳附案内帳』　桑名総社社務所　1984
三重県『名勝舊蹟天然記念物調査報告』　1924
三重県教育委員会『三重の中世城館』　1975

森村健一「考古学調査からみた高麗茶碗（朝鮮王朝陶磁茶碗）粉青沙器茶碗から釜山窯系茶碗への展開―近世茶の湯スタイルの確立」『高麗茶碗―論考と資料』高麗茶碗研究会　2003
森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第２号　1982
山田邦和『須恵器生産の研究』学生社　1998
山田猛「押型文土器の型式学的再検討　―三重県下の前半期を中心として―」『三重県史研究』第４号　1988
渡部忠重・奥谷司『学研生物図鑑　貝Ⅱ』学習研究社　pp. 294　1954
梅棹忠夫・金田一春彦・坂倉篤義・日野原重明. 1992. 日本語大辞典　講談社、2302pp

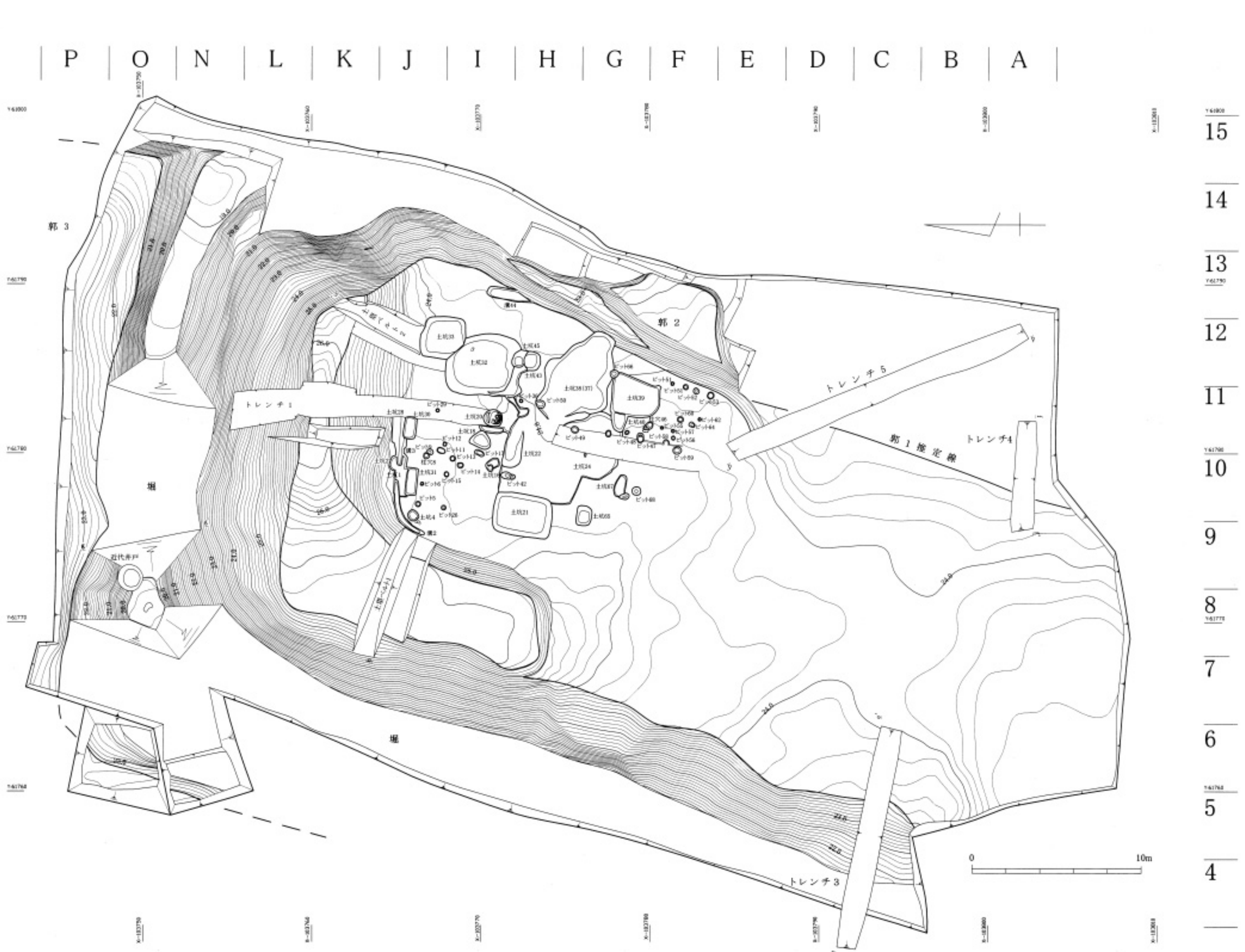


図版１　遺跡位置図（１/25000）

図版２　遺跡周辺地形図（１/2500）



図版３　調査区範囲及びグリッド設定図（１/500）

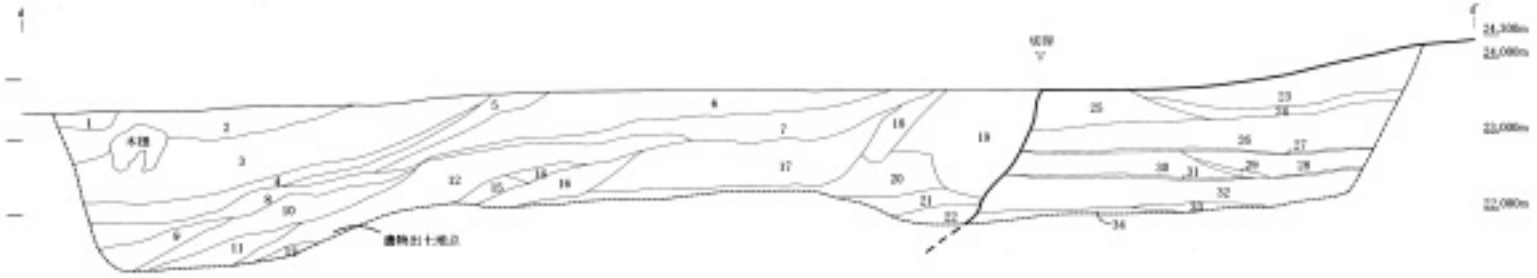


図版４　遺構平面図（１/200）

図版５　トレンチ１西壁断面図（１/100）

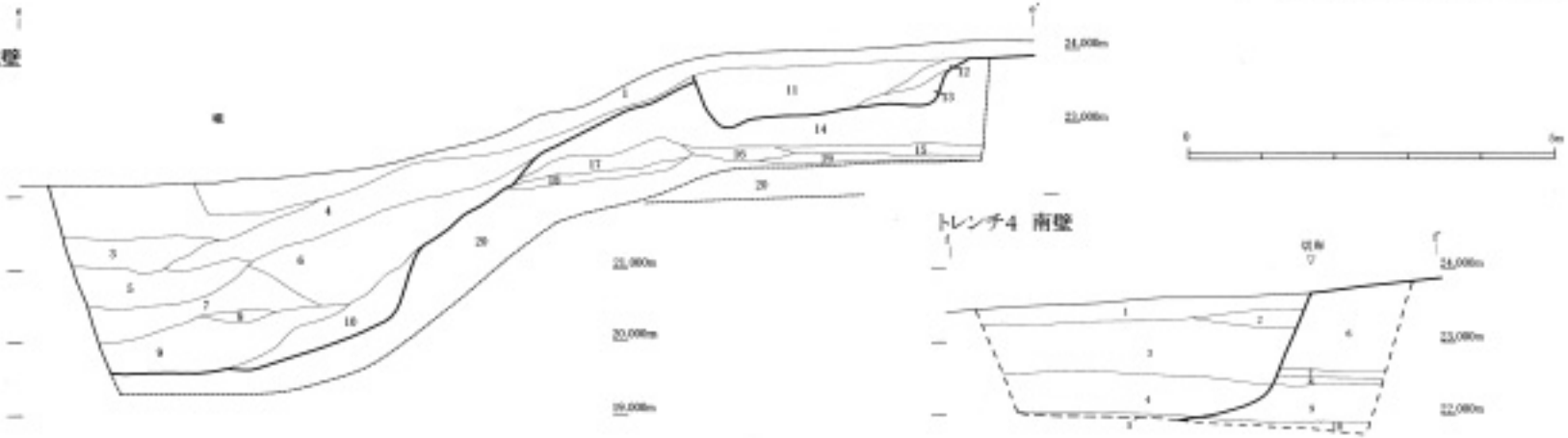
図版6　トレンチ3・4・5断面図（1/100）

トレンチ5 西壁



1	褐色砂礫層	
2	にぶい黄橙砂質土	
3	灰黄褐砂礫層	
4	黄橙粘質土	しまり強い　～3cmの円レキ少量含む
5	にぶい黄橙砂質土	
6	灰黄褐砂礫層	
7	赤橙色粘質土	
8	褐色砂礫層	しまりやや強い　～3cmの円礫多い
9	褐色砂礫層	しまりややあり　～5cmの円礫多い　下位から6山茶碗など出土
10	にぶい黄橙砂質土	しまりやや弱い　赤橙色土ブロック多く含む
11	灰黄褐砂礫層	～5cmの円礫層
12	褐色砂礫層	しまりややあり　～5cmの円礫多い　下位から山茶碗など出土
13	にぶい黄橙砂質土	しまりやや弱い　赤橙色土ブロック多く含む
14	灰黄褐砂礫層	～5cmの円礫層
15	赤橙色粘質土	しまりややあり
16	灰黄褐砂礫層	しまりややあり　～5cmの礫層　黄色土ブロック含む
17	褐色土	しまり弱い　～5cmの円礫若干含む
18	灰黄褐砂礫層	～5cmの円礫層
19	赤橙色土	しまりよわい　～2cmの円礫若干含む
20	赤橙色土	しまり非常に強い　～2cmの円礫多く含む
21	黒色砂礫層	しまりなし　～拳大の円礫層　目含む
22	黄橙色砂礫層	しまりなし　～拳大の円礫層、(地山)
23	黒色砂礫層	しまりなし　～拳大の円礫層、(地山)
24	黄橙色砂礫層	しまりなし　～拳大の円礫層、(地山)
25	褐色土	しまり弱い　～5cmの円礫若干含む、(地山)
26	灰黄褐砂礫層	～5cmの円礫層、(地山)
27	赤橙色土	しまり弱い、～3cmの円礫若干含む、(地山)
28	赤橙色土	しまり非常に強い、～3cmの円礫多く含む、(地山)
29	黒色砂礫層	しまりなし、～拳大の円礫層　目含む、(地山)
30	黄橙色砂礫層	しまり弱い、～2cm円礫層、(地山)
31	黒色砂礫層	しまりなし、～拳大の円礫層、(地山)
32	黄橙色砂礫層	しまりなし　～拳大の円礫層、(地山)
33	黒色砂礫層	しまりなし、(地山)
34	黄橙色砂礫層	しまりややあり、～拳大の円礫層、(地山)

トレンチ3 北壁



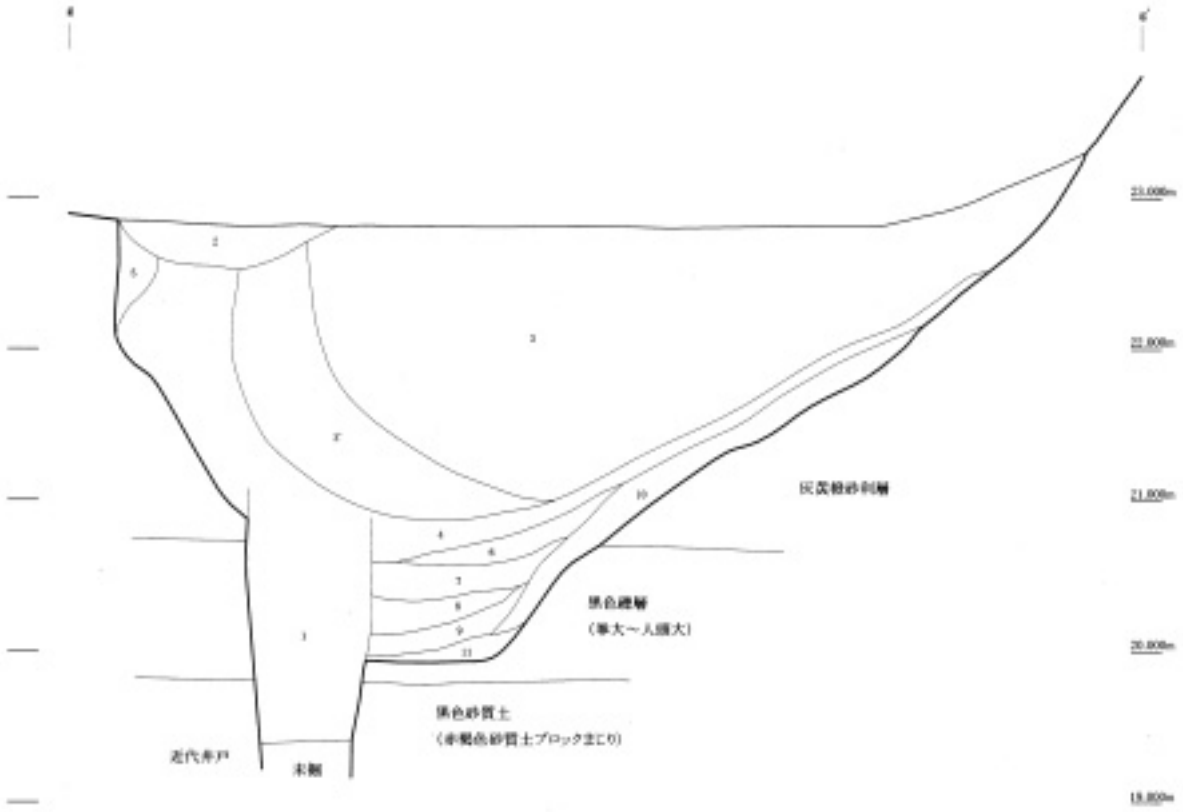
1	暗褐色土	しまりなし、貴土。
2	褐色土	しまりなし。
3	灰白色シルト	しまり強い。
4	暗褐色土	～φ5cmの礫少量含む。
5	灰黄橙色礫	φ5cm～10cmの円礫層。
6	褐色土	しまり弱い、円礫若干含む。
7	灰黄褐色土	しまりややあり、礫少量。
8	浅黄色シルト	しまりあり。
9	灰黄褐色土	小円礫多く含む。
10	浅黄色シルト	しまりあり、～φ10cmの礫多く含む。
11	褐色土	しまり弱い、φ5～10cmの円礫少量、(撹乱)
12	明黄褐色土	しまりなし、φ5cmの礫多い、(撹乱)
13	黄褐色砂質土	しまりなし、φ5～15cmの礫少量、(撹乱)
14	黒色礫	しまり強く、堅い、φ5～15cmの礫層、(地山)
15	灰白色礫	しまり強い、(地山)
16	黄色シルト	しまりややあり、φ5～10cmの円礫少量、(地山)
17	黄褐色土	しまりあり、φ5～10cmの円礫多い、(地山)
18	黄色シルト	しまりなし、粘性なし、(地山)
19	黒色礫	しまり強く、堅い、(地山)
20	橙色礫	しまり強い、(地山)

トレンチ4 南壁

1	褐色砂質土	しまりややあり　～φ10cmの円礫を非常に多く含む。
2	黒色砂質土	しまり弱い、φ5cmの円礫若干含む。
3	橙色土	しまりやや弱い、黒褐色土ブロックを多く含む、礫若干。
4	黒褐色土	しまりやや弱い、橙色土ブロックを少量含む　貝片を若干含む。
5	灰黄褐砂質土	しまり強い、粘性なし　～10cm程度の円礫を少量含む。
6	灰黄褐砂礫	しまり強い、(地山)
7	赤褐色砂礫	しまり強い、(地山)
8	黒色砂礫	しまり強い、(地山)
9	灰黄橙色砂礫	しまり強い、(地山)
10	黒色砂礫	しまり強い、(地山)

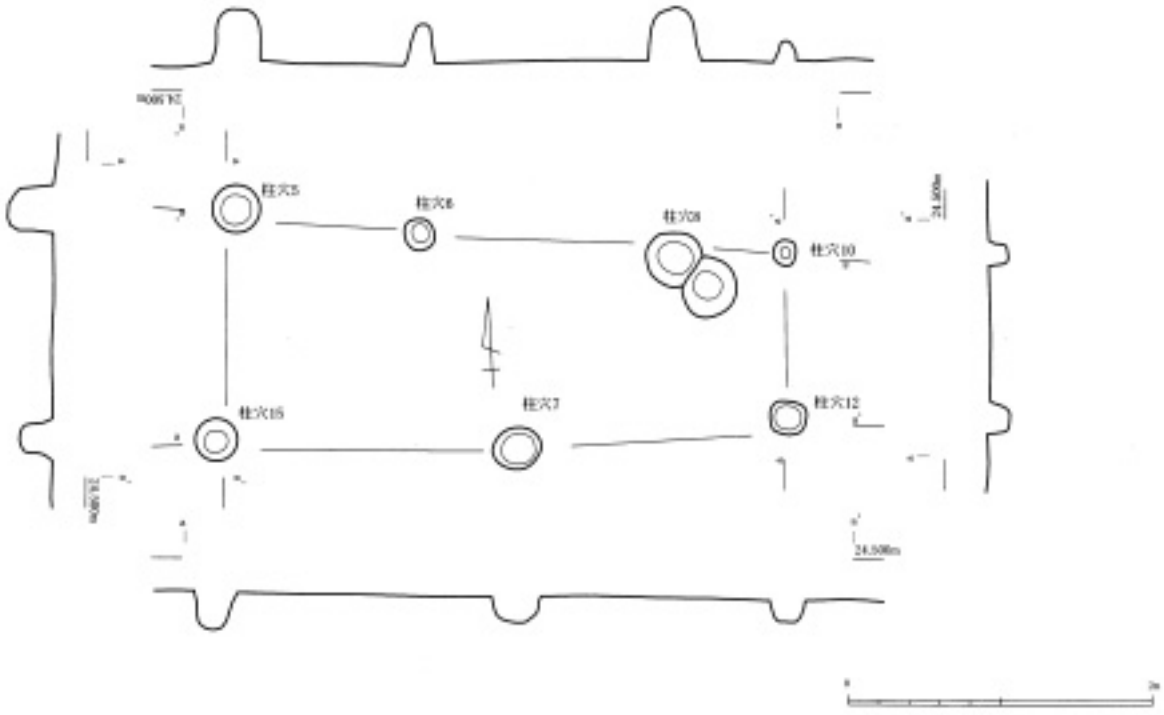
図版７　土塁ベルト１南壁・土塁ベルト２東壁断面図（１/50）

堀

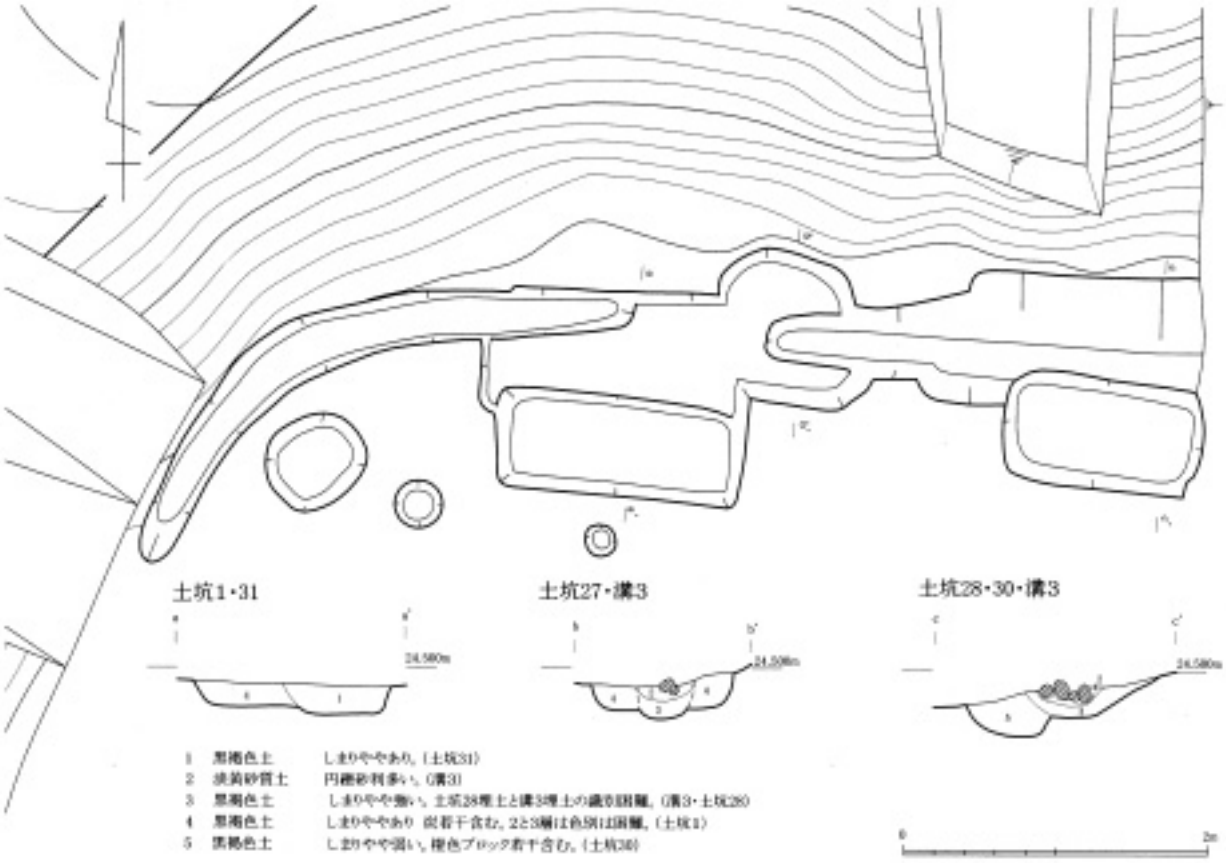


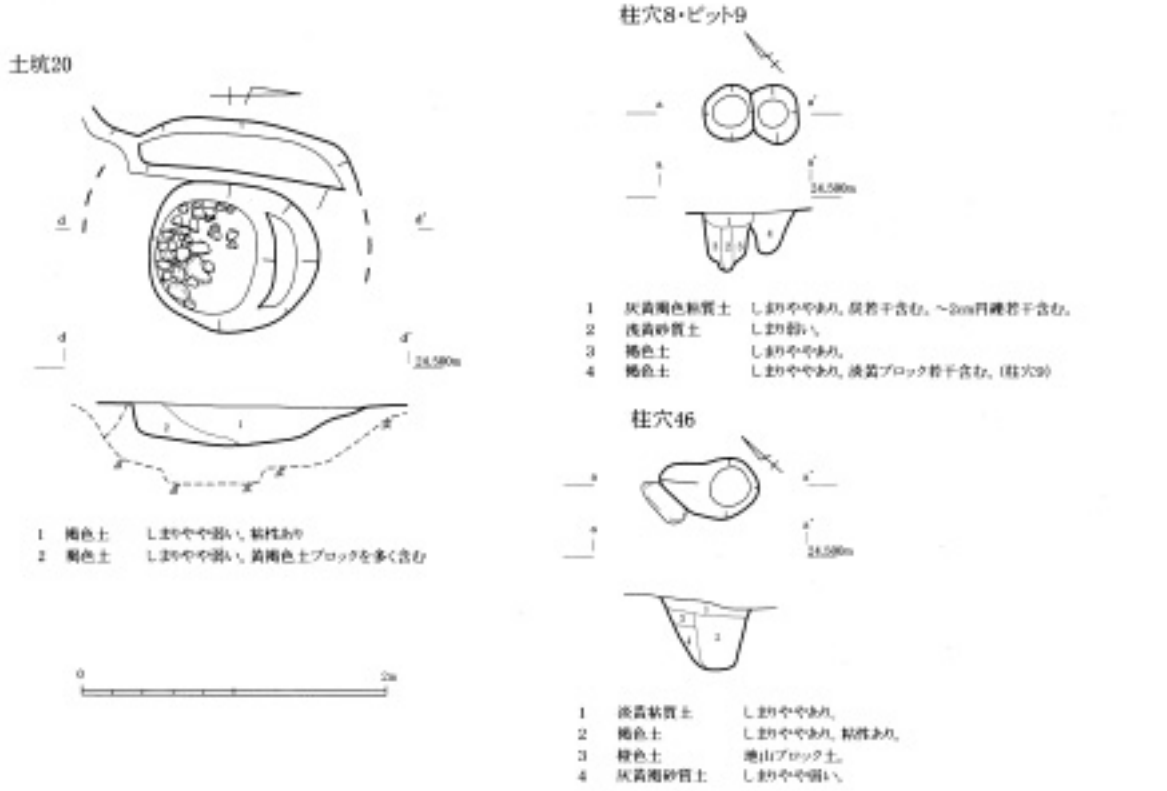
1　浅黄砂質土(シルト質)　灰色ブロック土多く含む　しまりやや強い　礫・石製品出土
2　灰黄褐中砂　しまりなし
3　黄褐色砂質土　しまり弱い、～拳大の円礫を多く含む。
3'　黄褐色砂質土　しまりやや弱い、砂礫をほとんど含まない。
4　黒色土　しまりやや有り。
5　灰黄褐色砂利　しまり弱い、地山崩壊土。
6　黄褐色砂質土　しまり弱い、～φ3cmの小円礫を多く含む。
7　灰黄褐砂礫　しまりなし、～拳大の円礫層。
8　褐色砂質土　しまりやや有り。
9　7層と同じ。
10　浅黄色砂質土　しまりやや有り、～φ3cmの小円礫を少量含む。
11　灰黄褐砂質土　しまりやや有り。

掘立柱建物1

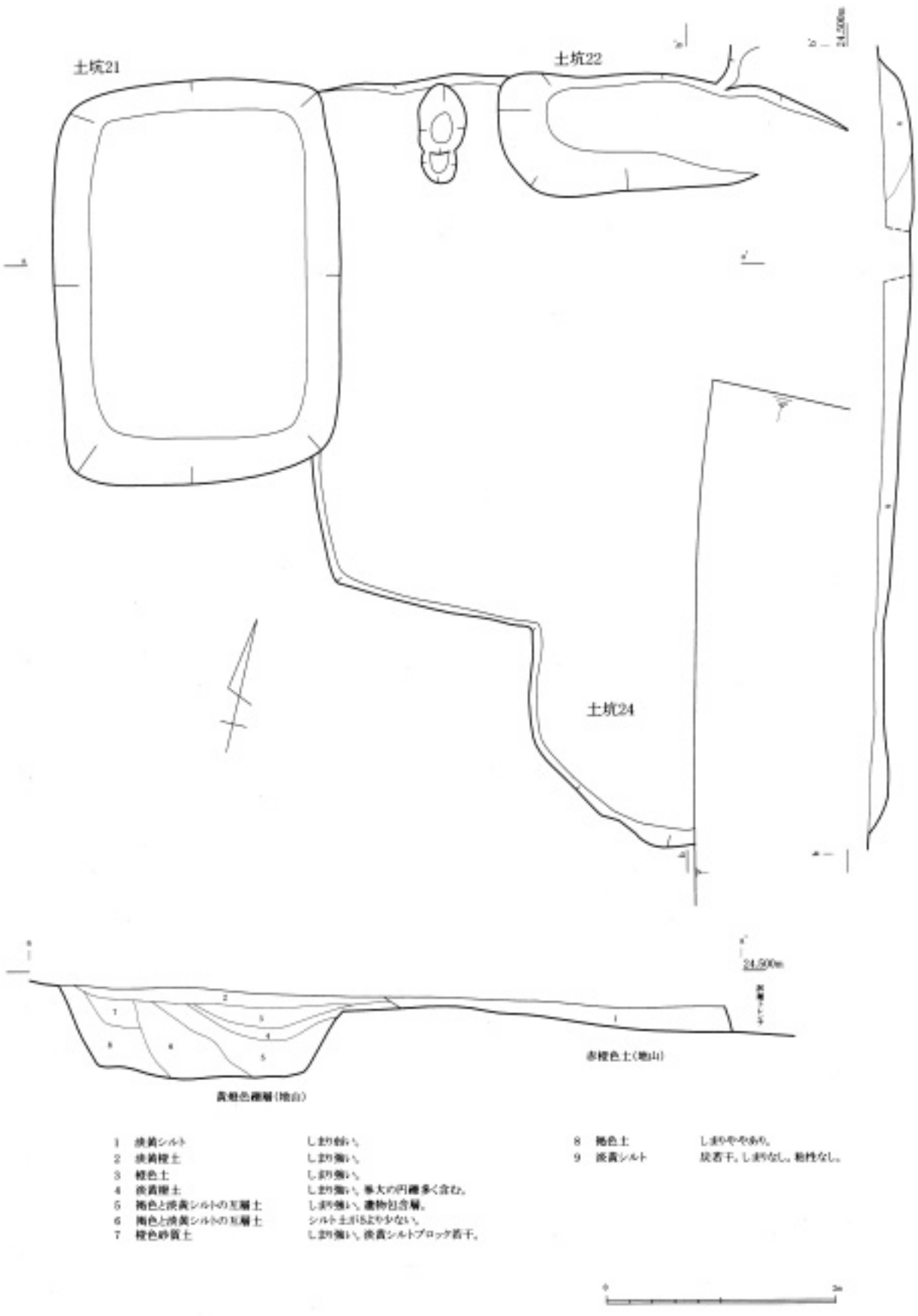


図版８　堀断面図・掘立柱建物１平面・断面図（１/50）

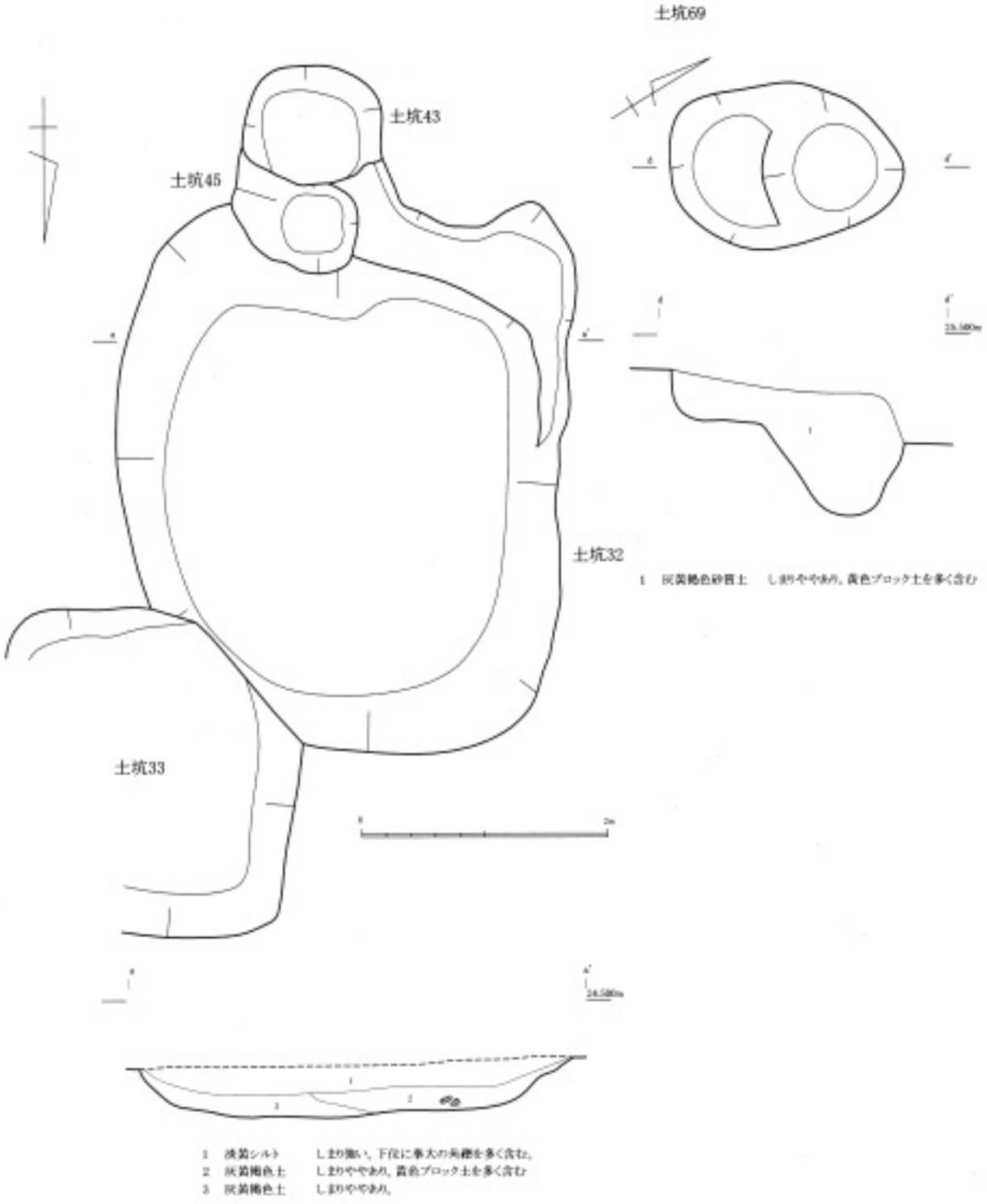




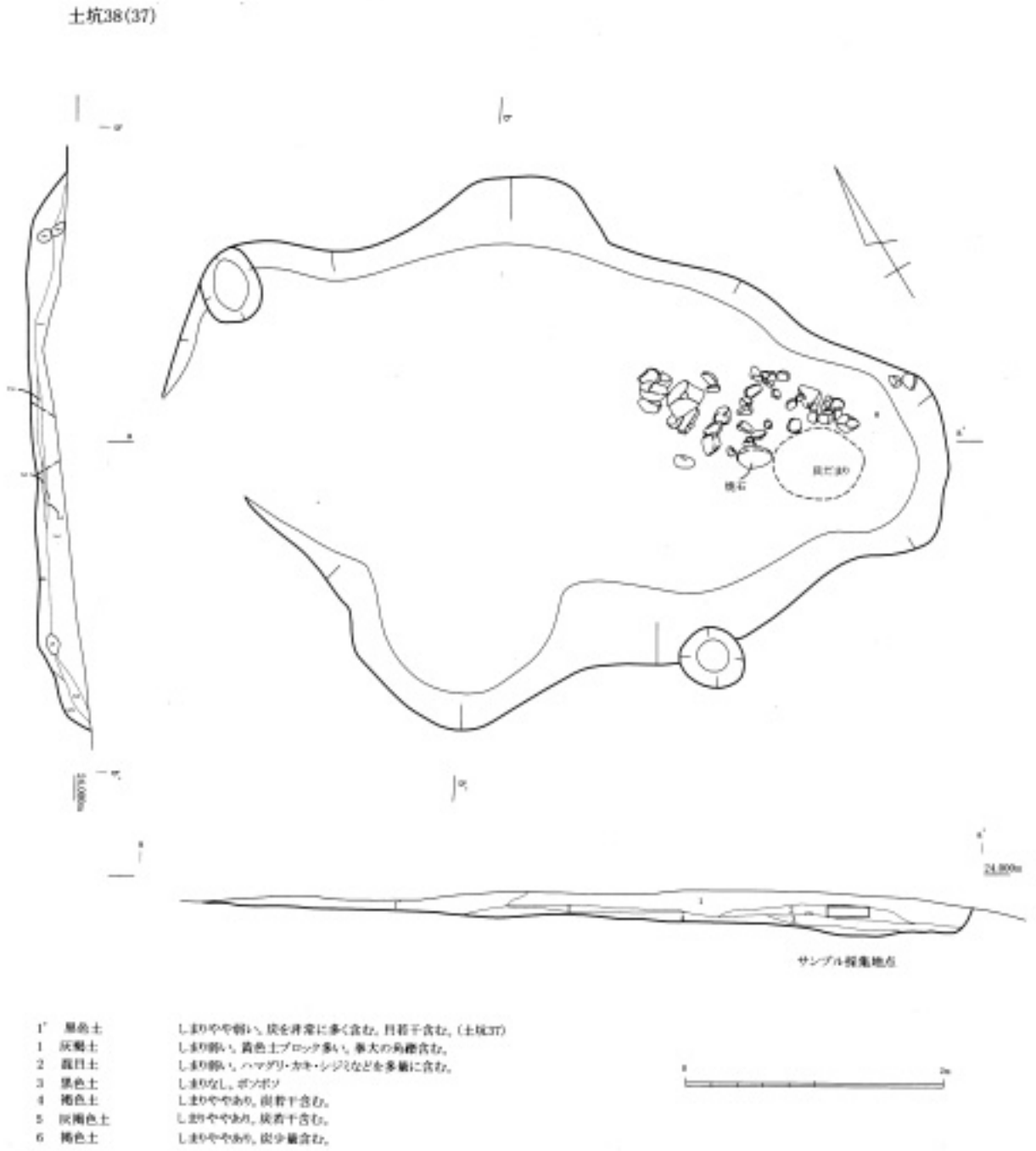
図版９　土坑１・31、土坑27・溝３、土坑28・30・溝３、土坑20、柱穴８、ピット９、柱穴46平面・断面図（１/50）



図版10　土坑21・22・24平面・断面図（1/50）



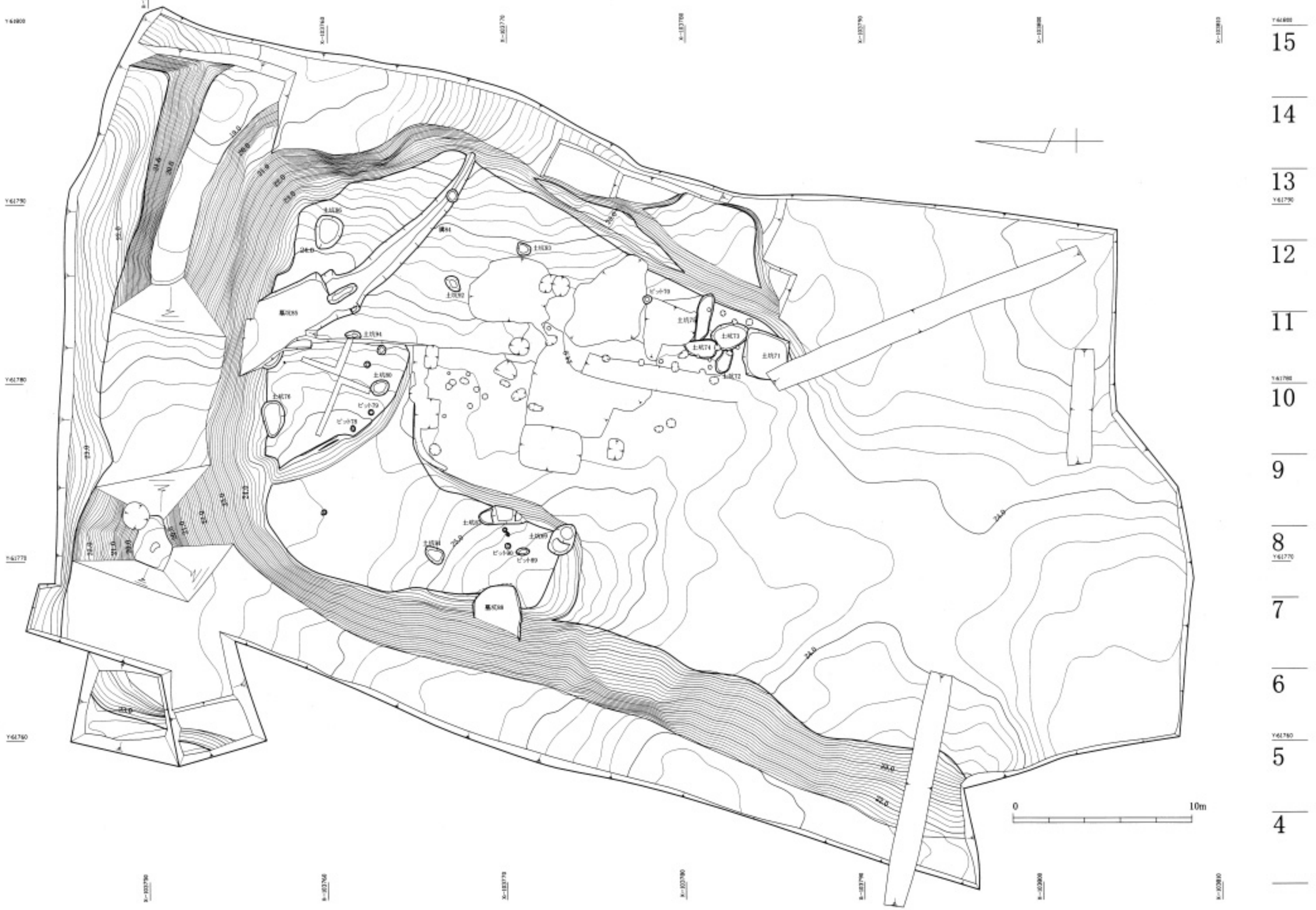
図版11　土坑32、土坑69平面・断面図（１/50）



図版12　土坑38平面・断面図（1/50）

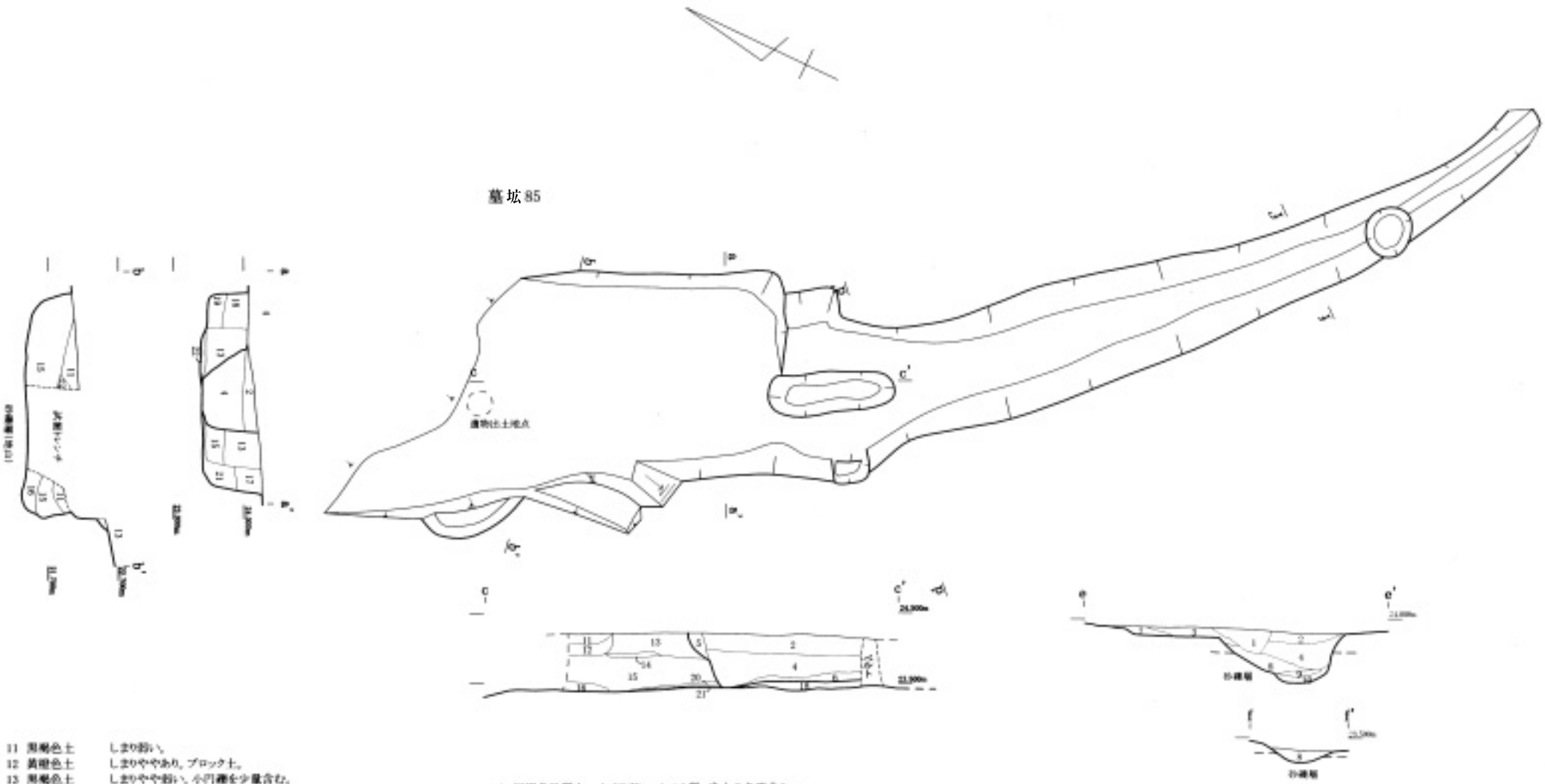
P O N L K J I H G F E D C B A

15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4



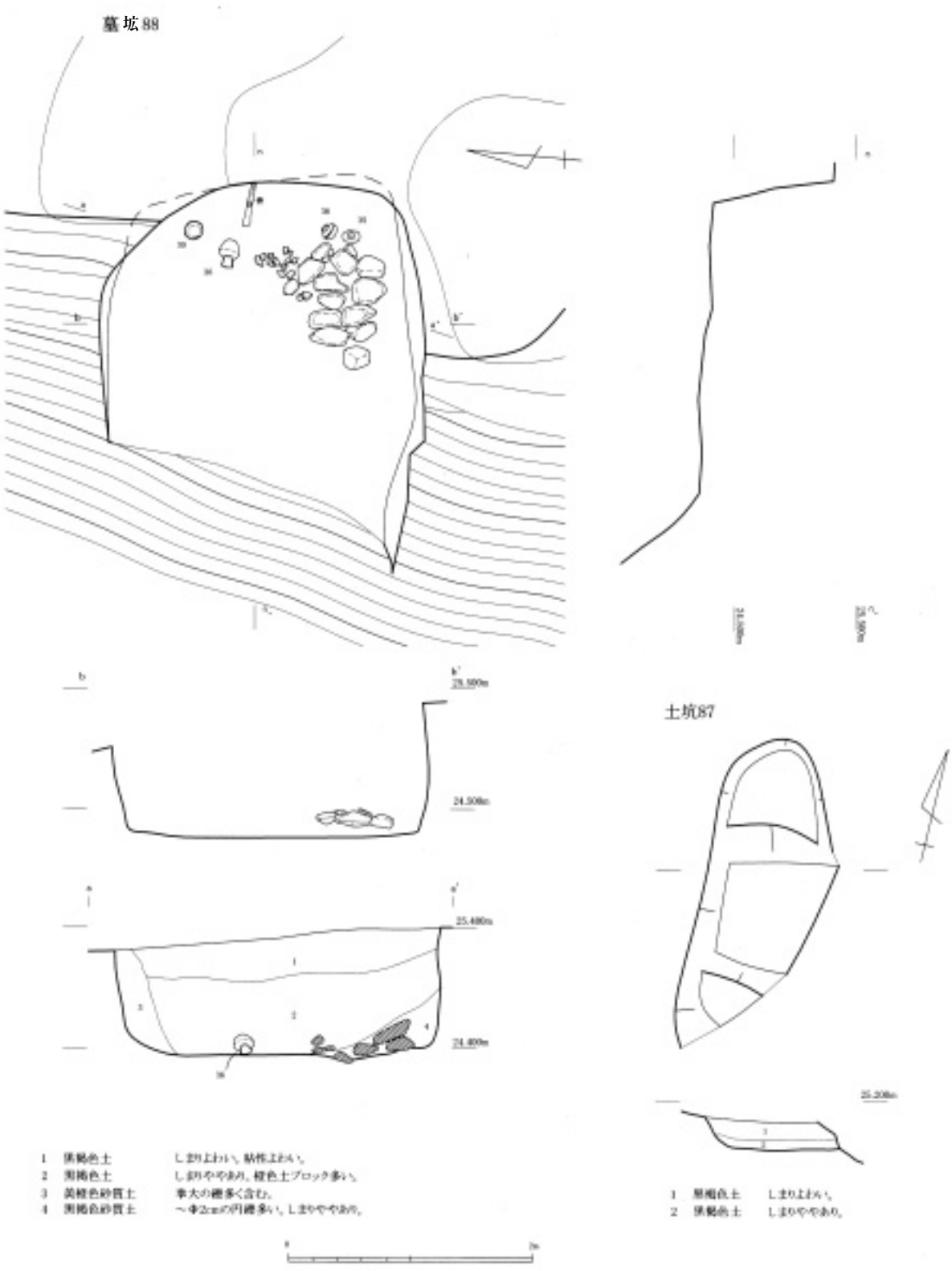
図版13　下層遺構平面図（1/200）

図版14　墓坑85・溝84平面・断面図

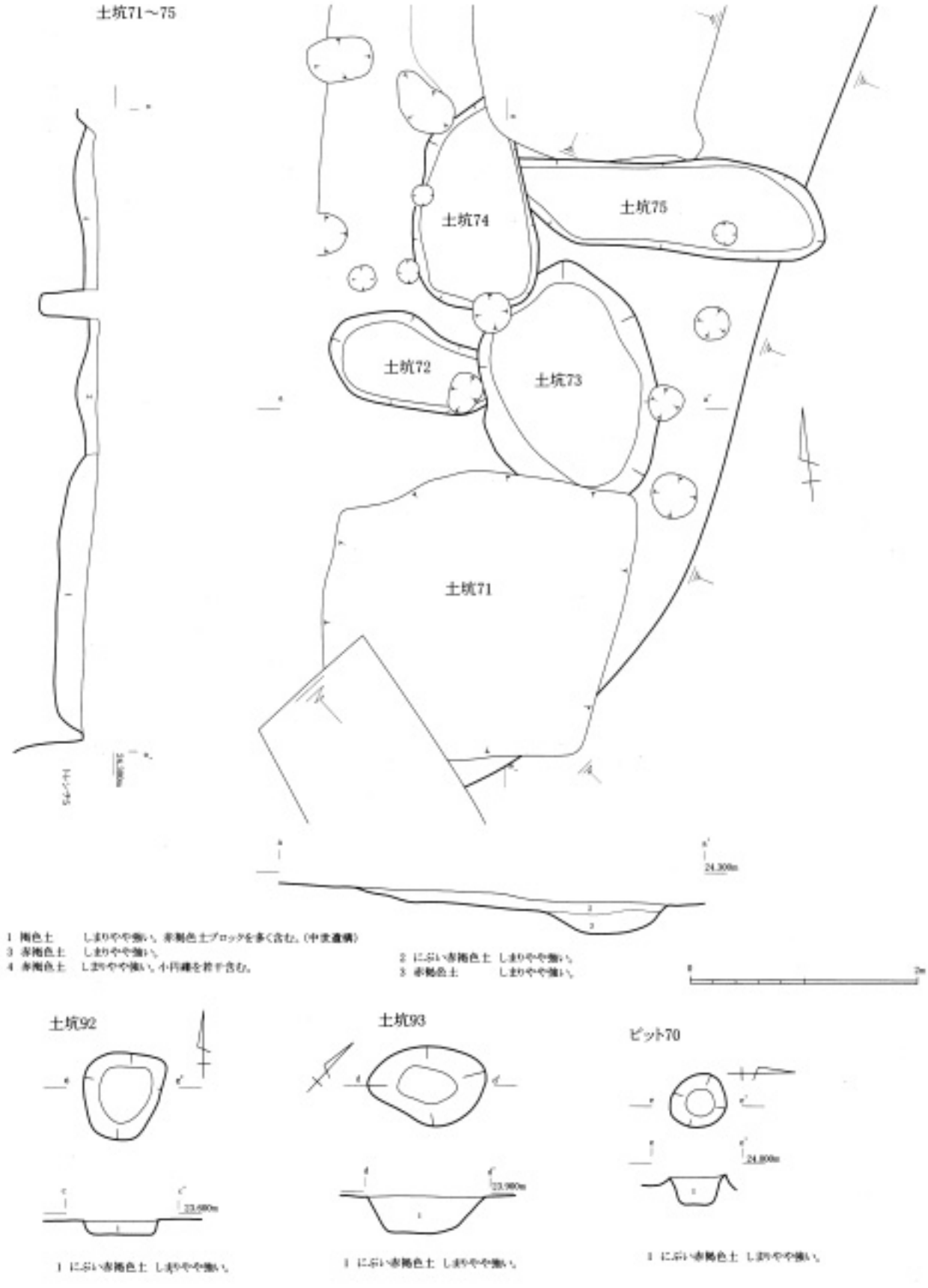


11　黒褐色土　しまり弱い。
12　黄褐色土　しまりややあり。ブロック土。
13　黒褐色土　しまりやや弱い。小円礫を少量含む。
14　黄褐色土　しまりややあり。ブロック土。
15　黒褐色土　しまりやや弱い。小円礫を若干含む。
16　黒褐色砂質土　しまりややあり。
17　黒褐色土　しまりややあり。
18　黒褐色土　しまりややあり。小円礫を少量含む。黄褐色砂質土ブロックを多く含む。
19　黒褐色砂質土　しまり弱い。
20　黒色土　しまり強い。
21　黄褐色土　しまりややあり。黒色土ブロック若干含む。
22　黒褐色土　しまりやや弱い。
22　黄褐色砂質土　しまりややあり。

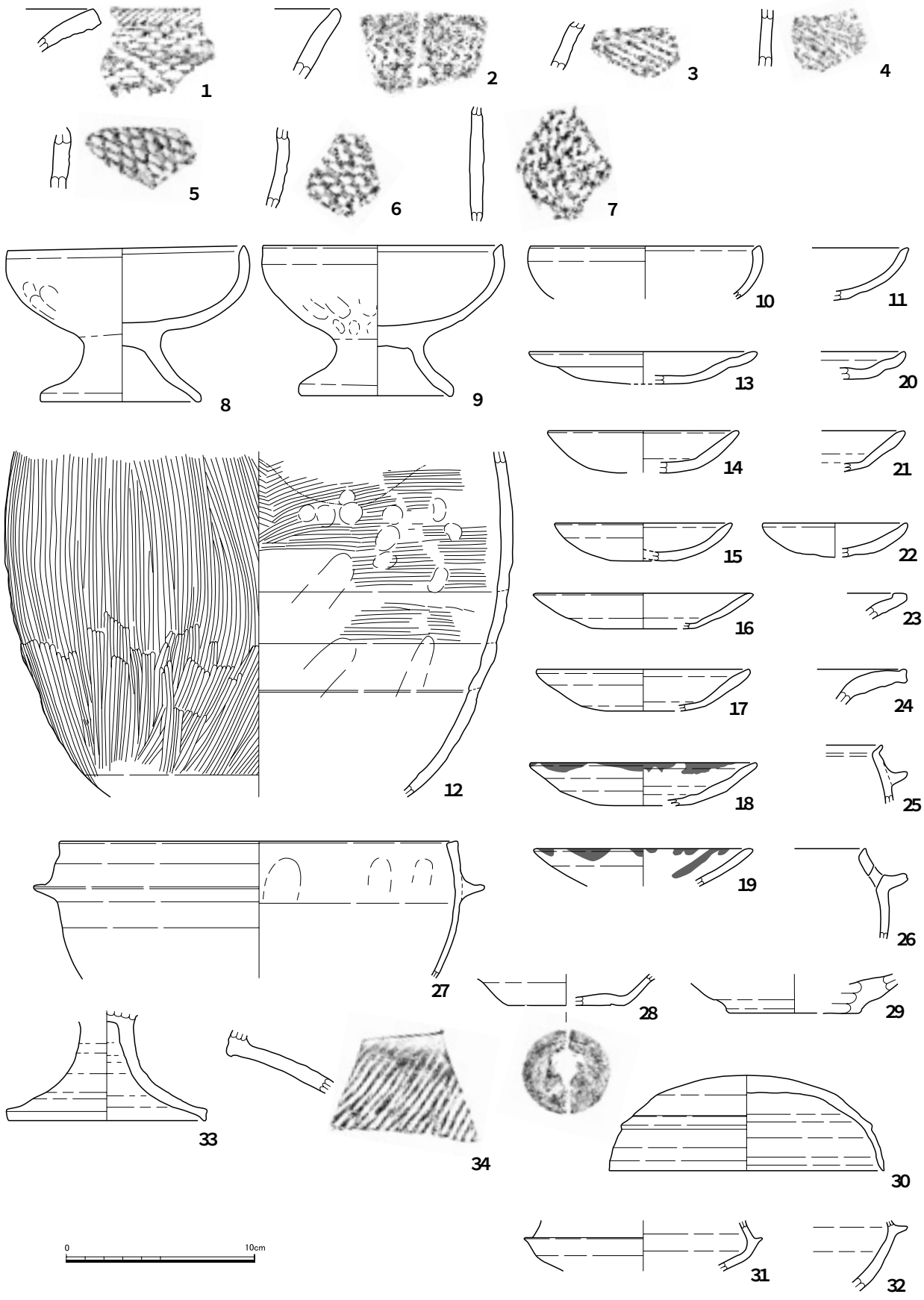
1　灰褐色砂質土　しまり弱い。シルト質。準大の角礫含む。
2　灰黄褐色砂質土　しまり強い。黄褐色ブロック土多く含む。～2cmの小礫多く含む。
3　灰黄褐色砂質土　しまり強い。2層とほぼ同じ。黒褐色土ブロック多く含む。
4　淡黒褐色砂質土　しまりややあり。シルト質。小礫若干含む。
5　淡黒色砂質土　しまりやや強い。シルト質。小礫若干含む。
6　黄褐色砂礫　しまり強い。
7　灰黒色砂質土　しまり弱い。
8　淡黒色砂質土　しまりややあり。シルト質。小礫若干含む。
9　淡黄色砂礫　しまり強い。～3cmの小円礫層。
10　淡黒色砂質土　しまり強い。～2cmの小円礫層。



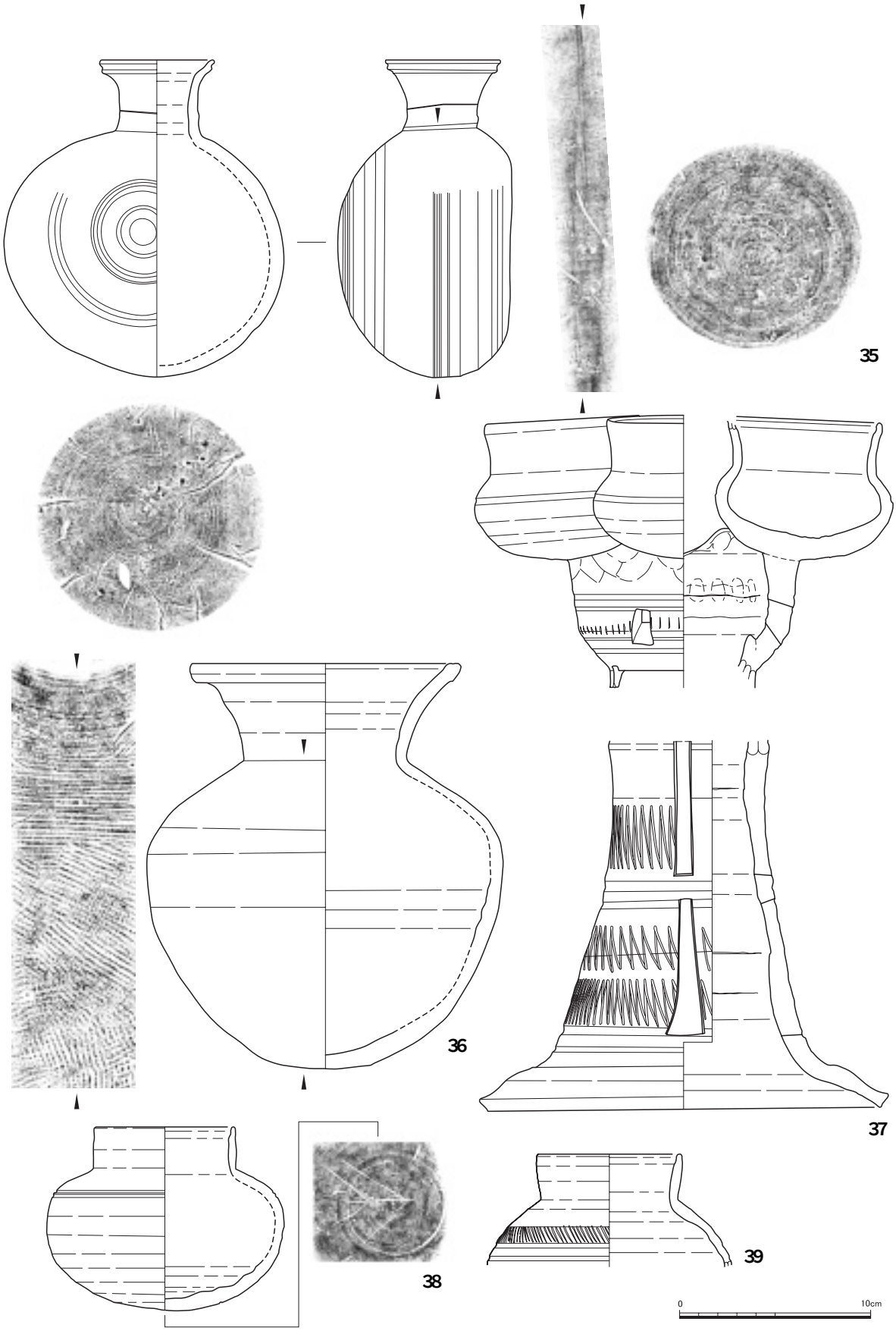
図版15　墓坑85、土坑87平面・断面図（1/50）



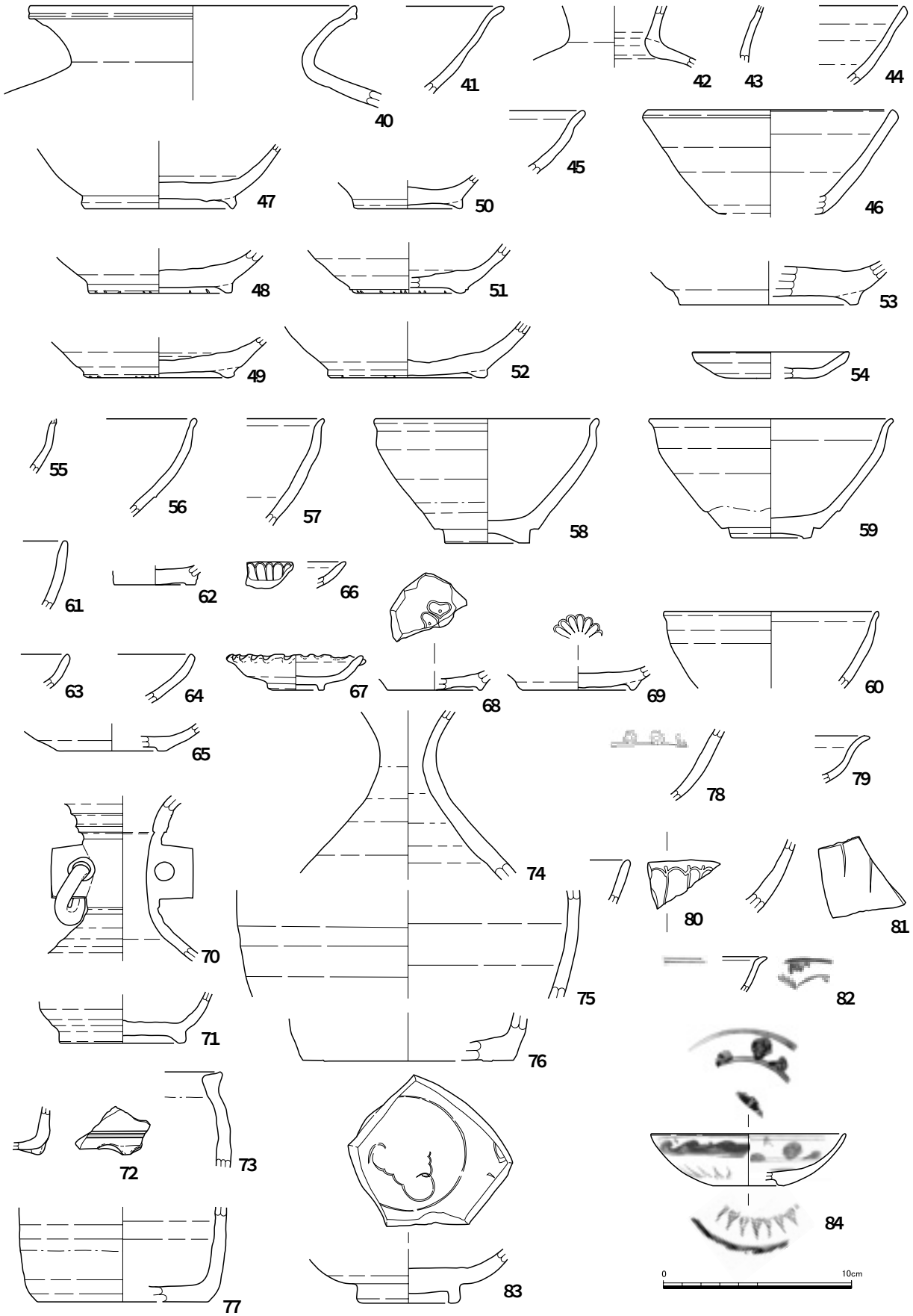
図版16　土坑71～75、土坑92、土坑93、ピット70平面・断面図（１/50）



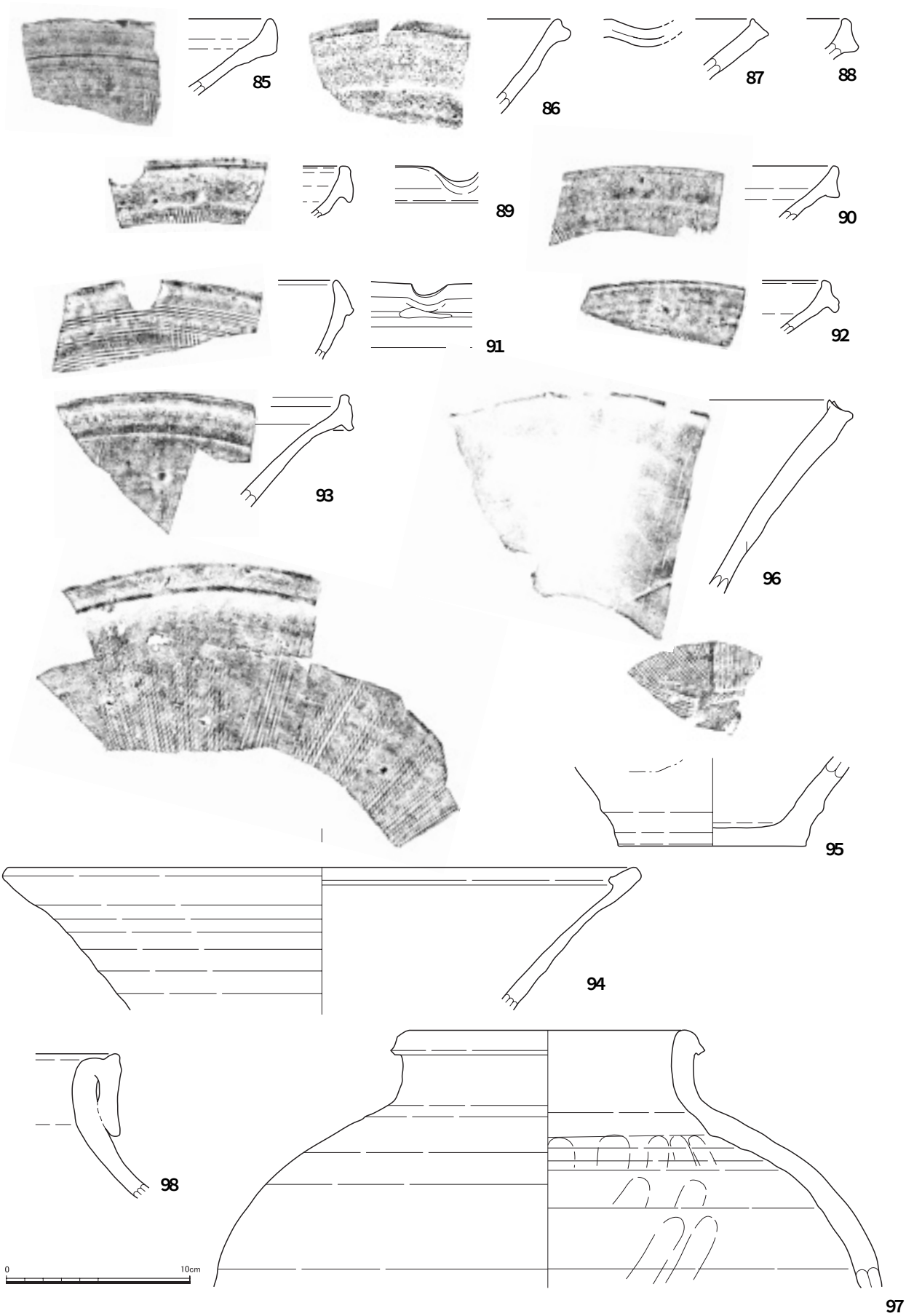
図版17　遺物実測図１（１/３）



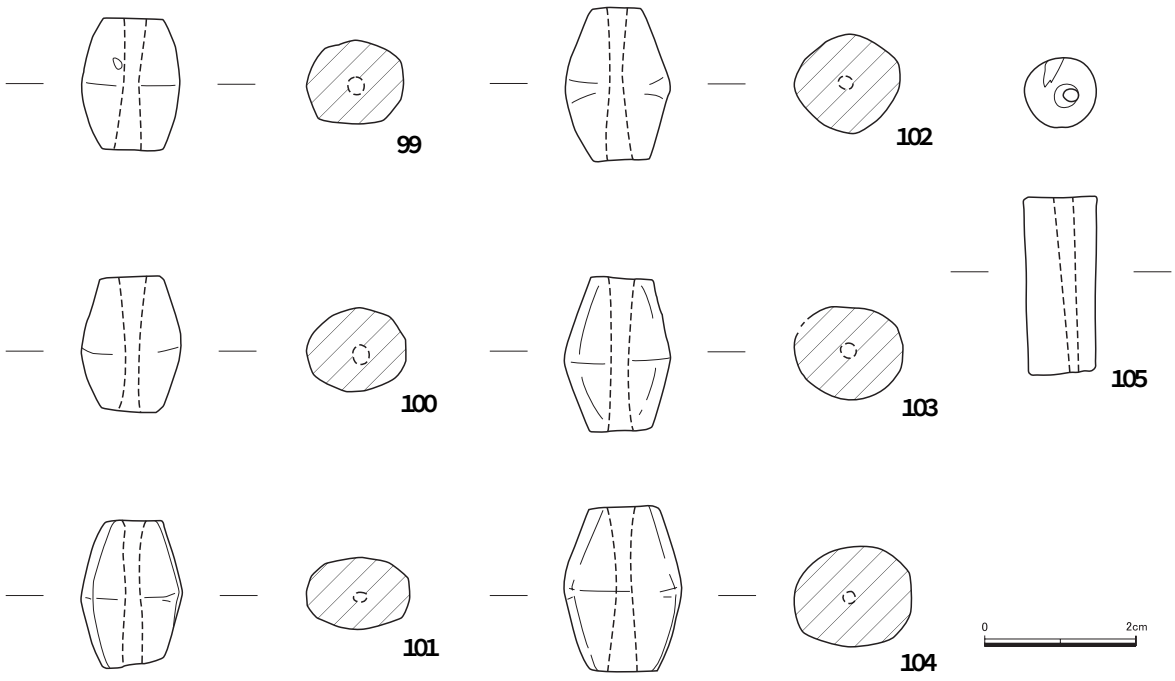
図版18　遺物実測図２（１/３）



図版19　遺物実測図３（１/３）



図版20　遺物実測図４（１/３）



図版21　遺物実測図５（１/３）

調査区遠景（愛宕山は中央）　南東から

調査区全景（左が北）　真上から

写真図版１　遺構

溝３・土坑28・30　完掘状況　東から

土坑33　完掘状況　東から

写真図版２　遺構

土坑32　完掘状況　南東から

土坑21　完掘状況　西から

写真図版３　遺構

土坑38　遺物検出状況　北東から

土坑38　完掘状況

写真図版４　遺構

郭２　検出状況　北から

郭２・郭３・切岸検出状況　南から

写真図版５　遺構

中央土塁断面状況　東から

東側土塁断面状況　東から

写真図版６　遺構

西側土塁断面状況　南から

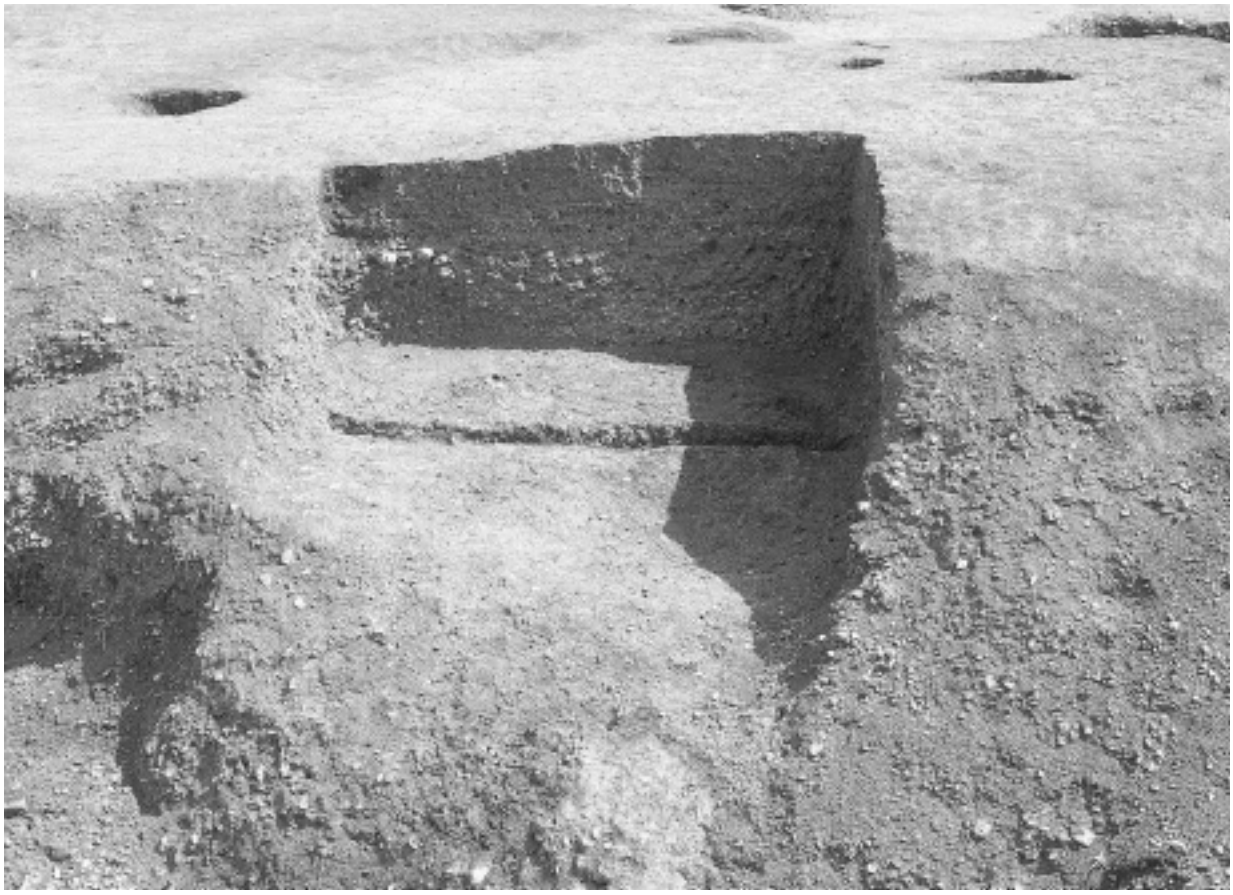
堀断面状況　西から

写真図版７　遺構

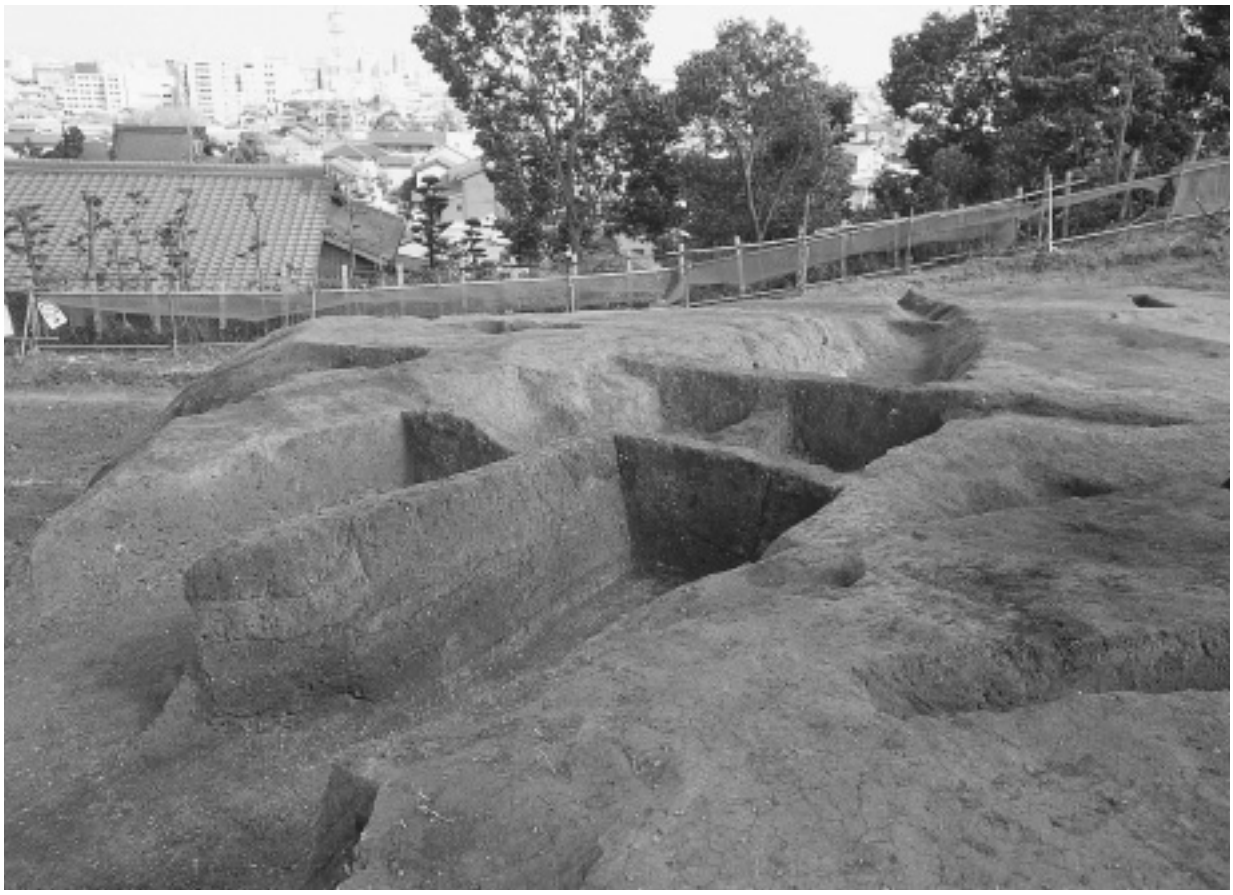
墓坑88　断面状況　西から

墓坑88　遺物出土状況　西から

写真図版８　遺構



墓坑88　完掘状況　西から



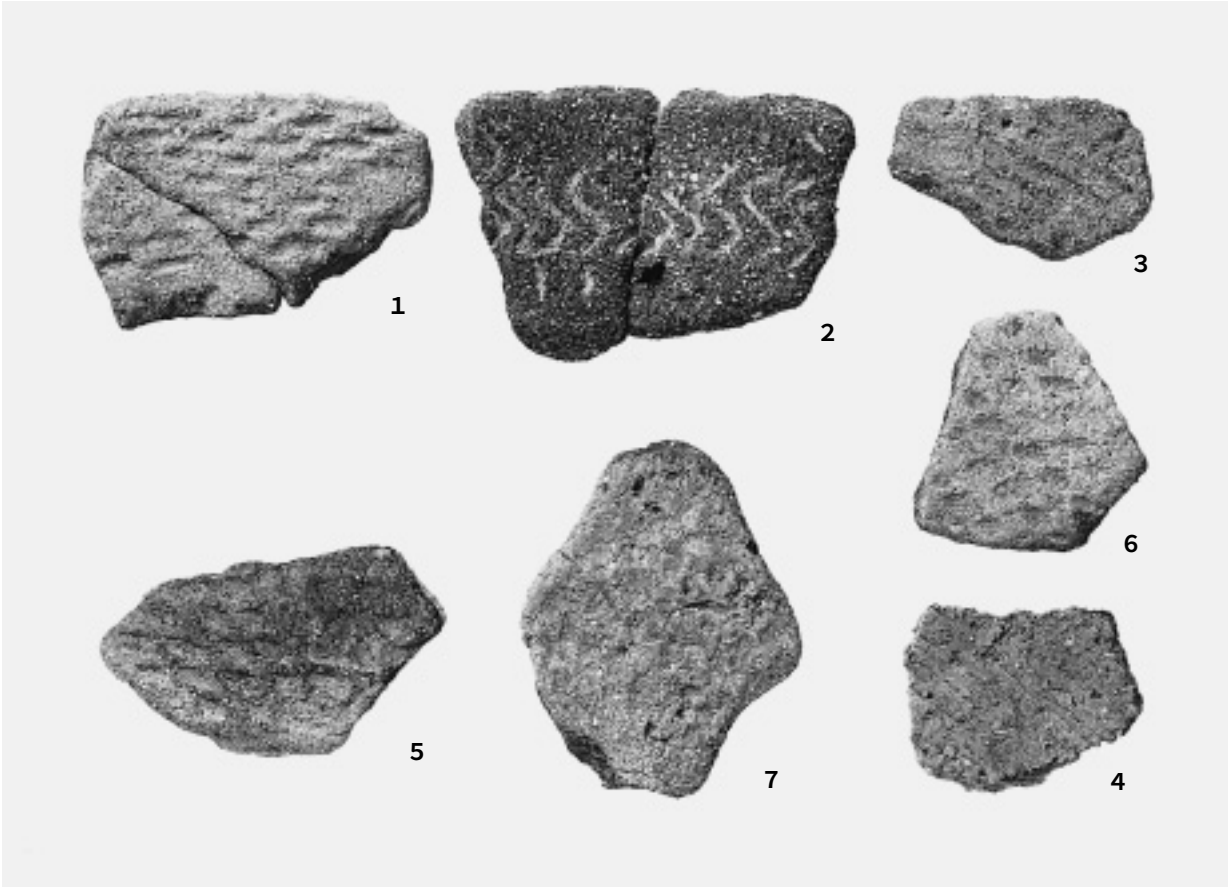
墓坑85　土層断面状況　北西から

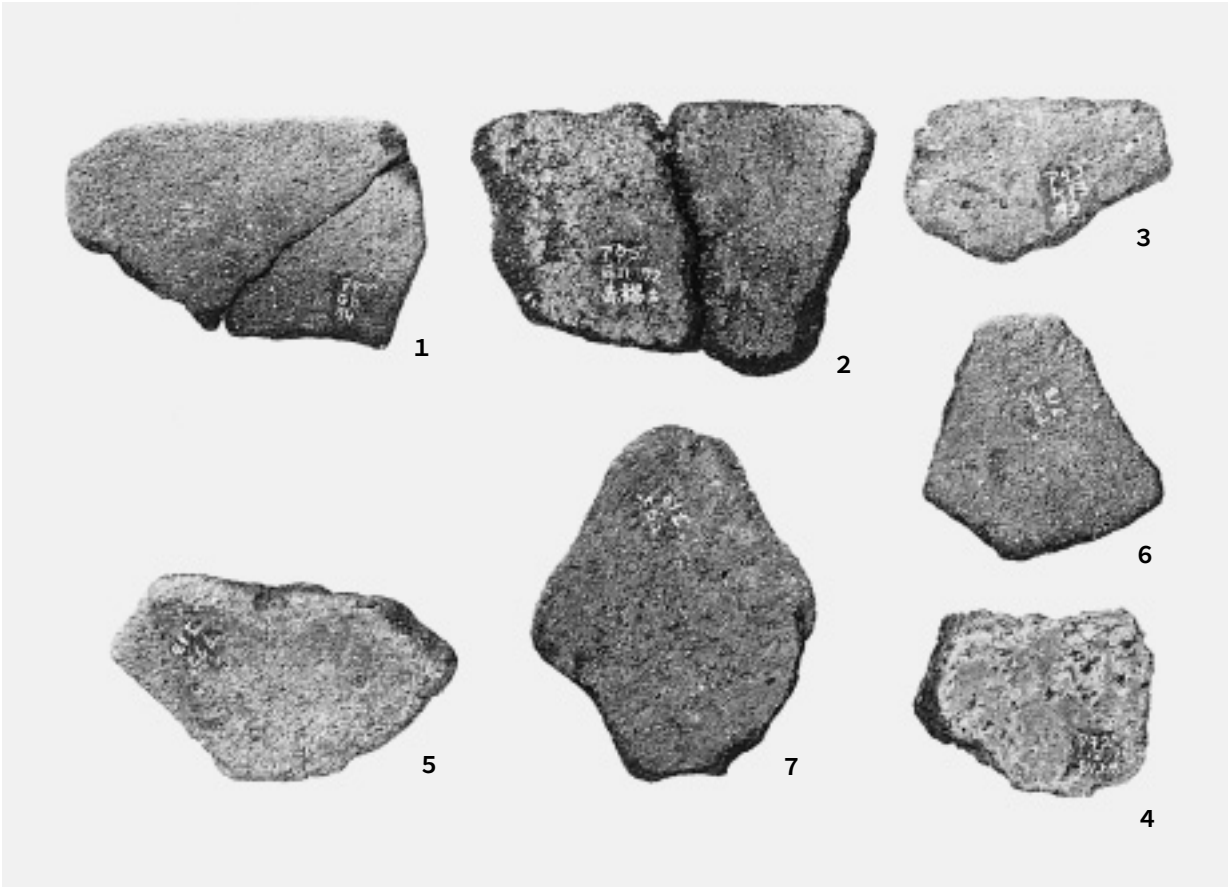
写真図版９　遺構

墓坑85　完掘状況　北から

土坑74・75　土層断面状況　北西から

写真図版10　遺構

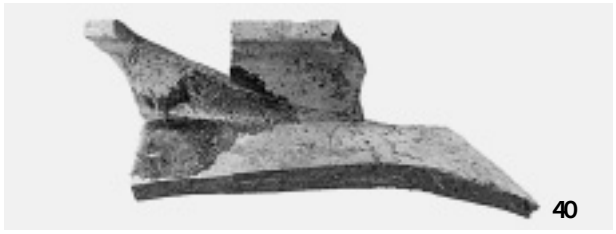




写真図版11　遺物

35

36



40

30

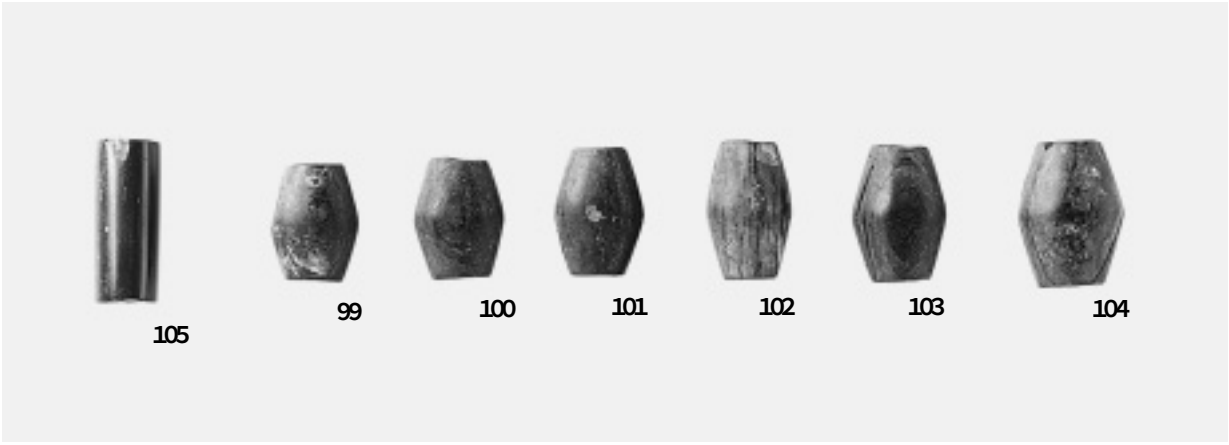
38

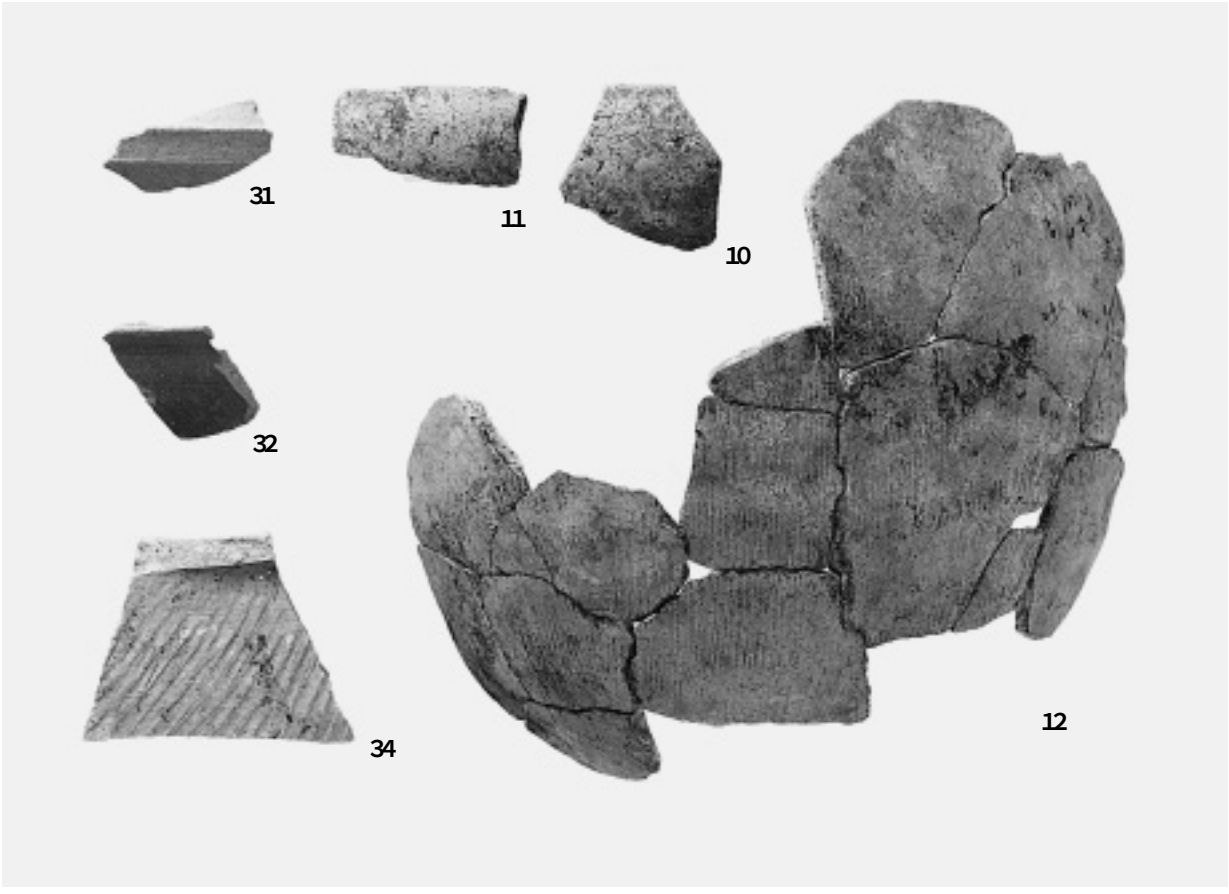
37

39

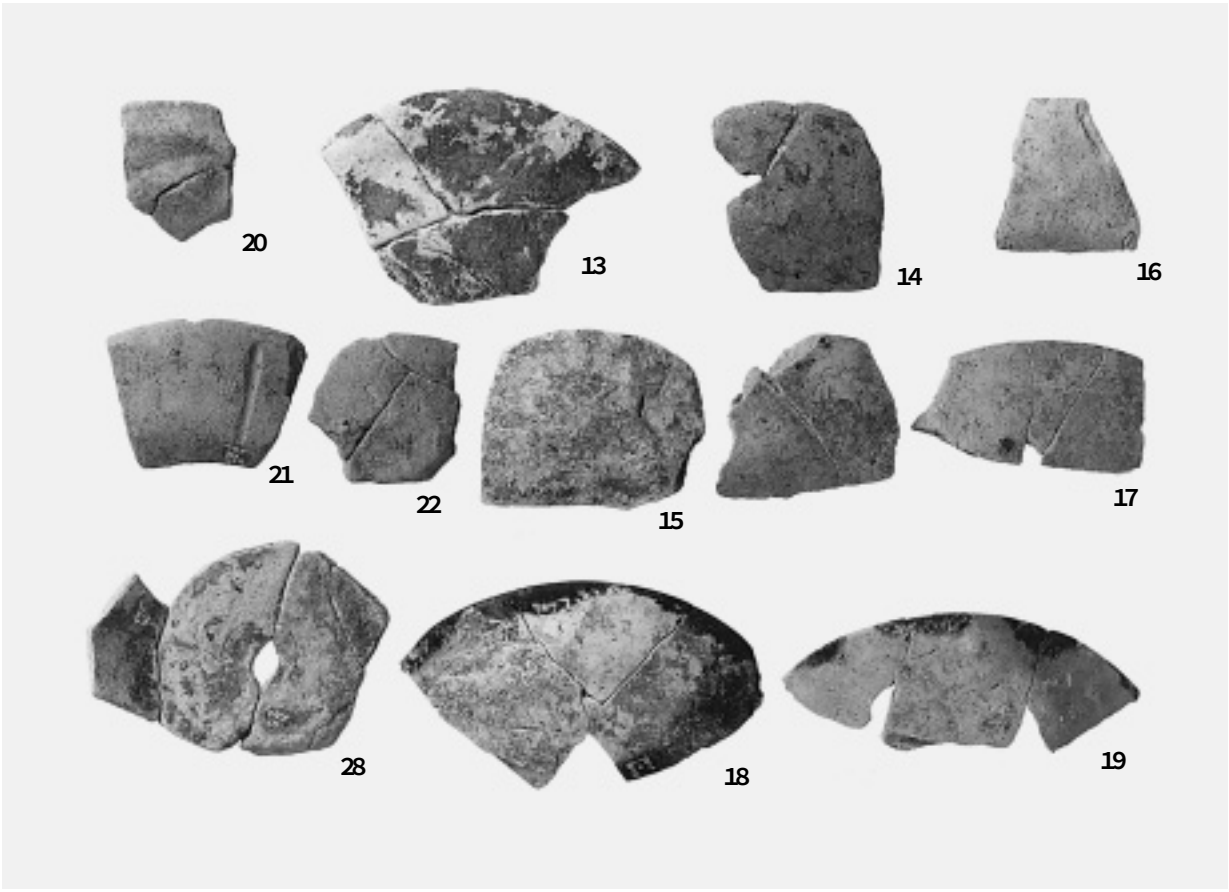
33

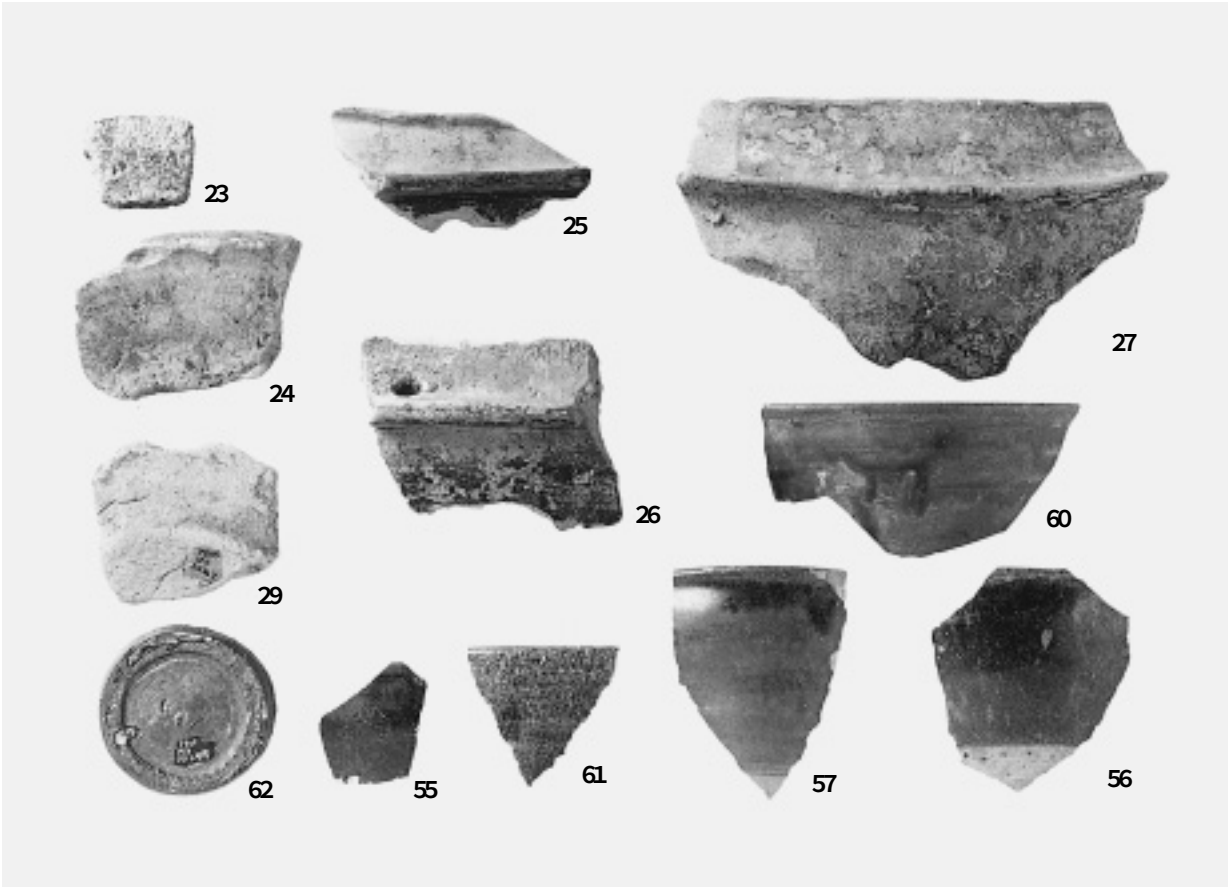
写真図版12　遺物



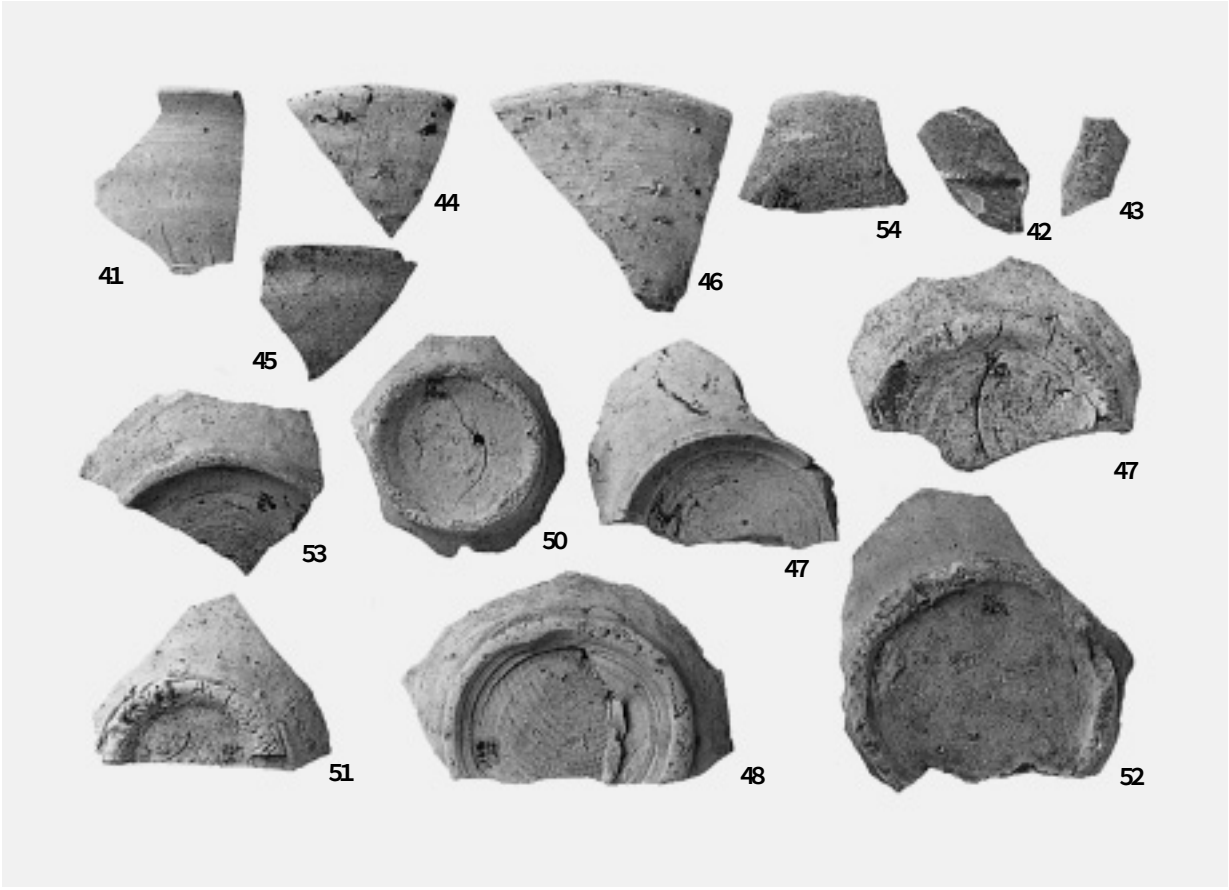


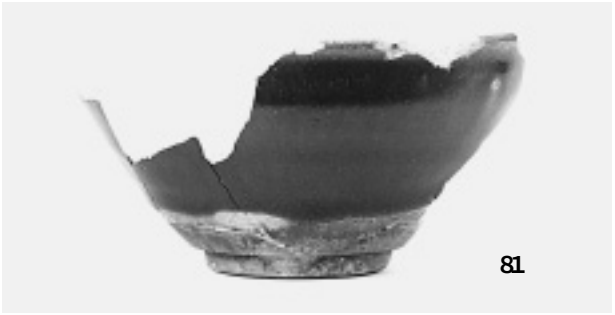
写真図版13　遺物



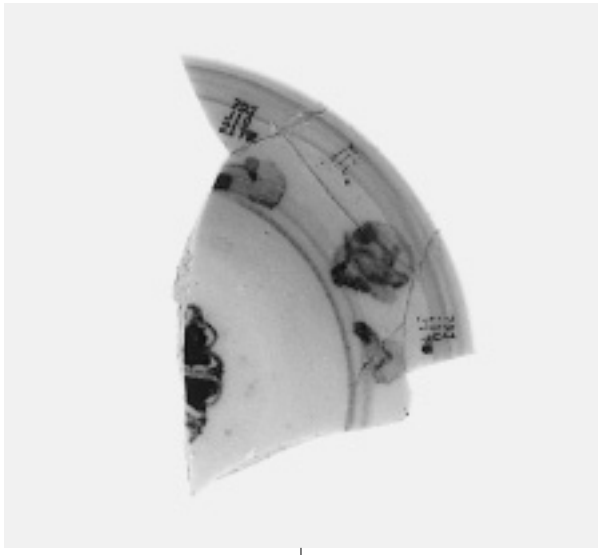


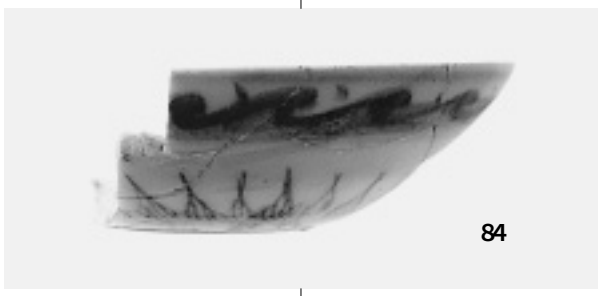
写真図版14　遺物

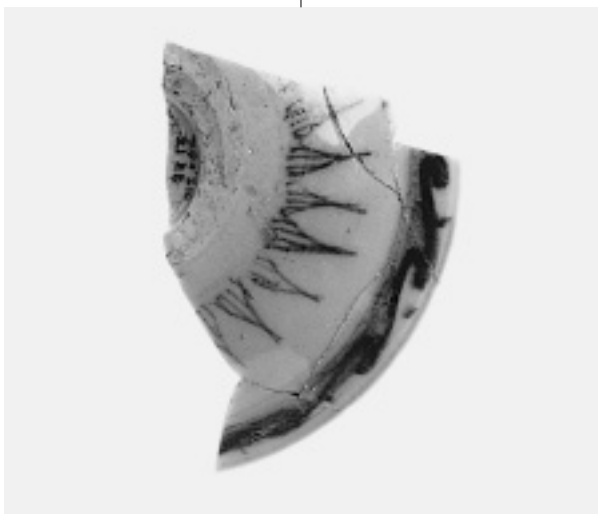


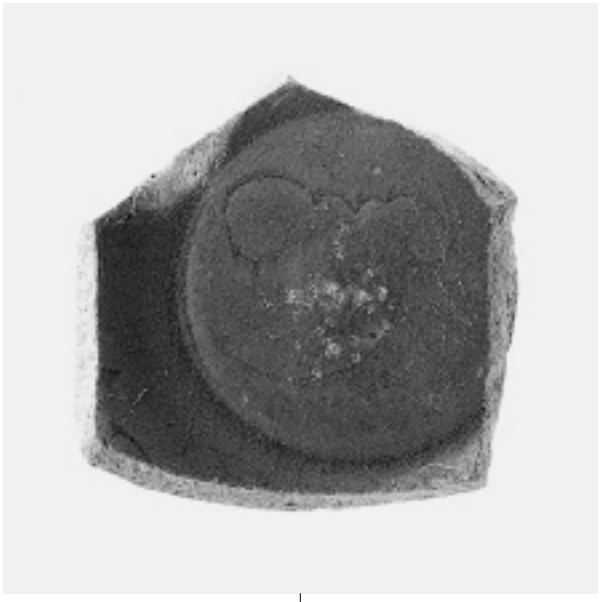


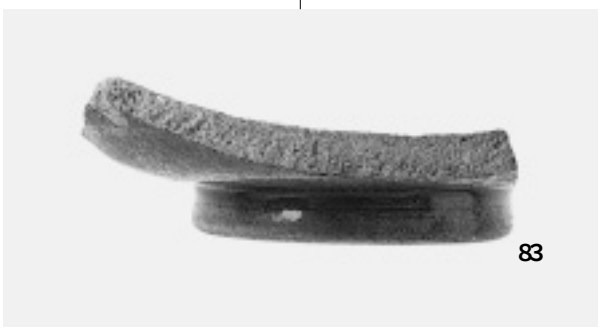
写真図版15　遺物

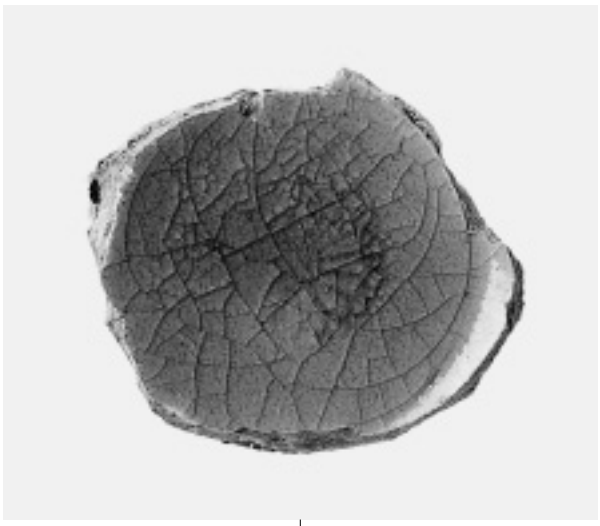


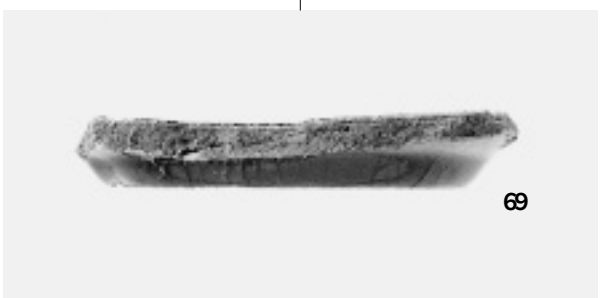




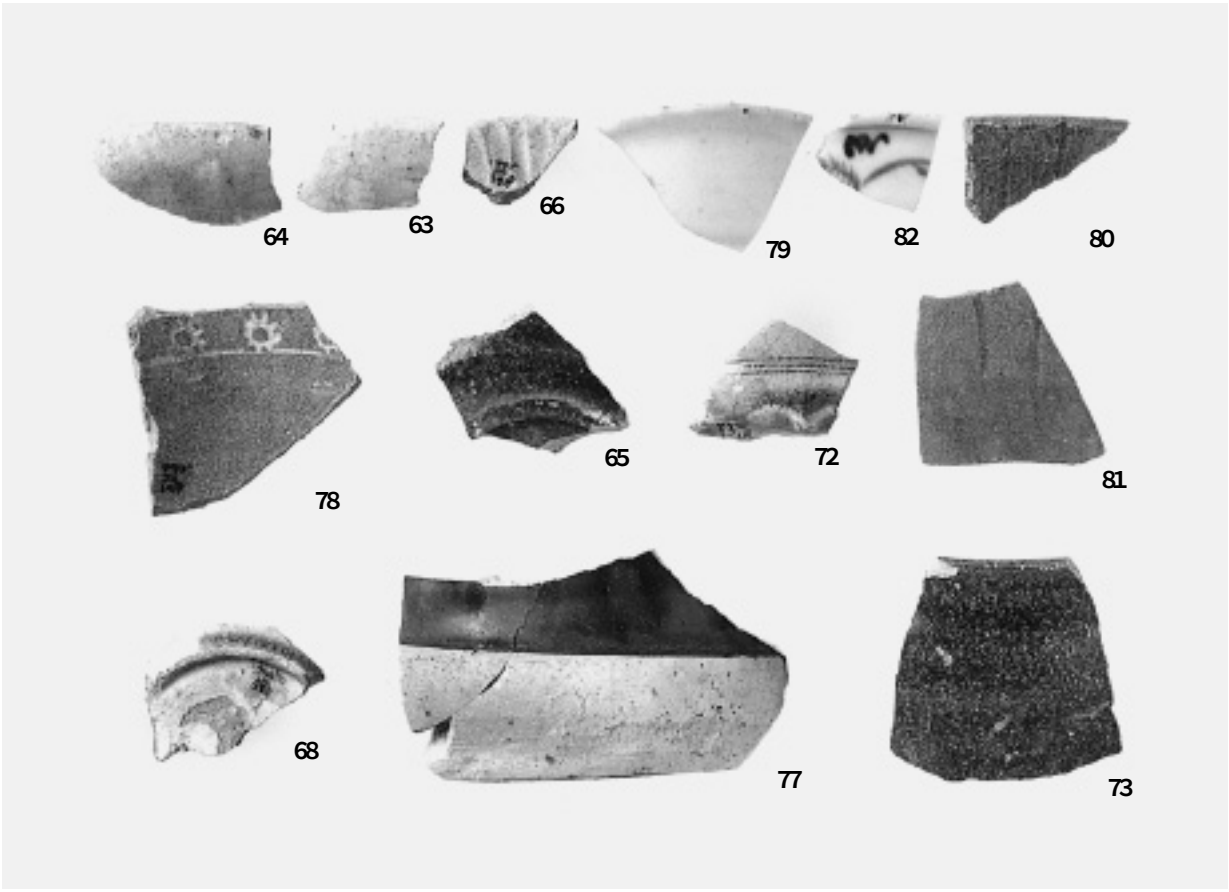


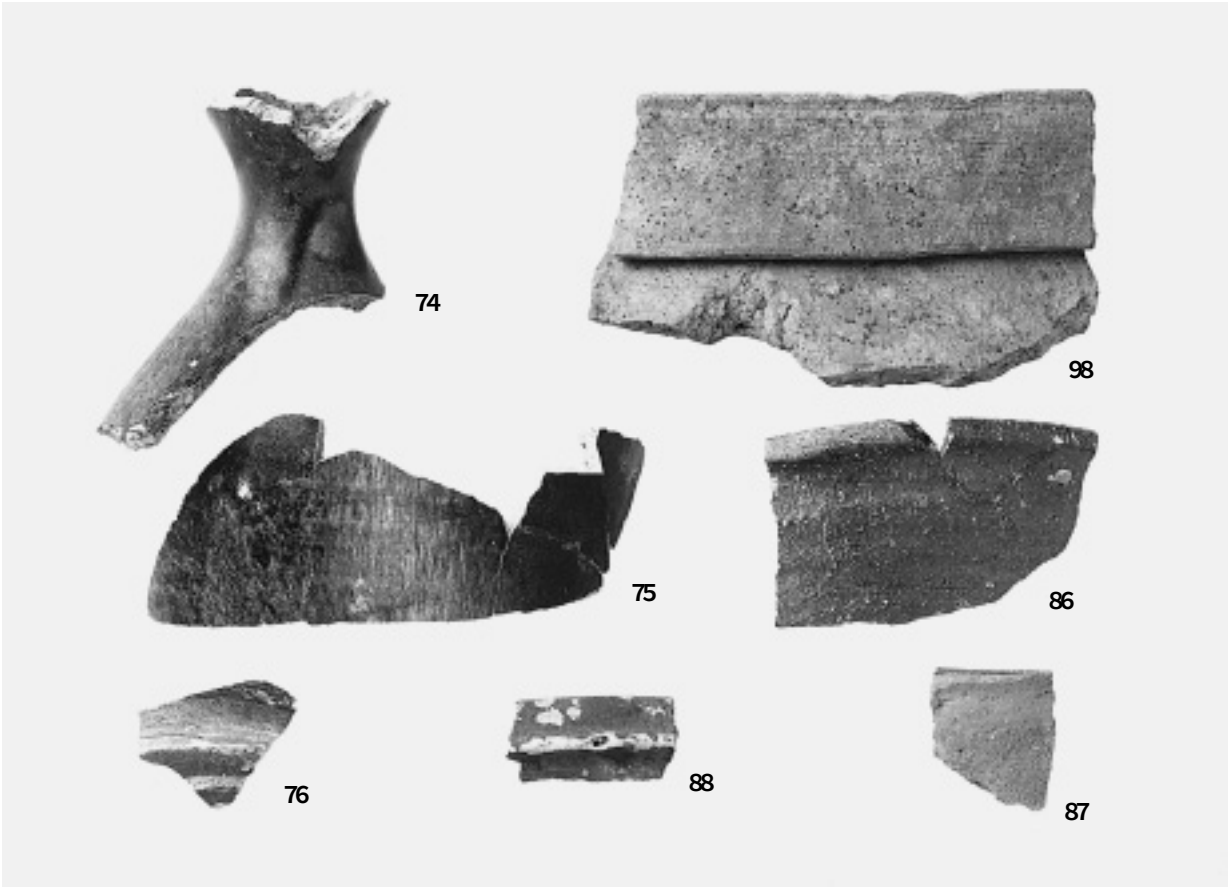




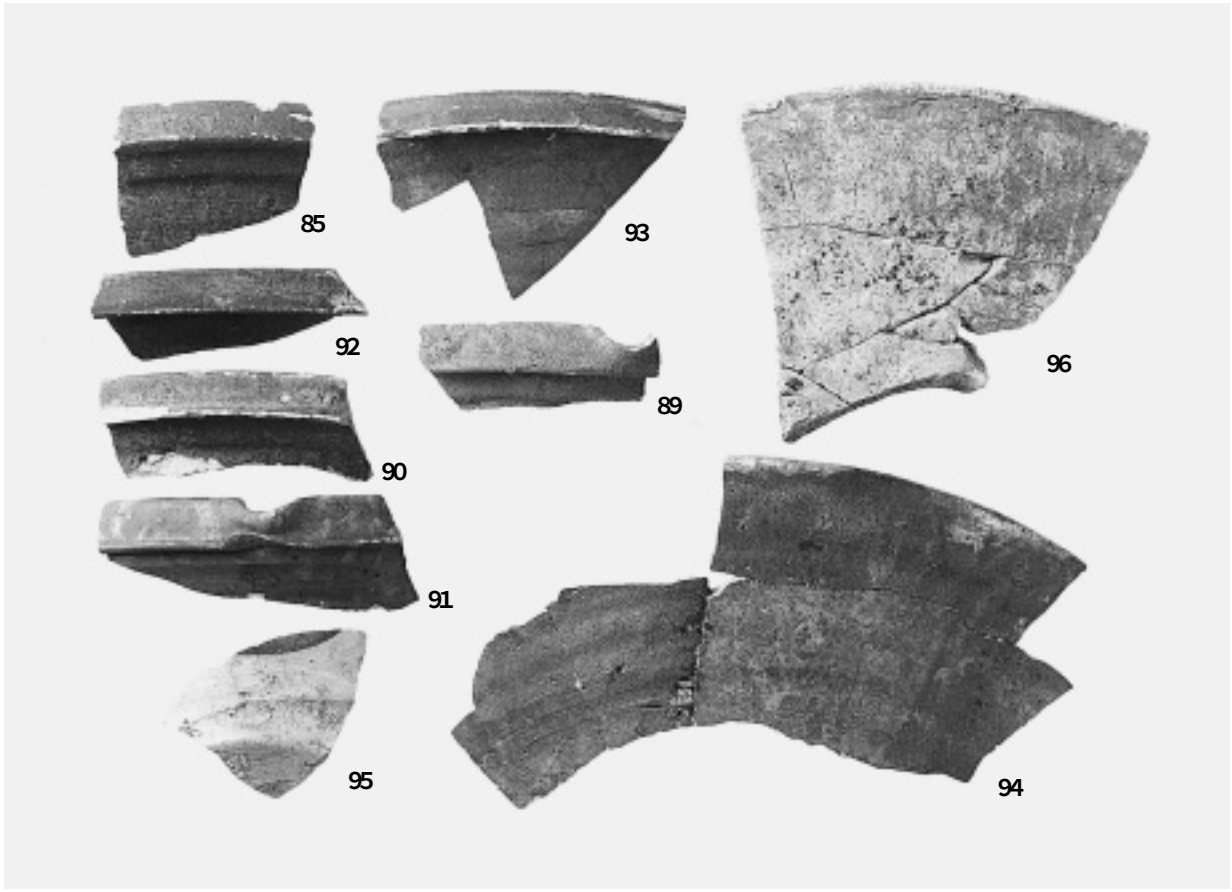


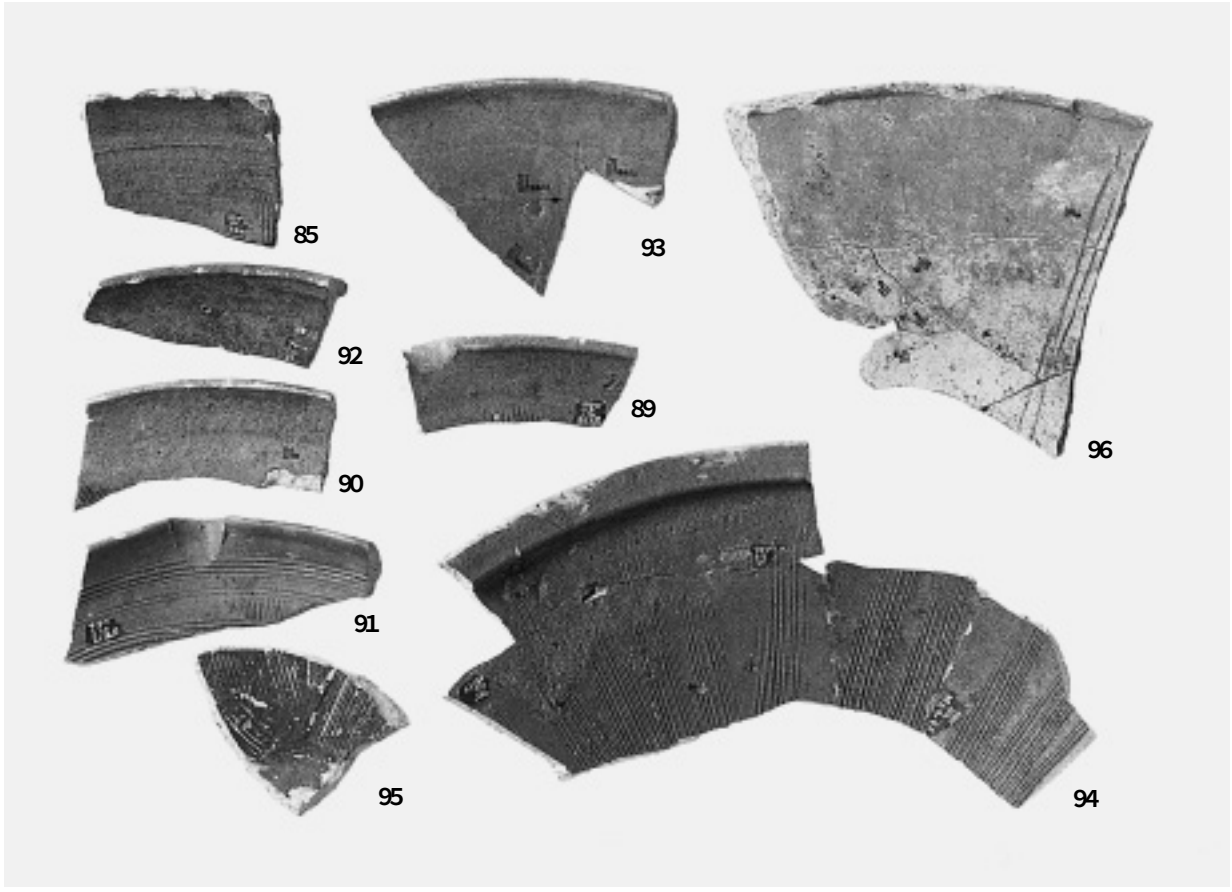
写真図版16　遺物





写真図版17　遺物





写真図版18　遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	あたごやまじょうせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	愛宕山城跡発掘調査報告書
編著者名	斉藤理、水谷憲二、水谷芳春、持田透、黒澤一男、野村敏江
編集機関	桑名市教育委員会
所 在 地	511－8601 三重県桑名市中央町二丁目37番地　TEL0594－24－1361
発行年月日	西暦2006年８月31日

所有遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
愛宕山城跡（あたごやまじょうせき）	三重県桑名市（みえけんくわなし） 大字上野（おおあざうえの） 字徳成、（あざとくなり） 大字東方（おおあざひがしかた） 字城山（あざしろやま）	242055 No.98	35° 3′ 47″	136° 40′ 37″	2005.12.5 ～ 2006. 3.31	2313㎡	宅地造成 駐車場造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
愛宕山城跡	城館跡	縄文 古代 中世	墓坑、溝、土坑、柱穴、土塁、郭、堀	縄文土器、 石錘、管玉、 土師器、 須恵器、 灰釉陶器、 山茶碗、 瀬戸美濃陶器、 舶載陶磁器	

本書の仕様
・判型――Ａ４版
・印刷――オフセット印刷
・ページ数　86頁
・製版――DTP ソフトにて処理
　　ポジ・ネガはフラッドベッドスキャナーを使用
　　スクリーン線数190線（2400dpi）
・製本――左無線綴
・用紙――表紙　みやぎぬ（はだ）170㎏
　　見返し　上質紙70.5㎏
　　本文・図版・その他　マットコート紙70.5㎏

愛宕山城跡発掘調査報告書

平成18年８月31日

発　行　　桑名市教育委員会

編　集　　株式会社イビソク

印　刷　　西濃印刷株式会社